

しく記述せられて居りますが、今氏の第一章の最初に之を記する所によりますと、

試ニ地圖ヲ展ヘテ本州中部ノ地勢ヲ査察スルニ、一鏈ノ火山島ハ遠ク南方馬利亞那列島ヨリ西北々ニ向ヒ一帶ノ淺海ニ沿ヒ小笠原列島及伊豆七島ヲ經テ斜ニ本州ヲ横斷ス、茲ニ幾多ノ火山噴起シテ所謂富士火山脈ヲ作ル、本州ノ中央ヲ走ル山脈ハ此所ニ到テ北方ニ彎曲シ北日本ト連脈ヲ斷ツ、抑々箱根ハ此脈中優大ノ火山ニシテ北ハ直チニ足柄第三紀層ヲ被覆シ其北麓ハ酒匂川ノ峽流ニ横切セラル、モ更ニ嶮嶺ナル道志山脈北ニ隆起ス、西北ハ大約十度内外ノ傾斜ヲ以テ御殿場ノ平原ニ延ビ緩斜ヲ以テ巍立セル芙蓉峰ニ對ス、故ニ此ノ平原ハ箱根富士兩火山間ノ低地ナルモ又一方ニハ黃瀬及ビ酒匂兩水ノ分水嶺ヲナシ地形上如此キヲ裾合谷(IntercolMne Valley)ト云フ、西南ハ開放シ山趾三島驛ヨリ沼津ノ平野ニ向ヒ、東北ハ刈野川其山麓ヲ迂回シ、川ヲ隔テ洪積層ノ小臺地トナリ、更ニ平坦肥沃ナル酒匂川洪積地ニ連ル、東南ニハ澎湃タル相洋ヲ控ヘタレバ山麓ハ不絶巨浪腰ヲ洗ヒ沿岸數十米突ノ峭壁ヲナス、南方ハ山勢長ク瓦リ極メテ緩坂ヲナシテ熱海火口壁ニ達シ玄岳ニテ一タビ高ク其以南ハ次第ニ低ク柏峠ニ到リテ天城山ヨリ來レル裾野ト接ス。

故ニ地勢南北ニハ崇巒峻峰蜿蜒スレドモ、獨リ東西ノ兩面ニハ平地ヲ控ヘ自然ト分水嶺ヲナシ其ノ水流ノ東部一般ハ相模灣ニ入り西部ハ盡ク駿河灣ニ注グ、此分水嶺ハ又關東關西ノ境域藩籬

ヲナシ地形上東海道ノ重鎮ニシテ此險ヲ得ルト失フトハ大ニ興廢存亡ニ關シ歷史上特ニ重要ノ地ナリ、北條氏此險ニ據テ起リ此險ヲ恃テ破ル、後世又此地ニ關門ヲ設ケ行人ヲ點檢スルニ至レリ。更に氏は、同第七章「結論」の所にて

中古代正ニ去リ道志山脈ノ峻嶺已ニ成ルノ當時試ニ双眸ヲ開テ南望スレバ、渺乎タル太平洋ハ一物ノ眼ニ遮ルナク伊豆半島ハ未ダ寸形モナク、況ンヤ白扇倒懸ノ芙蓉峰ニ於テオヤ、即チ駿河相模ノ兩灣ハ相連續シテ深ク北及ビ東北ニ彎入シ僅ニ筑波山ノ一角ヲ煙波渺茫ノ中ニ瞥見シ得シノミナラン然レドモ此等ノ水陸ハ豈ニ久シク其山貌ヲ改メズシテ止マンヤ、其山嶽ノ崩壞シ破壊セル者ハ次第ニ沖積シテ所謂足柄第三紀ヲ構成ス、是レ岩石ガ道志山脈ヲ成セル御坂層ノ層碎岩ニシテ子持岩或ハ其角稜岩ノ至厚ニ發育セルニテ知ラルベク、火山モ漸次其活動ヲ始メタルハ此等ノ子持岩中ニ富士岩ノ破片ヲ見、加之ナラズ其膠着物ガ次第ニ凝灰質トナルニテ明ナリトス、而シテ偉大ナル側壓力ヲ受ケ爲メニ足柄第三紀層ヲ摺曲セシメタリ、最新世ニハ各所ノ火山頗ル優勢ニシテ噴出セル灰砂ハ廣ク四方ニ飛散シ海底ニ沈澱シテ駿河相模ノ沿岸及伊豆三浦若クハ房州半島ノ第三紀層ヲナシ、箱根熱海其他伊豆地方ノ諸火山ハ多ク此ノ時ニ其基礎ヲナスモノナリ。

平林氏の足柄山の地勢及び其の地質形成に就ての説明は吾人の大に参考となるべきものです。乃ち

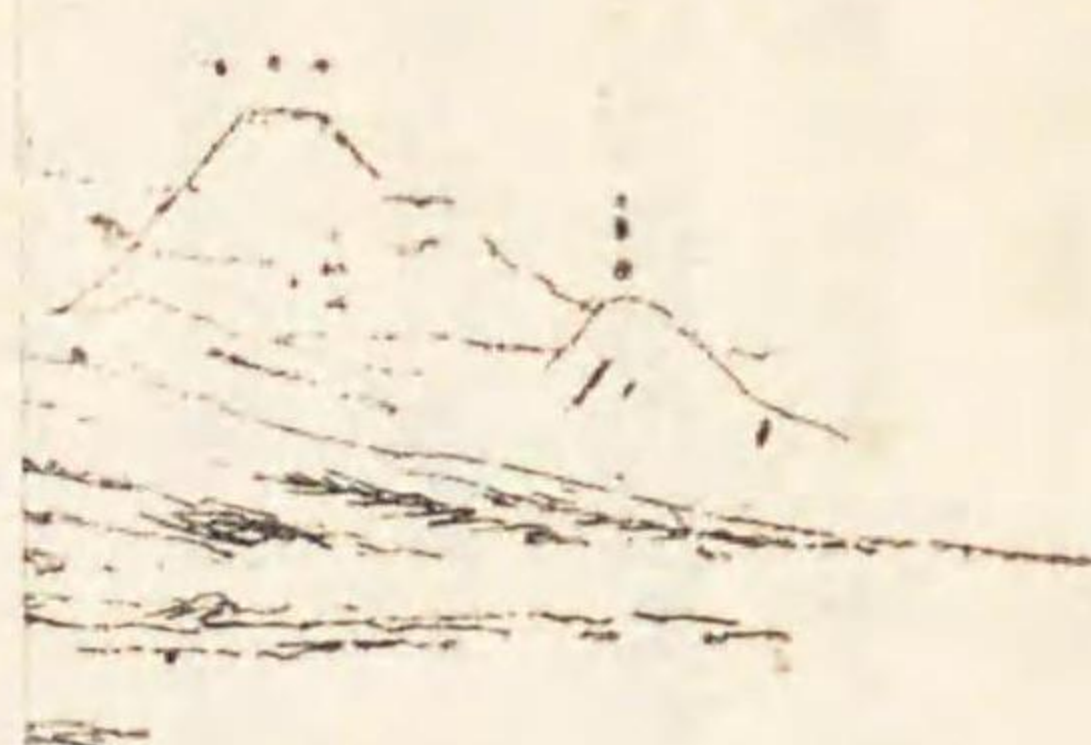
足柄山は第三紀層の擡曲から出來た所で、之れが爲めに、其の位置が他の諸山嶺よりは比較的極めて低いから、自然に峠が出來、加之駿相兩面に此處から溪流の流る、關係も之に加はり、交通に便利となつたものであらう。足柄山の太古から足柄の坂おしがらとして關東關西の盛な往來をする様になつたのは、少なくとも是等の諸點が相合した結果と申して誤はなからう。

足柄山の位置たる一方に金時山(標高1213)が聳え、また一方に矢倉岳(標高897)が控えて居る。足柄山の最頂は頗る平坦で廣く自然に立派な心持のよい峠となつて居つて、(標高750)此の中心點から相模の方に河が流れ、また駿河の方にも河が流れて居ります。足柄の往來は必竟是等河川に沿ふて上下する譯であります。『新編相模國風土記』は「足柄峠」の所に斯様に記して居ります。

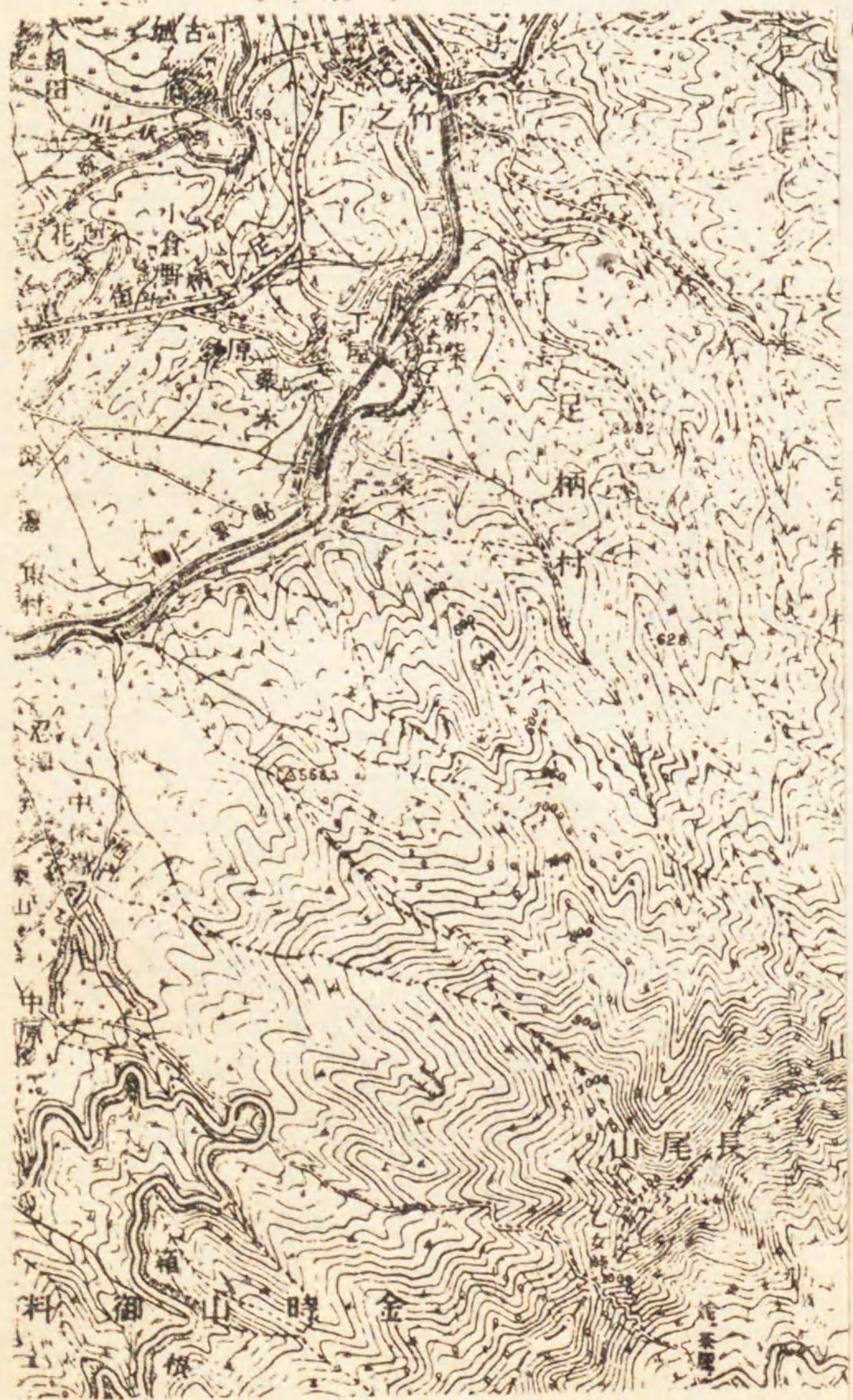
足柄峠——西方足柄山ニアリテ、駿州駿東郡ニ跨レリ、彼郡内竹下村マデ、二里二十九町二十間ノ里程ナリ、(登一里二十九町二十間、降一里、幅六七尺)峠ノ頂上ヨリ十餘町餘、此方ヲ駿相二州ノ界トス、頂上ニ足柄古城ノ遺趾、儼然トシテ今尙存セリ、城跡ノ邊眺望尤佳ナリ

足柄山は固より此の附近一帯今や殆んど樹木と云ふ樹木は伐採せられて、隣れにも丸裸まるはだかの山、禿山はげやまとなつて仕舞ひ僅かに金時山に少し許り樹木があるのみです。けれども昔の足柄山は斯んな山ではなく樹木鬱蒼として茂り合ひ全く森林地帯であつたのであります、足柄山を見るにはいつも此の考で見

富士山
足柄峠
矢倉岳



足柄峠附近の



地圖

富士山
足柄峠
矢倉岳

明神山

明星山

神山塔ノ峰

駒岳

上双子山
下双子山
要害山

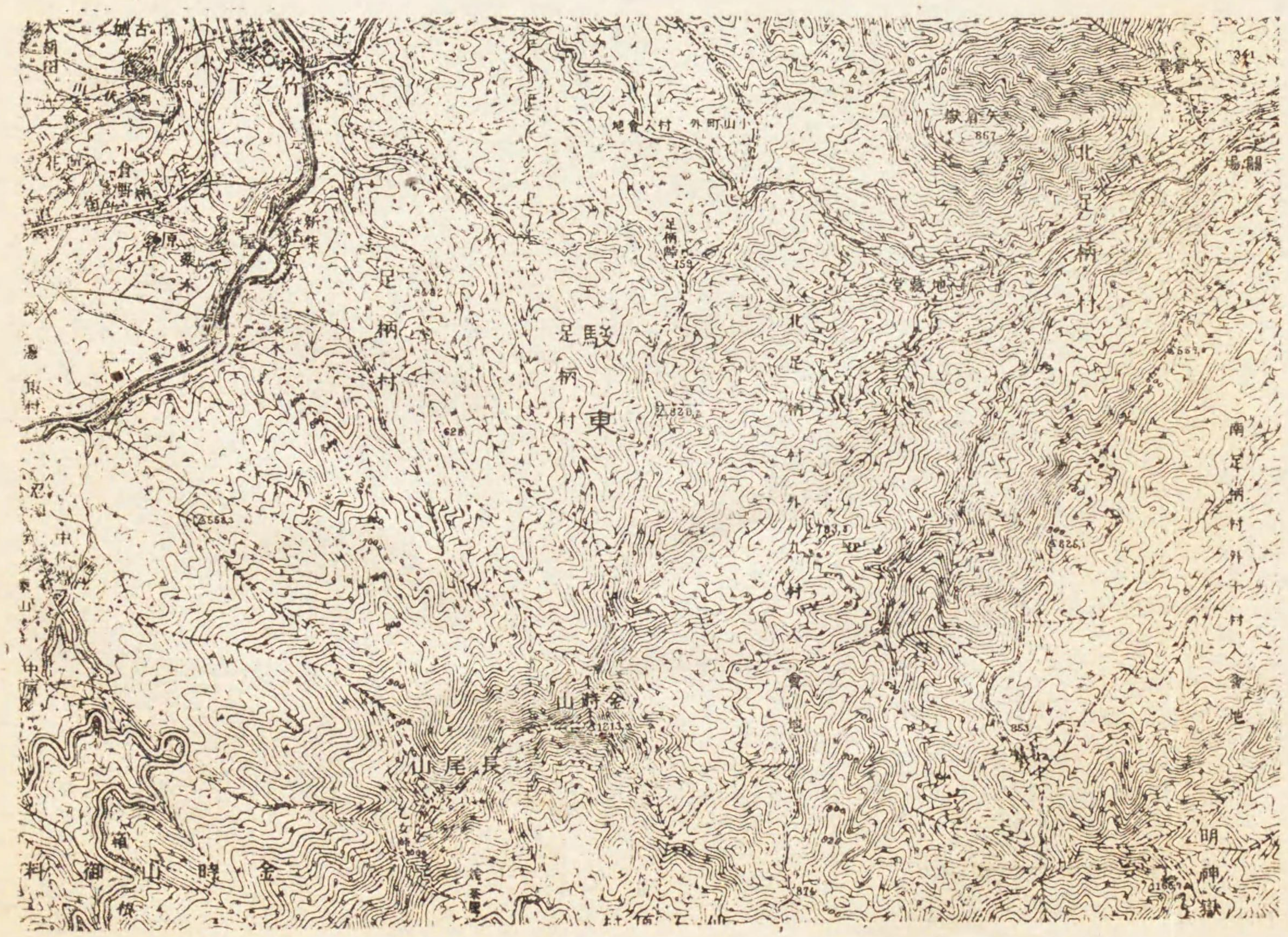
聖岳

熱海火山

真鶴崎



(リヨ告報會査調防豫災震) 嶽山の近附峠足



圖地近附峠足

く樹木鬱蒼として茂り合ひ全く森林地帯であつたのであります、足柄山を見るにはいつも此の考で見

ねばなりません。現に山頂に一小水溜が今にも残つて居るが、村人の迷信（早魃の際、此の水中を穢せば降雨となる）から此の水溜の周圍に樹木が少し許であるが繁茂して居ります。這是此の山に森林があつた最後の紀念物であつて、之で昔の其の様を偲ぶより外に仕方がありません。

山頂にはいかにも『新編相模風土記』に記す古城の遺址らしい所も認められますが、今は茲で何物をも得ない、唯だ土壁らしい址が僅に認めらるゝのです。けれども此處は峠中最も高い位置で地面も平坦でまた四方を見ますに最も眺望の佳い所で、即ち此處に立つて試に駿河方面を望みますと、諸嶺峰は互に起伏重疊し、溪流の流るあり、就中富士の山は殊に高く天空に聳えて居ります。更に眼を轉じて相模方面を望まなか、酒匂川眼下に流れ、一帶の平地パノラマの如く、沃野大に發展し、洋々たる相模洋は靜かに青疊を敷きたらん様で、實に美しい一幅の繪畫です。山麓より登り登つて此の峠の頂上に到着した者は誰れか其の眺望の佳絶なるに驚かぬ者がありませう。這是苟くも人類が此の坂を通過せし最初、よしんば木の間から之を望んだとしても、此の感はあつたでせう。宜なるかな、原史時代に彼の日本武尊の命が此處から海洋を望まれて三歎せられましたと云ふ傳説のあるのは、尤の事と存じます。

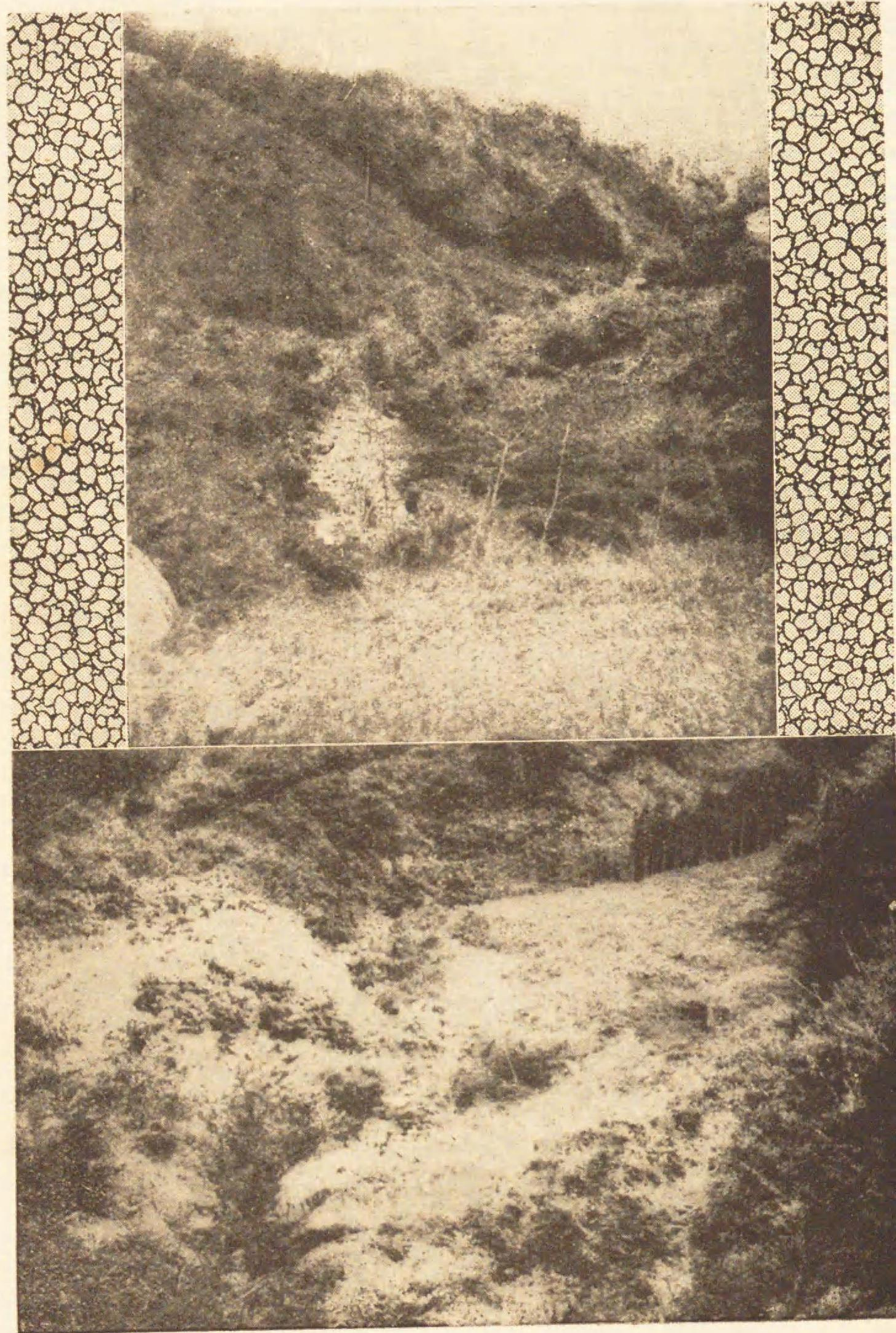
此の峠の頂上へは、駿河路から登るには、昔は先づ竹の下で一泊し、また相模路より登るには關本

で一泊したもので、即ち此處を上下するには、竹の下↓峠↑關本でありまして、兩所から上下するには溪流がありますから、之に沿ふてしたものであります。當時は(A)最古道、(B)古道、(C)新道の三路がありますが、Aは主として溪畔に沿ふ道で、今は或る所は其跡存在し、また或所は既に跡の見えない所もあります。(B)は(A)を通りますが、また別に山頂の稍や廣き脊に路をつけ、之れに大きな松の並樹が生えて居ります。松の並木は竹の下から山頂に達する方面に存在して居ります。(A)は(B)と並行して存在して居る様であります。此の(B)の古道は蓋し鎌倉——足利時代のもので、(A)は之よりズット以前のものでありまやう。更に新道の(C)は近年になつて陸軍當路者の作つたもので、這は主として相模方面から山頂に達する箇所によく認められます。私は以上(A)(B)の道路を通過するにつけ、そゝろに昔の足柄の事を追想し、今昔の感にたえません。

此の足柄峠(坂)は古來人文史上、極めて興味ある場所であつて、關東平野の民族史、文化史等はまづ此の基點から出發せねばなりません、されば私は之れから此の峠(坂)と人文との關係を書いて見やう。

有史以前の足柄山

足柄峠最古道よりの眺望



全上峠古道

(1)

原史時代 (Protohistoric) に足柄山がすでに最も大切な交通路になつて居つた事は略ぼ推知せられませんが、さて其の以前の石器時代即ち有史以前 (Prehistoric) の當時にあつては、同山は抑もどんな關係を有つて居つたであらう？ 此の疑問は固より何等文献の徴するものが無いから、已むなく之を考古學上の事實に據て判断せねばなりません。足柄山は果して原史時代に於けるが如く有史以前に於ても關係を有つて居るであらう？ 這は極めて面白い且つ興味のある問題でありました。

私は先日武藏野會員諸君と共に足柄山の横斷を試みましたが、其の際一行中の八幡一郎氏は同山の山頂 (標高759) に殆んど達せんとする所で、左のアイヌ派土器の木葉を印せられたる底部破片一個を發見せられました。這は色は褐色を帯び質は稍や脆く、長さ二寸三分、(底の木葉に準じて) 厚さ三分半で、明かに厚手式土器であります。此の土器は別に遺物包含層中にあつたのではなく、山道の路傍に散在して居つたものです。這は恐らく山上の樹木が伐られ、草が取り去られ、土壤が無くなり自然に露出したものと思はれます。此の土器は單に一小破片に過ぎませんが、之に據つて確かに此の足柄山の山頂に彼等の遺跡の存在する事は認められます。

此の一個の土器は、彼等が有史以前の當時此處に住まつて居つた住居の遺物として見るべきものか？ 將た交通往來の途中に残したものと見て見るべきものか？ 此の疑問に向ては未だ何とも確然云ふことは出来ないが、私は之に對して斯く答へんと欲するものであります。

(11)

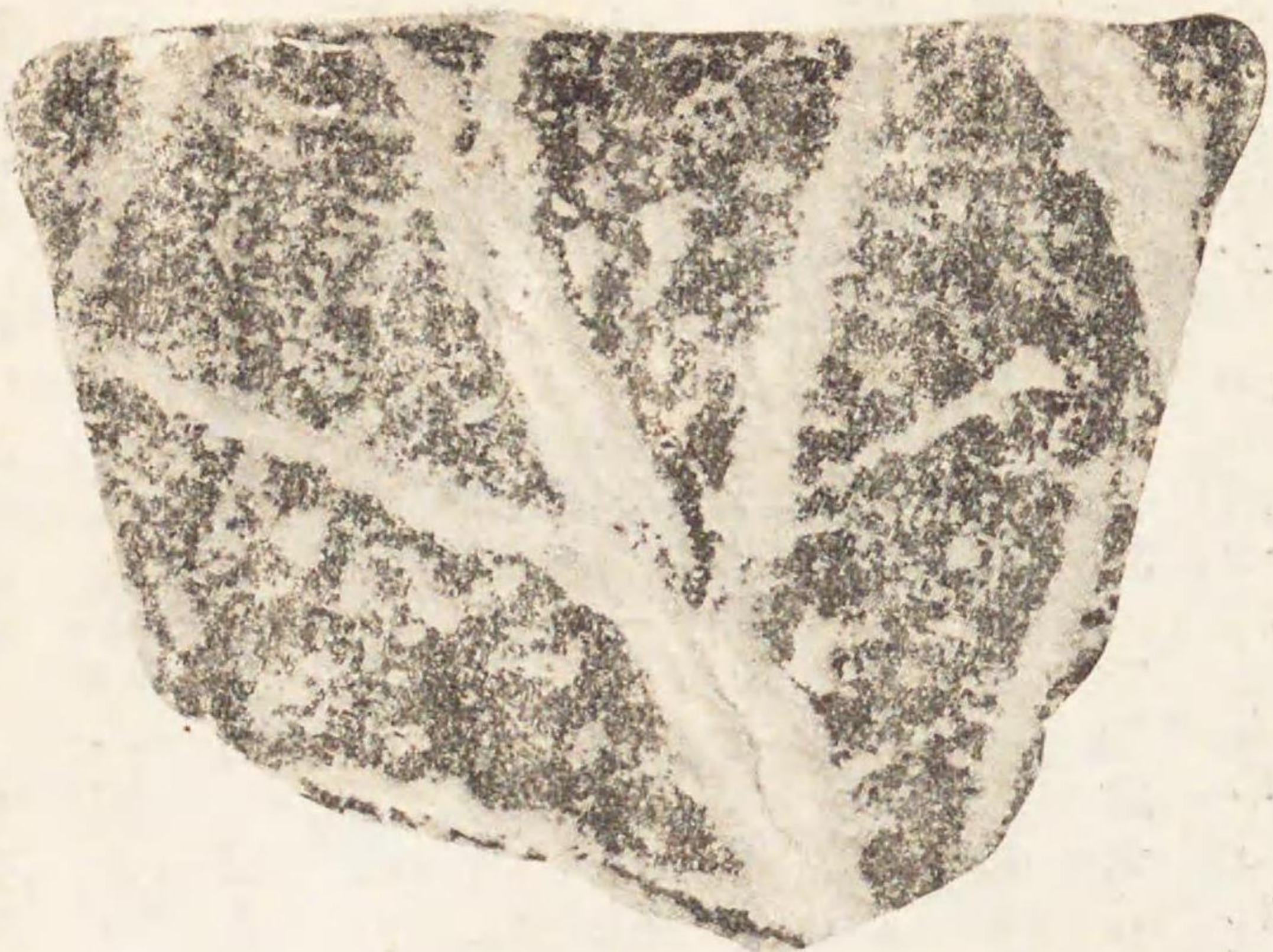
關東のアイヌの遺物は、後章『武藏野の有史以前』の中に記しました如く、其の土器の形式から云ふと、先づ厚手式と薄手式との二群から出來て居りまして、前者は主として山の手、山地に存在し、後者は主として當時の海岸線か又は海岸線と連続せる河流または湖沼附近に存在して居ります。而して尙ほ前者は狩人であり、後者は漁人であります。今私は足柄山上發見の土器を以て、此の二派と比較するに、這は前者の狩人派に屬するもので、また之れが山上に存在する點から見ても一層之を確める事が出來ます。

厚手式土器は武相の海岸を離れたる丘陵から山上に分布し、更に甲信飛等の高地に及んで居ります。小松眞一氏（人類學雜誌第三十七卷第五號伊豆海岸の石器時代遺跡に就て）に従へば伊豆の如きは殆んど全く厚手式土器のみであります。以て是等の地方が當時狩獵の盛んに行はれた事が知れまじやう。而して其の時代には是等一帶の丘陵、山地帯はすべて大樹巨木が充滿した鬱蒼たる大森林であ

つた事は明かで、歴史時代に於てすら箱根足柄から伊豆にかけて森林であつた事は固より申す必要はない位であります。さうすると足柄山上の遺物の主人も山上の鳥道を往來したのは疑ひのないこと

で、而かも此處は豆相の山中で最もひくい平坦で、横斷するには頗る便利な場所でありまじやう。そこで彼等は當時すでに此處を越えて相州から、駿甲の方に往つたり來たりしたものでなからう？ 若しも之れが其の當時に行はれて居つたとすれば足柄山が峠として存在して居つたのは、既に已に古い有史以前のアイヌから始められたと申してよろしからう。

尙ほ茲に一言なすべきは、足柄山頂で發見した土器底部に印せられた木葉であります。土器の底に木葉の押し付けられて居るのは申すまでもなく、其の製造の當時粘土で作つた儘のものを木葉の上に置いたから自然に木葉の形が印



片破の部底の器土代時器石るせ印を葉木

せられたのであつて、而かも此の土器が同植物の葉のあつた季節に作られた事は明かであります。然ら

ば次に起る問題は抑も此の木の葉は何んな植物であらう？と云ふに、之を多くの他の木葉と比較して見ると、カシワであります。さうすると此の土器を製作した當時の場所には住居の傍にカシワの樹があつた事が推知せられます。一體カシワの様な落葉樹は潤葉樹や針葉樹などの天然または人爲に焼かれた場所に生えるもので第二期林でありまじやう。土器の底部にカシワやナラを押し附けられたものは石器時代の土器に多く存在して居りまして、足柄の土器も其の一事實であります。是等の上から深く考へて來ますと、當時彼等民衆の住まつて居る舞臺は假令、一面の鬱蒼たる森林であつたとしましても、其の住家や村落の一小周圍は住むに都合のよい様に焼き切られ之れが爲めにカシワやナラが發生したのではなからう？斯く考えると此のカシワやナラの落葉樹がむまく説明が附いて來ます。即ち當時彼等住地の近い所には落葉樹などが生えて居つた事が其土器の底部の木葉で略ほ推知せられます。更に之に據てまた足柄山上の土器も落葉樹のあつた場所で造られた事に氣附かれます。然らば此の土器は當時其採集した場所で製造せられたもの？將た他で製造して此處に持つて來たもの？此の事は今私は確かに其の何づれとも申されませんが、兎に角、此の土器を製造した場所は假令何處であつても落葉樹のあつた所である事だけは確かであります。

竹の下のり足柄峠を望む



足柄峠より小原方面を望む

歴史時代の足柄山

(1)

飛鳥——奈良の朝の如き歴史時代 (Historic) からズット前の原史時代 (Protohistoric) から観た足柄山は民族史上抑もどんな位置に立つて居るであらう？ 抑も足柄山の位置は武相等の關東（吾妻、阪東）から關西に出で、また關西から關東に入る唯一の場所であつて、此處を取り除くと最早當時にあつては頗る都合のよい交通路は無い譯になります。斯く云ふと今日の或人々は「關東關西兩路の交通は必ず足柄山のみに限らない、其他の諸所にもよい通路はあつたであらう」と云はるゝであらうが、實際によく當時の事情を研究して見ると原史時代の陸路交通は全く此の山より外に道はなかつたのであります。原史時代の頃の關東の平野は有史以前ほどで無いとしても、尙ほ森林や雜草の繁茂して居つた所で、山上は尙ほ固より有史以前から引き續いた恐ろしい、闇い密林でありました。殊に武蔵相模から連續する伊豆諸山の如きは大木の森林に取り圍まれた神祕的の場所でありました。關東に這入つて來るには高山深林地を横斷して來ねばならぬが、不幸にも當時是等の地方に最も都合のよい安全で且つ便利な交通路はない。唯だ此の要求に應ずるには、一つの足柄山があつた許りです。

足柄山が關東に入るに最も便利である理由は。第一、山其ものが低い峠をして居る事。第二、之れに溪流が兩方面に流れて居るから、是等溪流に沿うて上下すれば極めて安全で便利なる事。第三、兩山麓往來の距離が最も短い事。第四、兩山麓地帯が廣い大河域平野となつて居る事等から原因するのでありませう。是等の事情から終に足柄路が自然に開けたものと思ひます。

(II)

若しも原史時代の當時に、足柄山を横斷せずして、關西から武相總等の關東の地に入らんとせば、どうしても伊豆の岬角を廻つて相摸灣に到着するよりは仕方がないが、這是頗る大膽なことであつて中々容易のことではない。けれども紀州や伊勢あたりの漁人が小船に帆を擧げて幾多の危険を犯して伊豆の島々や伊豆の海岸に沿ふて武相總に到着した事はまさにあつたであらう。這是大島の口碑に紀伊と關係ある事や、乃至は彼の阿波忌部等の一大移住はどふも此の海路の往來であつた様に思はれます。或は海部うまへの人達の關東移住も此の海路をとつたものと思はれます。是等の事實は實際に當時あつた事であるが、陸路の往來、否な一般の往來は全く此の足柄山よりしたものでなければなりません。海路の往來は別に文を草して更に改めて一篇書いて見る考であります。

(III)

原史時代にすでに足柄山が、往來の峠として極めて重要な位置にあつた事は、彼の日本武尊の此の阪路を通過なし給ふた傳説が優に之を語るものであります。此の傳説は即ち當時此の山が民衆往來の大切な場所であつた事を實際に物語る何物よりも頗る雄辯でありましよう。まづ『古事記』により

ますと

……自其入幸。悉言向荒夫琉蝦夷等。亦平和山河荒神等而。還上幸時。到足柄之坂本。
於食御粮處。御坂神化白鹿而來立。爾即以其咋遺之蒜片端待打者。中其目。乃打殺也。故
登其坂。三。歎。詔云阿豆麻波夜（自阿下五字以音也）故號其國謂阿豆麻也。……

尙ほ命は足柄山（坂或は峠）を越えて、甲斐國に出でまして、先づ酒折宮に御足を留めさせ給ひ、更に信濃に入り其國の科野之坂を越えて尾張國に赴き給ひました。這是『記』に「自其國越科野國乃言科野之坂神而。還來尾張國……」と記して居るが、科野之坂とは今日の同國下伊那郡の後、美濃に境する御坂峠の事であります。此の記事は原史時代の當時に於ける交通路を極めてよく暗示して居るではありませんか。

武相地方から西に出るには足柄山は最も適當の通路で、また其の山頂に立つて東方を眺めますと眼下に相模洋は開展して居りまして、命が歎足なしまして、「阿豆麻波夜！」と申されましたのは、其地

形から見て、まさに斯くあるべきことで、斯くの如きは幾多の困難をおかして足柄山上に登つて東方を眺めは何人も古から此の感想はあつたものと思はれます。

申すもかしこけれども命の足柄山を通過せられました傳説は、また一方から考へますと、之れ明らかに吾人祖先が原史時代に關東——關西往來には必ずや此の山を通過した事を語るものであつて、吾人の最も注目すべきでありましよう。

(四)

『古事記』には以上の如く、命は足柄山(坂)を越えましたが『日本紀』には命は足柄山を越え給はず、碓日坂から信濃に入り、信濃坂、今日の(下伊那の御坂峠)を越えて居られます。而して命は碓日坂上で東南を望み給ふて「吾嬬者耶」と三歎せられて居られます。尙ほ『記』の足柄坂の神が白鹿に化して來ましたから蒜の片端で打ち給ひしとある事は『紀』は信濃坂の所に之と同一の文がありません。さうすると『記』『紀』に於ける記事は互に相違して居ります。果して然らば斯くの如き場合には何づれの方を正しとすべきでありましよう？　這是古來二説反對論の起る所であります。

私から見ると、此の矛盾した説話は『記』『紀』編纂當時には共に行はれて居つたものと思ひます。此の話は和銅の以前からすでに語部達の傳へて居つた傳説であつて、所謂命の御通過に就ては以上の相異つた傳説が形成せられて居つたものと考えます。而して『記』は一方の傳説を探り、また『紀』は一方の傳説を探つたものと存じます。是等の異説の生じた理由は、之れ關東に入るには足柄と碓日の兩山(坂——峠)を横斷せねば陸路として道路は無い。而かも之れ當時の二大公路であります。『記』『紀』編纂當時にあつては、すでに命は足柄を通過なし給へり、否な碓日を通過なし給へりと二つの異論が生じて居つた様に思はれます。這是兩山が古から餘り通路として有名であるから此の解釋に二説が自然に出來たものでありましよう。兎に角此の二説のあるのは、即ち原史時代に武總相等よりすれば足柄山、上野下野よりすれば碓水嶺を通過した事を暗示するものであります。更に兩説が符節を合するが如く信濃の坂たる今日の御坂峠を經過して居るのも、またよく其の時代の通路を示して居るではありませんか。

足柄から甲斐に出で信濃を經過して美濃より尾張に出づるには必ずや御坂峠を越えねばなりません。更に碓日から入つて濃尾に出づるにしても、また御坂峠を越えねばなりません。是等の三山を別に離して關東と關西との關係を見やうとせば、這是恰かも木によつて魚を求むる亞流であつて、頗る笑ふ可き極みであります。足柄山(坂——峠)に神あり、手向けして行きますが、信濃坂の御坂にも、また

神があつて手向けして行きます。即ち此の二山は當時の民衆から同一の信仰其他の思想を以て迎へられて居りまして、共に頗る神聖なる峠坂として居つた様であります。碓日の方は是等は文献に見えま

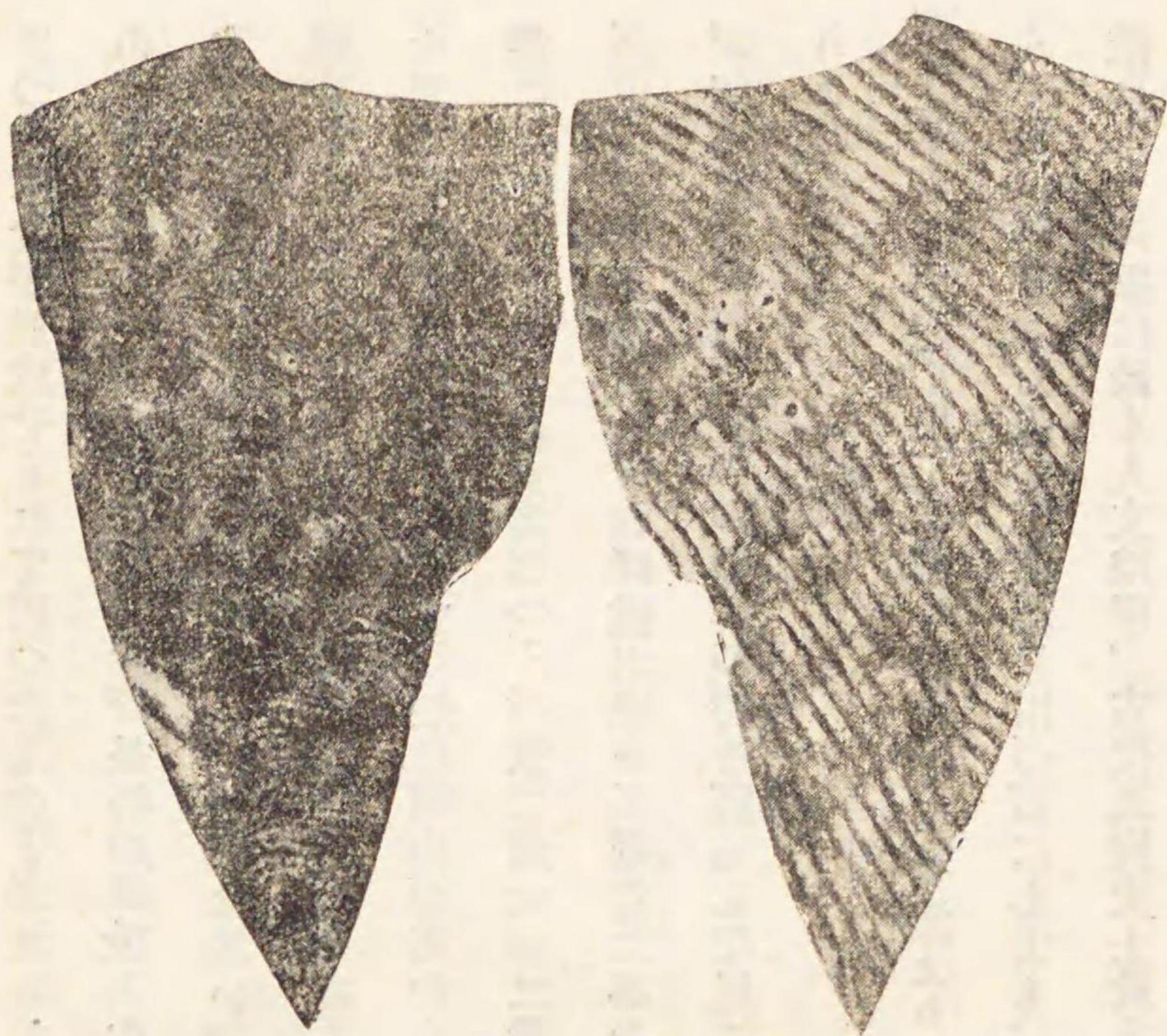
せぬけれども、右二山の状態から考えて來ますと、また同一であつたらうと思はれます。

歴史時代に於ける考古學上の事實

(一)

原史時代に足柄山が交通路になつて居つたことは以上の如くであるが、さて之を一層考古學上から確かに證明することが出来るであらふ？ 若しも此の證明が明かに出來るとすれば、同山の交通路になつて居つた事は、彌々學問上確實となつて參りましよう。

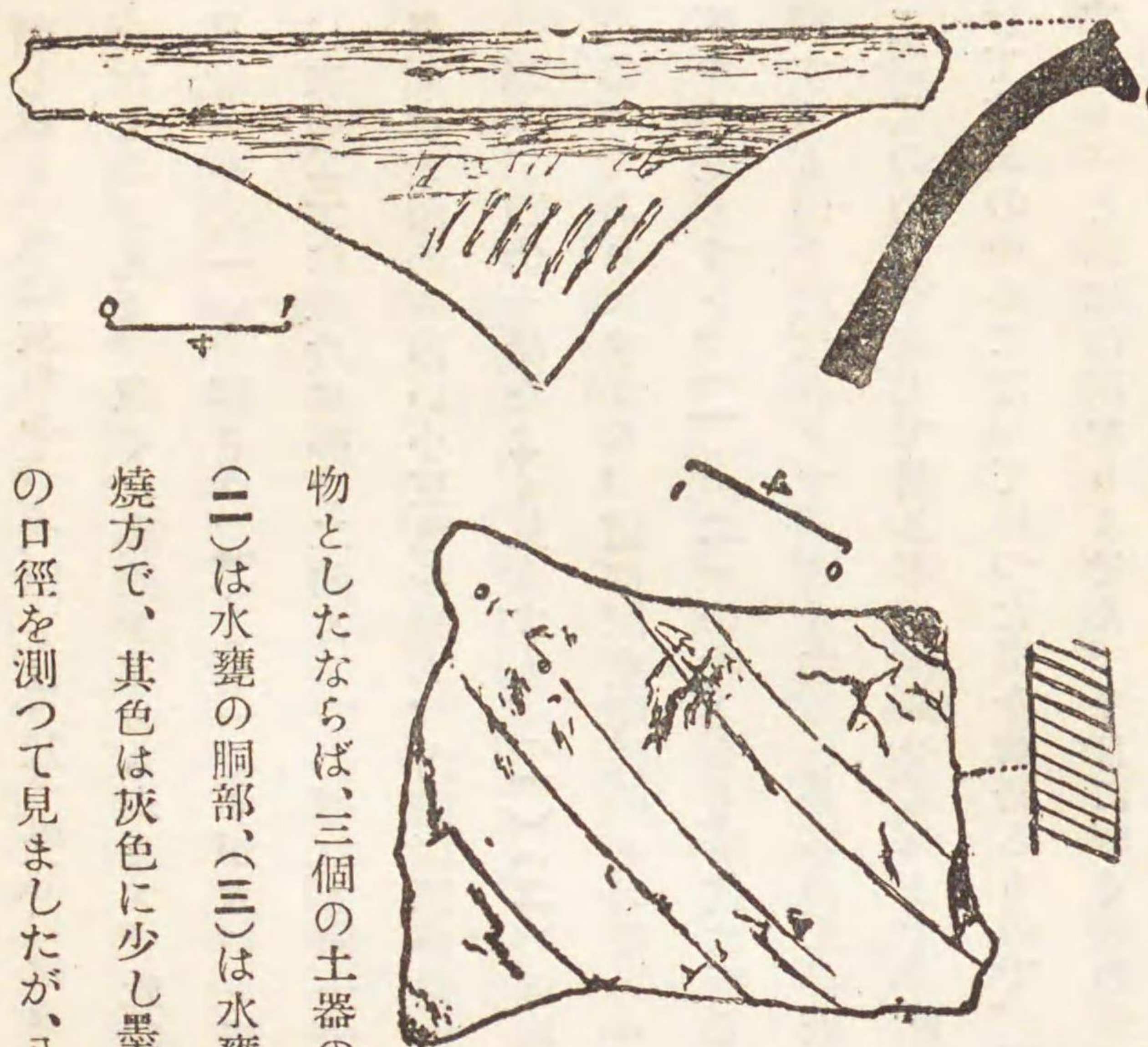
然るに之を證明するに都合のよろしい材料



表の片破器土部祝

裏の器土同

があります。這は同山頂(峠)から祝部土器(スエノウツワ)を掘り出すことであつて、右に圖する祝部土器の破片は即ち之であります。



是等の祝部土器の破片は、足柄山頂の聖天祠の傍に近頃野菜を植る爲めに小さな畑を作つたが、其際掘り出したもので、尙ほ此處の土地を耕せば、此の種の物を掘り出すさうであります。(今茲に圖する遺物は私どもの同山跋涉當時に聖天祠主人より贈られしものです。)

今私は山頂から出た祝部の破片を見ると、破片は都合五個ばかりありますが、之を完全の

物としたならば、三個の土器の種類から出來て居つて、即ち(一)は水甕の上邊、(二)は水甕の胴部、(三)は水甕の胴部であります。而して(一)は厚さ二分、堅い焼方で、其色は灰色に少し墨色を混じた様です。這は明かに水甕で、今試みに其の口徑を測つて見ましたが、八寸あります。次の(二)は胴部で、質は前と同じく

頗る堅く、色は灰色を帯ぶ、厚さは二分、外部にはタ、キ目が附いて居り、また内部には渦紋の槌でたたいたものと見え、薄く其渦紋が認められます。此の上邊と思はるゝ物が一個ありますが、其の口徑の尺度、一尺一寸、厚さは(一)と同一ですが大いさはこれより大きい水甕である事が知れまじやう。更に次の(三)は破片は都合二個あるがいづれも同一のもので、厚さは四分、焼方はまた頗る堅く、色は外面は光澤ある薄い小豆色を呈し、内面は薄い褐色を呈して居ります。

以上三種の土器をよく見ますと、(一)(二)は明かに古墳から出る土器と同じ祝部土器(所謂朝鮮土器)でありますから、這は原史時代のものでありまじやう。而して(三)は其の焼き方、製作の状態等から見ますと、(一)(二)の物よりも時代は新しく、這は藤原時代から其以後あたりの歴史時代に屬するものと思はれます。さうするとは是等の土器破片の上から云ひますと、是等の土器は少なくとも二時代の物の存在して居る事が推知せられます。此の事實は足柄山(峠)が原史時代から歴史時代にかけて往來の中心になつて居つた事を物語るもので、這は延て彼の傳説や歴史土の事實を更に一層證明するものと云はねばなりません。今日に斯くの如き山頂に當時の遺物の残つて居るのは實に面白い事ではありませんか。

尙ほ足柄の頂上より相模の方に下り來り關本附近より下の地方には古墳が多く存在して居ります。

また駿河御殿場から少しく足柄山に向て登つて來る途中には古墳が多くあります、而かも大きなものも今回の調査で發見しました。兎に角之で考えますと、原史時代の足柄坂の兩山麓附近に聚落のあつた事は、是等古墳の分布で知る事が出來ます。

(二)

美濃から信濃に來るには、木曾路の開通せぬ以前は、下伊那郡の御坂峠を往來したもので、此處は實に當時に於ては關西方面から信州(更に關東)に來るには唯一の公道で彼の尊の此處を通過なし給ふた傳説があり、また奈良朝時代に此處を通過した人の多かつた事は『萬葉集』によく之を記して居ります。當時此の峠を上下する人々は幣束を山神に手向して行つたものであります。

私は一昨年、武藏野會員、市村、榊原、伊藤等の諸氏と此の峠を親しく跋涉し種々研究調査する所があつて、此處の峠の上で祝部土器破片の多く散布することを發見し、之を採集しましたが、是等の祝部土器も新舊の別があつて、即ち久しい間、此の山を往來した事實が之で窺はれます。更に御坂峠を下つて下伊那郡に這入て來ますと古墳の分布は實に夥多しいもので、是等は當時の御坂と對照していかにもと思はれます。斯の如き事は、足柄山(坂、峠)と同様であつて、今此の二者を比較して考える、是等の二山がいかに原史時代から盛に往來せられて居つたことがよく推知せられます。

奈良朝及び其の以前の文献に見えたる足柄山

(一)

原史時代に足柄山(坂または峠)がすでに交通路になつて居る事は日本武尊の御跋涉の傳説で、之を證明せられます、さて尙ほ和銅の頃に出來た『常陸風土記』によると、其の開卷の最初に於て斯く記して居ります。

常陸國司解。申ニ古老相傳舊聞事。

問ニ國郡舊事。古老答曰。古者自ニ相模國足柄岳坂一以東諸縣。摠稱ニ我姬國。是當時不レ言ニ常陸。唯稱ニ新治、筑波、茨城、那賀、久慈、多珂國。各遣ニ造別一令ニ檢校。其後至ニ難波長柄豊前大宮臨軒天皇之世。遣ニ高向臣、中臣幡織田連等。摠ニ領自レ坂以東之國。于時我姬之道分爲ニ八國。常陸國居ニ其一。矣。

此の傳は奈良朝以前のものであつて、即ちまた原史時代に極めて深い關係ありと申してよろしい。之れに據て見れば今日の相、武、總、野、常等の關東平野は別に國名はなく、足柄岳坂の以東を單に『アヅマ』とのみ稱したのであります。また足柄岳坂の以東であるから『坂東』と云ふ地理學的名が自然に附けられたのであります。さうすると此の山は當時すべての起點となつて居つたもので、江

戸時代から今日に至るまで、日本橋が起點になつて居つたと一寸同じ位置に立つて居つた事が知れます。之を以て見ても同山がいかに古くから吾人に意味の深い所であつたかと云ふ事が窺はれて誠に面白い。這是畢竟伊豆地方は一面森林であつて、足柄の通路からは坂東平野に出るに便利であるから、此處がポイントとなつて、さてこそ總て此處が萬事の出發點となつて居つたものと思はれます。

(二)

足柄山(坂——峠)はごく昔から、之を尊み敬つて、殊に『神の御坂』または『御坂』と稱えられて居ります。此の山坂を殊に斯く呼ぶのは之れ即ち此坂が神のいます極めて神聖なる所であるからであります。假令ば『萬葉集』の同坂をよんだ長歌の中にも「……鳥鳴東國能、恐耶、神之三坂爾……」とあり、また

安思我良乃、美佐可加思古美、久毛利欲能、阿我志多婆倍乎、許知氏都流可毛

をはじめ同『萬葉集』に天平勝寶七年、筑紫に遣はさる、防人、埼玉郡上丁藤原部等母麻呂の歌に

安之我良之、美佐可爾多志底、蘇渥布良波、伊波奈流伊毛波、佐夜爾美毛加母。

また同『集』倭文郎可良麻呂の長歌にも

阿志加良能、美佐可多麻波理、可閉里美順、阿例波久江由久、阿良志乎母、多志夜波婆可流、不破乃世伎、久江氏和波由久、牟麻能都米、都久志能佐伎爾知麻利爲豆、阿例波伊波々牟、母呂母呂波、佐禰久等麻乎須、可閉利久麻立爾。

物部刀自賣の同歌にも

伊呂夫可久、世奈我許呂母波、曾米麻之乎、美佐可多婆良婆、麻佐夜可爾美無。

以上の『萬葉集』の諸歌に據て見ても、此處が當時神のいます神祕的な御坂——神聖なる峠として尊敬せられて居つた事は、いづれの歌にも同山に對して一種サブライムの考を以て恭々しく畏き意味が表現せられて居るので知れます。

(三)

日本の古い時代の習慣に峠を越ゆる時に、峠の神に手向して通つた事は申すまでもないが、殊に此の足柄の坂(峠)には一層敬慕の念をもつて迎えたであらう。『萬葉集』には手向した記事はないが、聊か後のものながら常盤井入道の歌に左の如きものがあります。

手向して心ゆるすな足柄の關の山越荒き其道

此の歌は此の(坂峠)に手向した風習のある事實と見る可きものであるや、否やは確かに何とも云へ

ないが、兎に角斯んな歌のあることを茲に紹介して置く。よしんば『萬葉集』に手向のことが出て居らぬにしても、其の時此處を越える際には必らず奴佐などを手向したであらふと思はるゝは、彼の信濃の御坂の其れと比較せば間接に之を證明する事が出来ます。

(四)

信濃の御坂は、前にも一寸申しました如く今日も下伊那郡に御坂峠として存在し、一昨年此處に登つて美濃に越えましたが、峠の上には足柄山頂(坂——峠)に於ける如く、茲にも祝部土器の破片が存在して居りました。(此の御坂の事に就ては別に精しく書く考ですから茲には記しません)古來此の坂が盛に往來せられて居つたことが知れます。さて信濃の御坂の事に就ては『古事記』にもすでに日本武尊の越えませしことを傳えあり、更に『日本紀』には一層精しく此處の話を傳えて居ります。此の御坂は足柄と同じく關西から信濃に入らんとする者には、必ず美濃より此の峠を越えねばなりません。されば其峠の人文史上の價值は足柄と全く同一でありますから、苟しくも信濃の古代民族史を語らんと欲する者は必ず此の御坂の研究より始めねばなりません、其位置はまさしく足柄と相等しいものであります。

此處も『御坂』とも『神の御坂』とも敬ひ尊びて申すのは、足柄と同じであります。這は互に大切

なる坂路である事と、またこの坂に坂神のましましたからであります。其の例證をあげますと、即ち『萬葉集』に主帳、埴科郡、神人部子忍男の歌に

知波夜布留、賀美乃美佐賀爾、奴佐麻都里、伊波負伊能知波、意毛知我多米。

此の歌で見ると、信濃の御坂には確かに坂の神に手向のため、奴佐を樹て、居ります。此の事實から推考しますと、同じ神の御坂の尊稱ある足柄の方にも奴佐の手向をして山神を祭つた事が證明せられます。

(五)

奈良朝の頃は足柄山(坂——峠)は交通の頗る盛であつて、坂の東から此處を越えて西へ行く者、また西から此處を越えて東に来る者は夥多かつたのでありまじやう。殊に東國から筑紫方面へ行く防人等の往來は可なり頻繁であつたと思はれます。また當時此處を越える人の中に重い病氣にかゝり此處に倒れ臥したのもあつたのであります。這是左の『萬葉集』の「過足柄坂時、見死人作歌」と題し田邊福麻呂の歌で知れます。即ち

小垣内之、麻矣引干。妹名根之、作服異六、白細之、紐緒毛不解、一重結、帶矣三重結、苦侍伎爾、仕奉而、今谷裳、國爾退而、父妣毛、妻矣毛將見將見跡、思乍、往祈牟君者、鳥鳴東國能、志耶、

神之二坂爾、和靈乃、服寒等丹、烏玉乃、髮者亂而、邦問跡、國矣毛不告、家問跡、家矣毛不云、益荒夫乃、去能進爾、此間堰有、

日本古代の風習では外來の病者は一般齋み忌みて家に入れる事を堅く禁じて居ります。況んや死者をや。されば足柄の坂を越える際、一度不幸にして重い病にかゝると、誰れも之に近よらず其儘に通過したらしい、其は右の歌で充分よく解ります。殊に此の歌は死者に對しての思いやりであります。

足柄山と造船と足柄の地名

(一)

伊豆の國は海中に突出した半島で、三面は海、土地はすべて森林で覆はれて居つたから原史時代あたりに、既に此の森林の材木を伐り船を造り、之を直ちに海に浮べる便利な地方となつて居りました。足柄山一帯もまた伊豆の諸山に續き森林であつたから船材を此處から伐り出したものらしい。中には船形に造り上げて運んだものもあつたらしい。之れは固より同山が森林であつたのと、酒匂川の様な大きな川が此處から流れ出て居るから、此の川によつて船材なり造船を流したものでありまじやう。今足柄山の樹で船を造つた事實を『萬葉集』から引用して見ると「造筑紫觀世音寺別當沙彌滿誓歌」に

鳥總立、足柄山爾、舟木伐、樹爾伐歸都、安多良船材乎。

此の歌は彼の若き時よんだものであらふとの説(萬葉集古義等)があります、這は尤でありませう。更に同『集』「相模歌三首」の中に斯んな歌もあります。

阿之我里乃、安伎奈乃夜麻爾、比古布禰乃、斯利比可志母與、許已波許賀多爾。

這は女性のよみし男によせし思いの歌と云ふ説であるが、其例に足柄の安伎奈山に引船の艦(?)引かしもよ——と附けたのは、即ち當時足柄山で造船して川へ舟を下して居つた事情が之でよく推知せらるゝではありませんか。以上は船材なり、造船したものを同山から下して來る事實であります、さて彌々其の船を海に浮べた事實も同『集』にのつて居ります。之れは

母毛豆思麻、安之我良乎夫禰、安流吉於保美、目許會可流良米、已許呂波毛倍杼。

足柄小船とは足柄山の木にて造船せしより起つた名であらふ。此の名のあるのから思ふと當時此處の樹で造つた船を一般に同名で呼んだのであらふ。百津島と上に言葉があるから恐らく相模沿岸の小島、磯岩などの間に此の船を浮べたものと解せねばなりません。『萬葉集』に「伊豆手船」と云ふのがありますが、之も伊豆の木で造つた船と云ふ事であれば、「足柄小船」の名も之れと同じであります。

(11)

足柄は安思我良——安之我良——阿之我利——阿思我里——阿之賀利等の文字を以て記して居りますが、其の發音は Ashigara=Ashi-kara と Ashigari=Ashi-kari の二つであります。此の山をかく呼ぶことに就て『相模國風土記』に従ふと左の如く説明して居ります。

相模國風土記云、足輕山は、此山の杉の木をとりて船につくるに、あしの輕きこと、他の材にて作れる船にことなり、よりて足からの山と付たりと云々(續歌林良材集上)

今之に従ふと、ashi は「足」で kara または karu は「輕」で、即ち足の輕いと云ふ意味で、此の ashikaru を山の名としたものであります。私は最初此の山名が若しやアイヌ語などから來たものでないかとよく調べて見ましたが、一向に之に似た言葉を見附りませんでした。私は寧ろ此の山の意味は右の『相模國風土記』の解釋である「足輕山」の説を採用せんと思ひます。

さて然らば何故に此の山を足輕山と附けたかと云ふに、之れは今『相模風土記』の云ふ様に此の山の木で造る船は船足が軒く迅いから自然に其名が起つたものと思はれます。『萬葉集』に斯んな歌があります。即ち

島傳、足速乃小船、風守、年者也經南、相常齒無二。

此の「足速乃」とあるを單に「足速小船」とよみ「乃」はよまずと云ふ人もあります、假令ば『元可法師集』に「島づたふあしはや、小船ながき夜に幾浦かけて月を見るらむ」とあるが之れであります。併し「乃」の字があるから「の」を入れて先づよみましよう。「足速」は「足輕」と同じで、之を「足速小船」また「足柄小船」同じではありませんか。「足速」の名は『文德實錄』によると、左の文があります。即ち

嘉祥三年九月壬辰、授播磨國足速手速神從五位下。

右の足速、手速の神名極めて面白し、足柄の足輕も之であつて、江戸時代に下男に「足輕」の名あるも同一のことでありましよう。尙ほ船の名に輕(Karu)を附けた例は、『日本紀』に見えて居る枯野(Karu-no)の Karu が同一であります。今其文を引用すると

應神天皇——五年冬十月、科伊豆國、令造船長十丈、船既成之、試浮于海、便輕泛疾行如馳、故名其船曰枯野。

此の「枯野」は Karanu と發音すべきである、其は三十一年に此の船が朽て用ゐられなくなつたから、其の船材の鹽を焼く薪となさんとせられたが、不思議にも焼けぬ部分があつたから、之で琴を作つたが、其音の鏗鏘に遠く聞るから、是の時天皇歌ひ給ひし歌の中に「詞羅怒鳥、之褒瑛椰枳」と

ありますから、確かに Karu です。此のカラは輕く、迅い意味のカラであるから、彼の足柄Ⅱ足輕のカルと同じ事となります。今日の言葉にも「船足が軽い」と云ふのも昔の考の残り物でありましよう。

Karanu とはどんな意味か分からぬが飯田武郷氏の『日本書紀通釋』には「枯は借子にて輕疾の義なり、野は重胤は乘の反ならむと云ひ、記傳には未考、あるひは主の意かと云へり、然るに式に伊豆國田方郡輕野神社、和名抄に同郡狩野郷もみゆと云れたり、この説然るべし……」とあります。『常陸風土記』鹿島郡の條にも輕野の舟に關係する事が見えます。

『古事記』には枯野は仁德天皇の條に出で、而かも其地方は幾内地方の事となつて居ります。其記事は「此之御世兔寸河之西有二高樹、其樹之影、當旦日者、逮淡道島、當夕日者、越高安山、故切是樹以作船、甚捷行之船也、時號其船謂枯野……」とあります。這是伊豆の枯野と別なものと思はれてもよろしい、即ち當時船の輕疾なるを賞して殊更にカラヌと附ける事が一般に行はれたものと思はれます。

足柄は足輕で、足輕小船に於ける如く足輕坂でありましよう、もと船の輕迅から起つた名があるが、後には陸路往來の足輕になつて、遂にながく之れが山名、坂名となつて用ゐられたものであらふ、洒落ではあるが、斯く考へて來ると道中の足輕は何だか之に關係ありけな感がします。

平安朝及び其の以後の足柄山

(一)

歴史時代も奈良朝頃までは盛んに足柄山は公道として關東關西の兩方面より往來したものであつた

が、桓武天皇の延暦年間に俄然富士山が爆發して峠の道を塞いで仕舞いました。

そこで延暦二十一年に新に管荷途(箱根路)が開かれました。即ち『日本紀略』によると

延暦二十一歲、五月甲戌、廢_ニ相模國足柄路_一、開_ニ管荷途_一、以_ニ富士燒碎石塞_レ路也。



(載所記土風國模相)

此の富士山が爆發して足柄路を塞いだのは當時にあつては頗る一大事であつたでしやう。然るに這はまた直ちに修復せられまして、復も翌年に足柄路が通行する事となりました。『日本紀略』に即ち

二十二歲五月丁卯、廢_ニ相模國管荷路_一、復_ニ足柄路_一。

其後は事はら足柄山も箱根山も共に旅客の往來する事となりました。けれども箱根の方は段々に交通が繁くなつて、遂に徳川初期に全く箱根が東海道往來の中心となつたから足柄の方は全く廢路となつて仕舞つて、僅かに間道として此處を上下するに過ぎなくなりました。

平安初期の當時の足柄山は如何と云ふに、『延喜式』の「_五蕃式」には「足柄坂」の名があります。同「兵部式」によると「當國驛馬、坂本二十四匹」とあります。之れで考えましても尙ほ足柄路の盛であつた事が知れます。此の坂本と云ふのは今日の關本でありましやう。また『和名抄』の「足柄上郡」中に見ゆる「驛家」と云ふのも關本のことでありましやう。當時此の足柄山が關東の要害として極めて大切な所であつたことは、彼の『將門記』に「將門苟揚_ニ兵名於坂東_一……凡領_ニ八國_一之程。一朝之軍攻來者。足柄碓水固_ニ關_一。當禦_ニ坂東_一……」と明記して居るので推知せられます。即ち此の時に於て彼れ將門等は一方碓水と一方足柄の關門を防禦せんには西より來る軍勢を防止するには



(同上)

何等恐る所がないと信じて居つたのであります。此の一言は平安朝當時に於ける足柄山の頗る重要大切な場所である事をよく物語つて居るではありませんか。

相模此の山を越えて來ぬものはなかつた。今其の往來した著しい者の例を少し許り擧げると、假令ば寛治中には源義光等土あり、而かも今や傳説に美化せられたる豊原時秋あり。彼の明月の夜笙を足柄山に吹き鳴らせし傳説の如きは、いかに其時代の足柄の交通の一斑を語るものではありませんか。
 (載所記) 更に降つて平安朝末期より鎌倉時代にかけては尙ほ此處の往來あり。這は歴史、紀行、歌集等の上より見ることが出來ます。

(三)

此處の峠は交通の便利であるが爲めに、古くからすでに

關門が設けられた。『將門記』にも「足柄關」の名が見え、而かも之れが大切大事な所でありました。

假令ば『時秋物語』に義光に隨ひ來りし時秋の言葉にも

……義光馬を控て曰、留め申せとも用る玉はで、是まで伴ひ給へる事其志深く、さりながら此山の關、輒通す事もあらじ、義光は命をなき物にして罷向へば、いかなる關をも憚るまじ、蒐破て通るべし、それには用なし、是より歸り給へと……

更に『源平盛衰記』に、治承四年八月、石橋山敗軍の條には

土屋三郎宗遠は、甲斐の國へぞ越られける、足柄の山に關居るたりと聞て、宗遠夜に紛れて通りけるが、見れば峠に假屋打て前に篝をたく者共、四五人が程ぞ臥たりける、如法夜半の事なれば、關守睡て驚ず、よき隙と思ひ、ぬき足して下ける。

更に『東鑑』に承久三月五月、北條義時、この關を固めし條に

五月十九日、被下_三右京兆義時追討宜旨於_三五畿七道云々。晚鐘之程於_三右京兆館。相州武州、前大膳大夫入道、駿河前司、城介、道等、凝評義、意見區分、所詮固關足柄宮根兩方兩路、可相待官軍之下向之由云々。

然るに飛鳥井參議雅經の『家集』に「東の路にて詠ける歌」の中に、左の足柄の關をよめる歌があ

ります。即ち

足柄の山の關守古は有もやしけん跡だにもなし

此の歌に據て見れば雅經の此處を通過せし際には、すでに足柄の關は全く存在しなかつた事が分ります。さうすると當時は彼の將門の所謂、足柄の關も、義光の通過した關も、將た治承に宗遠の脱走した關もすでに其の跡方だも分らなかつたのであります。此の歌で足柄の古關が無用で荒れ果てて居つた事がよく推知せられます。而して彼れ雅經は承久三年に五十二歳で薨ぜられた人であります、されば承久三年の以前、彼の此處を通過した當時は無關の有様でありましたと申てよろしい。然るに彼の薨じた承久には義時は評議の結果、官軍を防ぐ爲めに關を設けました。這は久しく絶えた所に再び新に復た關を置いた事となります。さうすると足柄の關は此の承久三年に至てまたもや復活したものと見てよろしいでしやう。

(III)

足柄山は抑も其の當時はどんな状態でありました？ 私は先づ之れから調べて見ましやう。此の事に就て稍や其の時の面影を傳えて居るのは、彼の『さらしな日記』でありましやう。其文によると

あしがら山といふは、四五日かねて、恐ろしけにくらがりわたれり、やうやういりたつ、麓のほど

に、空の景色はかばかしくも見えず、えもいはずしけりわたりて、いと恐ろしけなり……また曉より足柄をこゆ、まいて山の中の恐ろしけなる事はむかたなし、雲はあしの下にふまる、山のなからはかりの木のわづかなるに、あふひの唯すちばかりある、世はなれて、かゝる山中にしもをひけんよと、人々哀れがる、水はその山に三ところに流れたる、からうじて越へて々々關山にとゞまりぬ、是よりは駿河なり。

後堀河天皇貞應二年、源光行の『海道記』によれば

四月十六日竹の下を立て、林中をすぎて遙々へ行けば、千束のはしを獨梁にさしこえて、足柄山に手をたて、登れば、君子松いつくしくして、貴人の風過る笠をとがめ、客雲梢にかさなりて、故山の頂あらたに高し、朝の間雨ふりて、松の風聲の虚名をあらはす、程なく日岳の東にのほりて、雲はやく驛路の天にはれぬ、彼山祇のむかしの歌に、遊女が口につたへ、嶺猿の夕のなきは、行人の心をいたましむ(昔春慕の宿の君女、此山をこえける時山神翁に化してうたををしへたりけり、あしがらといふこれなり)時に萬仞みねたかし、樹根にまとふて腰をかゝめ、千里巖さかし、苔の鬚をかなぐりて脛をのゝく、山中を胡馬がへしといふ、馬もしこゝにとゞまらましかば、此山をば鞍馬とぞいはまし、これより相模國にうつりぬ。

秋ならばいかに木葉のみだれまし嵐ぞおつる足柄の山

尙ほ同『海道記』の別の條の所に

足柄といひし山の麓にくりがりわたりたりし木のやうに、しけれる所なれば、十月ばかりの紅葉、よもの山邊よりも、けにいみじくおもしろく、錦をひけるやうなるに、ほかよりきたる人の、いま参りつる道に、紅葉のいとおもしろき所の有つるといふに、ふと

いづこにも劣らし物を我宿のよを秋はつる氣色ばかりに

以上の記事にて當時足柄山の通行する所すら、林のトンネルの間を登つて往つたので、此のトンネルを一步中に這入ると最早千古斧鉞を如えない鬱蒼たる森林で、彼等旅人は晝尙ほ暗い、けに恐ろしい氣持であつたでしやう、けれども秋になると此のトンネルの木の葉が紅葉し又一段の風情を呈したことでありました。

山神が翁に化して君女に歌を教え、之れであしがらと云ふ傳説は當時此處に行はれて居つた様です。這は面白く注意すべきものでしやう。この傳説は實に優美なローマンスです。

(四)

足柄山の峠の左右に互に相對して聳ゆる山が二つあります。一は金時山(標高1260)で一は矢倉ヶ

嶽(標高557)であります。金時山は足柄峠より高さこと501程で、此處はうれしくも御料林の關係から今も尙ほ多少樹木が密生し其の昔の面影を聊か残して居ります。この少し許りの密生林は今日足柄山として最も誇る可き一つでありましやう。

金時山は彼の山姥と其の子公時(キントキ)(世俗の所謂金時(キントキ))と共に住まつて居つた所と云ひ傳えて居ります。此の公時のことは單に『前々太平記』ばかりに出て居つて外の本には少しも見えて居ない。此の附近公時が昔遊んで居る中に石を投げたとか、其の所が凹んだとか、其の石が残つて居るとか、兎に角斯くの如き説話が残つて居り居ますが、或は公時は Folk-tale 上の巨人傳説の人格化したものであるまいか。殊に山姥の之に伴ふ事は何だか山上森林中に發生する山姥傳説から來て、之に加はつた様な氣もする。況んや公時が熊、猿、鹿、兎等を家來とするが如きは又 Märchen 化して居ります。想ふに當時山上一面は森林であつて、其中に公時山が高いから遂に知らず識らずの間に此處が Fairy-land となつて山姥や公時が動物を友として生活すると云ふ神祕談が自然に出來たのであらう。之を以て考へても昔は是の邊一帶に深い深い森林であつたことが推知せられます。尤もよしんば坂田の公時其人が確かに歴史上の實存者であつたとして考へて見ても、彼にフォルクローアやメルヘンの色彩を帯びさせ、居ると云ふことは、最早何等疑ふの餘地がありません。坂田の公時が假令、フォルクローアやメルヘン

の人であつても、將た歴史的實存の人であつても、斯んな説話傳説を古くから此處に残して居るのは、之れ畢竟足柄山が森林地帯であつて、其の中間の頗る恐しい森のトンネルを通過する峠になつて居つて、人々の常に往來するより遂に知らず識らずの間に之が神仙譚となつたのでありまじやう。公時山姥、さてはメルヘンらしくて、いかにも可愛らしい玩具的動物の足柄山に附隨して居るのは、私は同山と關聯し極めて面白い興味ある一つと考えます。

(五)

坂田の公時は渡邊綱、碓井貞光、卜部季武と共に源頼光の四天王であります。是等の三人も公時に於けると同じく各々奇しき珍らしき傳説を有つて居ります。今之を茲に述べて見たい。

先づ卜部季武から云ふと、彼は『前々太平記』に據ると、卜部次官李國の子で、少年の際故あつて足柄山下（竹の下附近？）某律院にあること凡そ七年、其間に毎に三島明神を信仰し、父の長命長くして今生の對面を許し給へと祈つて居つたが、頼光が上總の守となつて下向し、足柄山を越えんとする前日、彼と會し、其の家臣となることを約し、遂に後に四天王の一人となりました。之に據て見ますと彼れ季武は足柄山の下で、公時は此の上で等しく同時に頼光に關係をしたのは頗る面白い事であつて、這は公時と共に等しく同一に考への中に入れねばならぬ、而かも之れが互に相等しく足柄山に關

聯して居る事は極めて興味があるではありませんか。

次の碓井貞光もまた注意すべき傳説を有つて居るもので、（前々太平記に據る）彼は信濃國碓井峠に父と共に住まつて居つたもので、其の父は諏訪明神に祈誓して彼をもうけたが、母は三日を出でずして死去し、父もまた彼の七歳の時に死去し、十歳の頃ひとり野に出で、鹿猿を追廻はし諸鳥を射落し、手にも及ばぬ大石を轉ばし、或は牧の馬に繩手綱掛けて高山廣野を驅せ巡り、己と切瑳琢磨して其身を懲し晝夜武藝を勵んだから、心も剛に力も人に勝れた故、其の所の人には之を荒童子あらくらごと異名を附けました。……十七歳になつて上總に行き頼光の家臣となりました。此處に注意すべきは彼の碓井峠に生れ、其の幼時怪力、其の行爲は坂田の公時と同じ事であつて、之も又傳説的色彩を帯びたものではありませんか。而かも此處が碓井峠で公時の足柄山と相對して極めて興味があります。乃ち足柄山も碓井峠も之れ東國に於ける二大關であつて、彼の『將門記』にある將門の所謂「……一朝之軍攻來者、足柄碓井固三關。當禦坂東」で、此の二山に公時、貞光の關係して居るのは面白い、世人は單に公時のみを傳説中の主人公として取扱ふけれども、這はまた此の貞光にも之を應用せねばならぬ。就中、其の碓井峠もまた大に問題となりまじやう。

次に渡邊綱（前々太平記に據る）は、もと故武藏守箕田仕が孫で、其生れた地は武藏野の箕田（今

日の東京市内三田みたと傳ふ）であるが、彼れ孤子となり叔母に抱かれて攝津の國、渡邊に來たから渡邊の姓を名のる事となりました。而るに彼は頼光の父たる滿中の家臣となり、更に彼は頼光の家臣となり、後遂に四天王の隨一となりました。彼の出產地が武藏野の箕田であるのは注目すべきものでしやう。

以上に據て見ますと、頼光の所謂四天王なるものは、公時、季武は足柄の山上または山下、貞光は碓井峠、綱は武藏野であります。果して然らば彼等は足柄——碓井の山系から其東邊内部の武藏野一帯、乃ち東國——坂東——關東——吾妻等を代表して居るではないか。頼光が常に之を四天王となし京都——關西を守護し、さては大江山酒吞童子までも退治したと云ふ傳説あるは何と愉快な話ではないか、殊に私は武藏野の一員として最も之を喜ぶものであります。

這は苟しくも足柄山の事を云はんと欲する者、また併せて此の考の中に入れて置かねばならぬことであります。而かも這はフォルクロア上より足柄山及び其坂東を研究する者の極めて注目すべき一つであると云はねはなりません。

(六)

足柄山は鎌倉時代、其の後になつても、箱根山と共に往來する事となりましたが、阿佛の『いざよひ日記』には左の如く「廿八日」の日記中に記るしてあります。這は當時の箱根——足柄兩路の往來

の消息を示すものでありしやう、即ち

廿八日、いづのこふをいで、はこねぢにかゝる、いまだ夜深ければ

玉くしけ箱根の山をいそけども猶明かたき横雲の空

あしがら山はみちとをしとて、はこねぢにかゝれり

ゆかしさよ其方の雲をそばたて、よそになしぬる横雲の空

阿佛は御宇多天皇、建治三年に箱根路を越えたのであるから、少なくとも建治の當時はすでに足柄山は道遠くなつて居つて、次第に箱根山の方が便利になつて居つた事が知れます。そして阿佛が其の歌に、「ゆかしさよ……」とあるのは、尙は足柄山のなつかしい意味が見えて憐れであります。

四條天皇の仁治三年の『東關紀行』では、關東に入るには、三島から箱根を通過して居ります、『いざよひ日記』は今から六百五十年前、『東關紀行』は今から六百八十五年前でありますから、此の時代あたりは、まさしく箱根山の方が頗る往來には便利になつて居つたものと考てよろしいでしやう。

(七)

さて古から足柄山を越えるのは、關西からすれば駿州の方面では、同山麓、竹の下に來て宿り、其の翌日此の山にかゝり、其夜は相州の方の同山麓、關本で宿る様になつて居ります。是等兩山麓の宿場

は平安朝以後どんなで状態でありました？と云ふに、先づ竹の下の方面の状況は『海道記』によると
這んなに記してあります。曰く

けふ足柄山をこえて、關の下の宿にとまるべき日、暮鳥むらがりとんで、林頭に驚ねぐらをあらそ
へば、山の此方竹の下といふ所にとまる、四方は高山にて、一川谷にながれ、嵐落て枕をあらふ、
聞ばこれ松の音、霜さえて袖にあり、拂へばたい月のひかり、ね覺のおもひにたえず、ひとりおき
るてのこりの夜をあかす。

見し人にあふ夜の夢の名残かなかけるふ月に松風の聲

更る夜の嵐の枕ふしわびぬ夢も都に遠さかりきて

以上に據て考えると『海道記』の當時の竹の下は餘り賑かな所でなかつたらしい。之に反して一方
の山麓たる關本は中々賑かな聚落の土地であつて、遊君白拍子の輩さえも居つて旅客を樂しませまし
た。即ち等しく『海道記』によると、

關下の宿をすぐれば、宅をならぶる住民は人を宿して主とし、窓にうたふ君女は客をとめて夫と
す、憐むべし千歳の契を旅宿の一夜のゆめにむすび、生涯のたのみを往還の諸人の望にかく、翠帳
紅閨萬事の禮法ことなりといへども、草庵柴戸一生の歡念これおなじ、

櫻とて花めく山の谷ほこりをのが匂ひも春は一とき

麓にやどりたる所に、月もなく、暗き夜のやみにまどふやう成に、あそび三人いづくよりともなく
出來たり、五十ばかりなるひとり、二十ばかり成、十四五なると有、庵のまへに傘をささせてすへ
たり、男ども火を燈してみれば、昔こはたといひけんか、まこといふ、かみいとながく、額いとよ
くかゝりて、色しろく、きたなけなくて、さても有ぬべきしも仕へ、などにもありぬべしなど、
人々哀がるに、こゑすべてにるものもなく、空にすみのほりて、めでたく歌を謡ふ、人々いみじう
哀がりて、けぢかくて、人々もてけうするに、こし國のあそびはえかからじなどいふをきよて、難
波わたりにくらぶればと、めでたく歌ひたり、みるめのいときたけなきに、こゑさへにる物なくう
たひて、さばかり恐ろしけ成山中にたちて行を、人々あかす思ひて、皆泣くを、おさなき心地には、
まして此宿りたゝん事さへあかすおほゆ。

足柄山の恐ろしき所を越え來りし人、又今や之に登り行かんとする人は、いかに此の關本の宿りの
なつかしくあつたであらふ、關本が斯くの如き状態であるのは、之れ其以前からの事であつて、遂に
知らず識らずの間に斯く遊君、白拍子の宿場となつたのであらふ。

(大正十二年五月)

第二部

一 有史以前に於ける東京灣

一、貝塚の存在

有史以前の當時、東京灣はどんな形をして居つたであらう？ 固より今日とは大に其形状を異にして居つたことは明かであるが、さて其相違は抑もどんな工合に異つて居つた？ 斯くの如き事は有史以前民族の研究上、先づ第一に知つて置かねばならぬことであります。又此の舞臺、此の背景から彼等民族の生活の様式は起つて來るのであります。

此の問題に就て、唯一の證據となるものは當時のクゼツケン、メーデキング、たる貝塚で、這は此の事實を證明する一大雄辨であります。乃ち之に據て、當時の海岸線、灣の出入、鹹水と淡水との區界等も稍や明かに分かります。さうすると私は先づ有史以前に於ける貝塚の分布の状態より記るさねばなりません。

抑も貝塚の分布に據て、其當時の東京灣の位置を推定しやうと試みた人は先づ、最初には故坪井博士

で、博士は明治十九年六月『東京人類學會報告』第一卷第五號に「東京近傍古跡指明圖」中に地圖を附し十四行許説明をせられて居ります。次は故若林勝邦氏で、氏は同二十五年四月の『東京人類學會雜誌』第七卷第七十三號に「下總武藏相模に於ける貝塚の分布」と題し發表せられて居りますが、這是此の種の研究史上最も大切なる論文で、固より今日と大に事情が違つて居りますが、其當時の考證としては、頗る價值あるものと云はねばなりません。其次は大正三年五月に出た東京市役所編纂の『東京市史稿』第一「市街篇」の中に記るされました貝塚分布の圖及び其の説明であります。これも又地圖を附して居りますから又有益なるものであります。先づ私の知つて居る範圍に於て東京灣貝塚の分布を記したものは之れだけであります。私も不肖ながら之れまで三四回程各所の講演會で之を述べた事がありましたけれども、未だ文書としては公にして居りません（私は他日甲陽堂より出版する『有史以前の武藏野』で精しく之を發表する事となつて居ります）。

二、現今東京灣の地形

東京灣内に貝塚の存在分布する數は若林氏の當時、乃至は東京市役所編纂出版當時の比ではありません、今日は之れよりズット多くなつて居ります。現今の貝塚存在の分布に就てはよろしく東京帝國大學理學部人類學教室出版『日本石器時代人民遺物發見地名表』第四版中の「貝塚」と特に記るして

ある地名を参照せられ度い、固より之れにも其後幾多の發見や落ちた所もありますが、先づ大體から云ふと誤はありません。又甚だ便利ですから東京市役所出版『東京市史稿』の中にある「貝塚分布圖」を必らず參考にせられ度い。兎に角是等貝塚分布存在の狀態は當時いかに彼等の生活して居たかを知るに尤も都合のよいものです。

私は茲に東京灣の南端を神奈川縣の神奈川の高臺とし、此處から線を引いて北端は前岸の千葉縣の千葉町にまで及ぼして、此兩基點から引いた今日の海岸線を先づ定めて置いて、さて此の海岸線から其以内の陸地の方にいかほど奥にまで貝塚が存在分布するかを調べて見たい。

以上の線内の地質及び地形はどふなつて居るか云ふに、即ち是等の地方は所謂臺地の武藏野と水郷の武藏野で、臺地は主として第四期の洪積層からなり、水郷は同沖積層からなつて居ります。而して前者は其南は橘樹、都筑、荏原、多摩、豊多摩、東京市、北豊島、入間、南足立、北足立、南埼玉、北葛飾、猿島、東葛飾、千葉の諸郡が存在し、之にはさまつて、北豊島、北足立、南埼玉の低地の部分や南足立や東京市の下町や南葛飾郡の殆んど全體が後者として存在して居ります。此の後者の諸地はいづれ昔は海水の侵入した場所即ち灣を形成して居つて、之れが後に沖積したのでありますやう。さうすると兎に角、此の低ひ今日の水郷の武藏野は古代の海水のあつた場所であります。

以上の神奈川——千葉の線以内陸地に向ての諸地は殆んど北から今日の東京灣の海岸線に向て江戸川、中川、荒川、多摩川、鶴見川等が流れて居ります。而して多摩川、鶴見川等も地勢に變化があり、殊に江戸川中川荒川等も大變化があり、就中歴史時代殊に足利末から徳川時代に入つては大に人爲作で河流に一大變化を生ぜしめたもので、彼の利根川の如きも河流が變化して居る、荒川の如きも左様であります。されば近い歴史時代でも斯くの如き河流に變化のあることは、之れやがて其以前にも沖積土に非常なる變化を來たして居る譯であります。私は今茲では是等の事も書き度いのであるが、之は本文とまた別の事項となるから之を略する事とするが（讀者はよろしく先づ『利根川圖誌』や吉田博士『利根川治水考』等を一讀せられたい）兎に角讀者は先づ此の點に注意せられたい。

三、貝塚の分布と其最終點

之まで記したのは、現今の東京灣海岸線以内陸地の地形であるが、さて之を有史以前に溯つて見るとどうであらう？ 私は此の點から見ると、神奈川の高臺から舟橋あたりに一線を引いた線を基點として見る方が適當の様に思はれます、何となれば舟橋から千葉までの間は他と比較して沖積層に變化は少なく、又洪積層の延長もこの間は起伏、凹凸、曲屈も餘りなく云はゞ單純であります。而して舟橋附近の洪積層は其先端が餘程海の方に突出して居つて、此の突出した洪積層は變化なく千葉まで延長

して居ります。さうすると千葉よりも此の舟橋を基點とする方が都合よろしい。そこで私は此の舟橋から神奈川臺に一線を引いて其以内の土地を調べて見たい。

貝塚の存在する場所は多くは洪積層臺地のヘリの上で、餘り奥深くヘリより遠ざかつた所には無い。私は是等の貝塚の分布の上から見ると、貝塚の存在場所として、神奈川——舟橋の現今東京灣海岸線以内で最も遠い所にあるものは、抑も何處あたりである？ と云ふに、先づ江戸川流域では關宿及び少しく其北にもあります、尙ほ一方岩槻の上、北の方に黒澤、小貝戸、貝塚等の貝塚があります。更に荒川流域での最終は川越の小仙波貝塚があります。是等は貝塚として今日の海岸線から餘程奥深く存在するものであります。さうすると單に貝塚なる者の最終線は關宿の少しく北から粕壁——桶川線附近に來り、之が西南に下つて川越に來て居ります。這是東京灣に於ける有史以前貝塚の奥地であります。尙ほ更に眼を轉じて多摩川及び鶴見川兩流域を見るとどうであらう？ と云ふに、多摩川流域の貝塚の最終は一方沼部で、前岸は子母口附近であります、さうすると此の川域最終の貝塚分布は上沼部——子母口であります。次に鶴見川流域は小机の東、篠原附近にまで達して居ります。

四、有史以前の東京灣及び其入江と岬角

以上は東京灣貝塚の最終の場所であるが、此處を最終として之より當時の海岸線に向て專はら、洪積

層の臺地のへりに沿ふて長く分布して居ります、乃ち江戸川流域の如きは其左右の臺地のへりに貝塚は存在して居つて、其中でも川の東の高臺は關宿附近より野田——流山村——國分寺——曾谷——中山——舟橋の洪積層で、此の方面のへりには貝塚が無數に分布して居ります。殊に此處でも國分寺高臺と法華宗にて有名なる中山との臺地との間には洪積層が細かく曲屈して居るが爲めに、沖積土は餘程低い所に發達し、貝塚は之れが爲めに是等細小曲屈する臺地の上に此處彼處と轉々存在して居ります。

次に江戸川の西の臺地はどふであるかと云ふに、此方面にも貝塚は多く分布して居るが、臺地は江戸川の東岸の臺地と異なり、其の洪積層の臺地の延長は僅かに草加附近の南方しばらくで終つて居つて其南は全く東京灣まで延長した沖積層になつて、自然に貝塚の存在も消滅して仕舞ひます。即ち此の高臺先端の貝塚は北足立郡の東貝塚等であります。

此の洪積層の臺地は恰かも岬角の様な形狀を呈し、之れが又此處から再び北に延びて鳩ヶ谷附近から荒川の東岸の臺地となり、川に沿ふて浦和、大宮等を経過し西北に引いて居ります。此の岬角狀を呈し左右に江戸川と荒川とを控へて居る洪積層の臺地は古代にあつては、まさしく海中に突出した半島狀を呈して居つたのであらうが、其半島の臺地も又屈曲が出來、其中が又入江となり、此處に貝塚が

分布して居ります。私は今假に此の岬角を足立の岬と呼び度い。

荒川の西岸の洪積層の臺地は川越の小仙波に最終の貝塚があります、此臺地は此處から川に沿ふて志木——赤塚——志村——王子——田端から本郷——小石川——神田——麴町——芝——麻布の各區から品川——神奈川臺にまで延長して居りまして、是等の諸地方又貝塚が分布して居ります、此沿岸の中でも、石神井川は王子から石神井池まで達し、又上野臺麓の不忍池の低地は西ヶ原附近にまで達し、又神田——小石川等の低地を通じて池袋の間に達し、是等の地方に貝塚があります。

以上に據て考えますと、私は右の總てを通じて草加——鳩ヶ谷附近以南の洪積層の突出點、即ち足立の岬を中心として、便利上之を其東西の入江に區別して見たい。即ち其東の入江は江戸川流域であつて、有史以前の當時は此處は東京灣が入江を形成して居つたに相違ありません、其れで之を私は假りに埼玉の入江と稱したい。又此の突出點の西の方の荒川流域も當時は東京灣の這入つて居つた所で、私は之を假りに豊島の入江と稱したい。

さうして見ると當時の東京灣は埼玉の入江と豊島の入江とに二大區別せられ、右の突出點以南は東京市から神奈川臺までの臺地と松戸——國府臺——舟橋の臺地と相對して居つたものに相違ありません、而して此の相對して居る間の海は眞の東京灣であつたでありませう。

此の時に當て品川附近の臺地を界とし其南に多摩川の上沼部——子母口まで、と鶴見川流域の間はともに連続して居つたもので、這は一つの入江でありました、私は之を假りに多摩の入江と稱したい。

五、鹹水と淡水との境界線

有史以前の當時では東京灣と尙ほ之れが入込んだ埼玉の入江、豊島の入江或は多摩の入江があつた事（尙ほ各入江に更に幾多の小さな入江のあつたことは勿論であります）は前に記しましたが、さて是等の入江に何處まで鹹水と淡水との界があつた？ 即ちどの邊が兩水の界であつた？

此の問題を決するのには貝塚に就て、其鹹水産と淡水産との區別を調べねばならぬ、之に對して先づ埼玉の入江の方を見ると關宿の貝塚は全部淡水のシヅミ貝であつて、其南の山崎貝塚は鹹水産よりも淡水産のシヅミ貝を多量に含み、流山貝塚に至て全部鹹水産になつて居ります。尙ほ岩槻の北方にある黒濱、白岡、貝塚、小貝戸等の諸貝塚は淡水産のシヅミ貝を存在すること最も多量であります。（谷川磐雄氏に據る）。更に荒川流域の最終の貝塚たる川越の小仙波の貝塚は唯だ名のみばかりで今は貝殻が無いから精しく云へぬけれども、其南にある鶴瀬の貝塚は殆んど貝殻は淡水のシヅミで唯だ僅かに少量の小さいカキ貝を混するのみであります。而して其最南の小豆澤の貝塚の如きも鹹水産に交ゆるに淡水産のシヅミ貝を以てして居ります。之に據て考えますと當時の鹹水と淡水との境界線は先

づざつと小豆澤附近から流山の北あたりに一線を引いた所にあつたと見てよろしいでしやう。這は取も直さず東京灣で海水の浸した範圍の最終でありましやう。其線の以北は淡水がさし更に其北になると其時代に此處に或川の流れ込んで来た落ち口、川口となつて居つた様に思はれます。是に於てか東京灣の最終線は大概判断が出来ます。更に多摩川流域や鶴見川流域はどふ？と云ふと、此處は既に記りました如く、もと一つの入江で、是等の諸貝塚は殆んど全く鹹水産からなつて居るから、即ち海水の侵入は多摩川の上沼部——子母口、鶴見川では貝塚のある奥深き所までに及んで居つたでありましやう。さうすると、是等の鹹水産貝塚のある以南の廣い當時の東京灣は従つて海水のしたした海原であつた事は固よりであります。私は有史以前の東京灣を斯くの如く見たい。

六、東京と國府臺との間の海上

以上で略ば有史以前の東京灣の状態を記しましたが、さて當時にあつては、豊島の入江、埼玉の入江の以南、即ち今日の東京市の臺地から市川國府臺附近の臺地までの間の沖積層の低地は海水の湛えて居つた全くの海原であつた？ と云ふに、私は此の點に就て多少の説なき能はずです。私は此の疑問に對して左の如く記し度い。

此の海原は私を以て見ると、當時よしんば島嶼と云ふ程のものでなくとも、所謂堅洲カキスまたは浮洲ウキス、

浮島と云ふ様な名稱の洲が此處彼處に出來て居つた様に思はれます。先づこの堅洲の事に就て原史時代及び其れより後の古墳の分布存在等に據ても略ほ知れる所であつて、即ち彼の眞土山は前方後圓の古墳、淺草辨天山も古墳、其他淺草、下谷の駿馬塚、其れから妙龜尾塚、梅若塚、根岸の大空庵の大塚、本所の業平塚（今無し）龜戸の太平塚（彌生式の網の重り出づ）、吾妻森の古塚、丸の内大藏省内の將門塚（？）等斯くの加き古墳は王子附近の沖積層より三河島、根岸、下谷、淺草、本所等に涉つて多く存在して居ります。是等は確かに原史時代から其後にかけてのもので、すでに其當時、此處に沖積土が出來て居つたと見ねばなりません。這是古い地名に據てもすでに淺草には古方ウラカタ檜前牧ヒノクマノマキの名があり、又本所に牛島牧ウシジマノマキの名があり、『和名抄』の八島ヤシマの郷も蓋し本所から葛飾にかけての名でありませう。是等の地名又考古學上の遺蹟と相待つて其存在の事實を今日に傳へて居るものであります。

七、有史以前の堅洲ニ浮洲

以上の事實は原史時代東京灣内沖積土のあつた證據であるが、更に尙ほ之をモット古く遠い有史以前に溯つて見ると如何？ 有史以前の東京灣も各所にニュークリヤスの堅洲ニ浮洲が出來て居つたらしい。而して此處で當時の民衆は漁業をしたり、又は丸木舟の停泊所ともし、或は假家も此處に營まれたであらうと思はれます。云はゞ東京市の高臺と國府臺方面の高臺との航路の中ツギ場所は其間に

點々存在して居つたのでありませう。

此の事に就て面白いのは本所區の吾妻の森の社地から圖の如き薄手式ア、イ、ヌ土器が出て居ります。而して此の土器は東京方面や足立、下總の臺地にある薄手式土器に之と同形のものがあります、這是恰かも同一場所ニ製作したかと思はるゝ程であります。

由來吾妻の森は昔から浮洲といつた所で、其附近の川は今川床が
吾妻 高くなつて居りますが、ズット昔は此の水は餘程深かつたに相違あり
森 ません、之が段々今日の如く高くなつたのです。



出り 尙ほ吾妻の森の傍に龜戸の臥龍梅がありまして、此處に太平榎また
土 網掛榎アミカケノキの土墳があります、此の土墳の盛土は貝塚の貝殻からなり、
器 其中に次の頁の圖の如き彌生式派の土製網のオモリが澤山に出ます。

即ち此處も又當時の堅洲の遺蹟でありませう。

吾妻の森から香取神社の在るあたり、さては龜戸、臥龍梅附近は有史以前の當時から既に堅洲浮洲となつて居つたらしい。這是以上の事實がよく之を證明して居ります。吾妻の森から、同時代の土器を掘り出したと共に、尙ほ之を確むべき證據があります。其は此處に更に同時代の石棒が存在して居つ

た事であります。元祿の頃出版した『江戸鹿子』を見ると龜戸シヤクジシヤに石神社と云ふのがあつて、同書は高臺にある石棒を祭つてある同神社と共に記して居ります。這は今も龜戸にあるでしやう？ 大に研究すべきことです。

龜戸の石棒に對して面白いのは、吾妻の森から北の方、中川に接した立石村に熊野神社があつて、此處に石棒（石質クロライトシスト）を祭つて居ることです。私は此の立石の石棒も龜戸の石棒と共にすでに其時代から其處にあつたものと思はれます。

石棒は尙ほ三河島附近の尾久にもあるし、又中里村に貝塚があり、本郷モトゴウにも貝塚があります。是等は共に低い沖積層の土地で、本郷の貝塚から大里氏は薄手式土器の破片を得て居ります。さうすると吾妻の森の土器と同一のものであります。（補遺、立石村に古墳存在し、埴輪土偶を出して居る。尙ほ此の附近に彌生式土器を夥しく出す所がある）

是等の事實をたどつて考へて見ると、當時東京市方面及び國府臺方面の臺地の間は全くの海原でなく、既に各所に點々堅洲ツル浮洲が出来て居つたもので、當時の民衆、即ち漁業を主として生活した薄手式派のアイヌ部族は是等の洲をステーション



網掛の埴土の境から出土した土製の網重

ヨンとして丸木舟で往來し、又此處で漁りをしたり、又此處に假住ひをして居つたものと思ひます。是等の事實で點か印を付けて行くと當時の堅洲浮洲の分布がよく分つて來ましやう。私共は之れから此の研究もせねばなりません。

私は有史以前の東京灣を斯くの如く見たい。

東京灣の今日よりモット奥に海の這入つて居つた事は『萬葉集』に二三現はれて居ります。假令ば奈良朝時代には今日の下總國府臺附近の下あたりを眞間の浦と云つて入海でありました。其れは同集に「可豆思加乃、麻萬能宇良未乎、許久布禰能、布奈妣等佐和久、奈美多都良志母」と云つたり「可豆思加能、麻萬能手兒名家、安里之可婆、麻未乃於須比爾、奈美毛登杼呂爾」と云つたので知れます。尙ほ此處から少しく奥も左様であつたらしいのは、同集にやはり埼玉の津と稱するのがあつて「佐吉多萬能、津爾乎流布禰乃、可是乎伊多美、都那波多由登毛、許登奈多廷會禰」と云つて居ります。是等は奈良朝當時の東京灣の面影の一般を暗示して居るのでしやう。

私は有史以前の東京灣内で、多摩の入江を他の東京灣と別として見たい、其れは品川附近の臺地が少しく突出して自然に兩者を（固より細小なことではあるが）區劃して居る様に思はれるからです。さうすると大森の貝塚は多摩の入江の方に屬する事となります。奈良朝時代でも品川附近の臺地を荒蘭崎アラノサキと云つて「草陰之荒蘭之崎乃笠島乎、見乍可君之山道越良無」クサカゲノアラノサキノカサシマノミヅカキミガヤマヂコユラムなどありますから、此處は確かに私の考を一層裏書するものであります。笠島と云ふのは今は無いが、其時には臺の前に堅洲が出来て居つて之が島嶼状態になつて居つたのでしやう、之れが新に沖積土が出来て来て、遂に連続合體して仕舞つたのでしやう。

（大正十年十月記）

二 武藏野の有史以前

一、貝塚の探查

武藏野の有史以前（石器時代）に就ては、東京帝國大學、東京人類學會の存在、さては熱心なる有志家の居らるゝ爲めに比較的他の地方よりはよく知れて居ります。否な之れが全國同時代研究の先史考古學上の一大基礎となつて居ります。されば今日苟くも有史以前のことを語る者に於て、此の事實を少しも知らないならば、其人は既に先史考古學を研究調査をする資格がないと云てよろしい。私は之まで以上の先輩及び知友、有志家諸君のせられた熱心なる仕事に對しては謹で敬意を表するもであります。併し以上の研究調査は、之を武藏野臺地から見ると、遺憾ながら僅かに武藏野の海に接した一角、即ち當時の東京灣内のみで、更に廣い武藏野の臺地には及んで居りません。之れまでの仕事のやり方は云はゞ殆んど貝塚調査の一點張り、或人の如きは貝塚發掘のみが先史考古學上の仕事であることさへ云つて居つた位であります。けれども武藏野の臺地から云ふと、有史以前でも當時の貝塚の在する區域は最も狭少で、貝塚の存在して居らぬ區域が更に廣く且つ大であります、即ち有史以前遺蹟存在の場所は到底貝塚存在の場所の比では無い。

けれども之までの調査は十中の九まで、否な殆んど全く貝塚發掘の一點張りであつたから海岸線を離れた廣大な武藏野臺地の調査がまだ残されて居ります。此の方面で之れまで爲した仕事としては先づ私と大野氏と調査をした國分寺村遺物包含層や、其他深大寺村の打製石斧の事項等に過ぎない、其の他熱心なる人々があつても僅かに二三氏に過ぎません何と武藏野臺地の方は手が附いて居らぬではありませんか。

之に反し海岸線の貝塚の方は假令純然たる學術的ならずとも相當に探查が行きわたり、今や殆んど西ヶ原及び其他の一二の貝塚を除けば貝塚は殆んど全滅をして居る位であります。

私は武藏野に於ける有史以前の調査は、固より海岸地方の貝塚の調査も必要と認めますが、之と共に又臺地の調査を怠つてならぬと考へます、而かも臺地は其區域面積は頗る廣大で、未だ先史考古學上未開耕地でありますから、今後は此の方面の開拓をせねばなりません。

二、薄手式派と厚手式派

有史以前に於ては武藏野の海岸地方と臺地々方とはどんな状態であつた？ 是等兩方面は當時同一であつたか又は相違して居つたか、這は人類學上、先史考古學上頗る興味ある問題でありましたやう。私の今日までの研究結果に據ると、不思議にも奇妙にも以上の二方面の遺物は多少相違して居りま

す。即ち海岸地方の遺物は先づ土器の上から云ふと其製作は精巧で小型、磨きをかけ、殆んど指で撮る程のヒネリ把手を附け、表面に竹木の小片で沈み紋様を書き、土器の内部の上縁の所に紋様を施し、精巧な物に朱を施し、且つ此の地方の者は盛に土偶土盤を作つて居ります。注意までに云ふが、此の名稱は假令薄手と命名して居るも、這は決して薄い小型のもの許ではない、之れは次の厚手と比較して云つたのであります。次に石器は如何と云ふに石斧は比較的小數、石鏃は極めて乏しい、之に反し骨器を製作使用して居るから蓋し當時此の地方では骨鏃骨銛や竹木片の鏃等を盛に用ゐてありましたやう。更に臺地々方の遺物は如何と云ふに、這は前者と反對で土器は厚く粗造巨大、粘土にマイカシストを混じ其紋様の如きテピカルな渦卷を示し、之れが發達變化して種々の紋様、さては把手となつて、或は顔面、或は蛙、鳥等の如き形狀を呈して居る、此の把手の變化は臺地遺蹟の一大特徴と申してよろしい。要するに是等の土器は厚手粗大把手の變化に於て特有であります。而して此の地方には海岸地方の如く土偶や土盤などを有つて居りません。(唯だ一つ南多摩郡堺村に土偶が出て居ります)されば臺地々方の遺物から云ふと有史以前の土器は土偶や土盤があるとは云へぬ譯になります。即ち二者がいかに相違するかを知ることが出来ましたやう。次に石器は如何と云ふに先づ石斧として打製石斧が多く、之に磨製の物も交へて居る、石鏃は此の地方には比較的極めて多數で當時之を盛に製作使用し

たことが知れます。石鏃の原料は主として黒曜石若しくは角岩等から出来て居ります。大小の石棒も多く存在し、就中クロライトシストの大石棒の如きは此地方の最も特色であります。之を要するに石器の數量から申すと海岸地方のものよりも多く全く比較にはなりません。

以上の事實に據て、私は是等の遺物は固よりアイヌの手になつたものと信じて居りますが、少なくとも當時武藏野には彼等の二大部族の存在があつた事を認めねばなりません。而して此の二大部族の相違價值は考古學上から批評すると可なり大きなものであります。斯くの如き嚴然たる區別が既に武藏野に存在して居つたに拘はらず、之まで全く同一のものとして認め、しかも其海岸地方の貝塚の遺物のみを見て、總てに之を解せんと試みたのは實に學術上危険なりと云はねばなりません。私は此の二大部族、二大群の相違は彼の臺灣の生蕃が等しくインドネチアン（馬來族）の中に包含せらるけれども、其中に各々タイヤル、ブヌン、ツアリセン等の相違がある位の相違は、有史以前の當時にアイヌ中であつた様に思はれます、私は其二者の遺物を見ますと可なり大きな相違があると思ひます。

三、薄厚土器分布境界線

有史以前の當時、武藏野に於て既に二大部族、二大群の存在したとすれば、さて其當時に彼等の地理學的分布、更に進んで其境界線は何處にあつたか？這はどふしても諸君と共に研究せねばなりません。

私はこの事に就て左に聊か思ふ所を記して見たい。

私は以上の海岸地方と臺地々方との部族を區別する名稱を其の各々土器の特徴から見て、假りに之を前者の方を薄手式派と稱し、後者の方を厚手式派と稱して置きたい、此の名稱は數年以前から私は既に使用して居りますが、茲で尙ほ此事を明かにして置きたい。

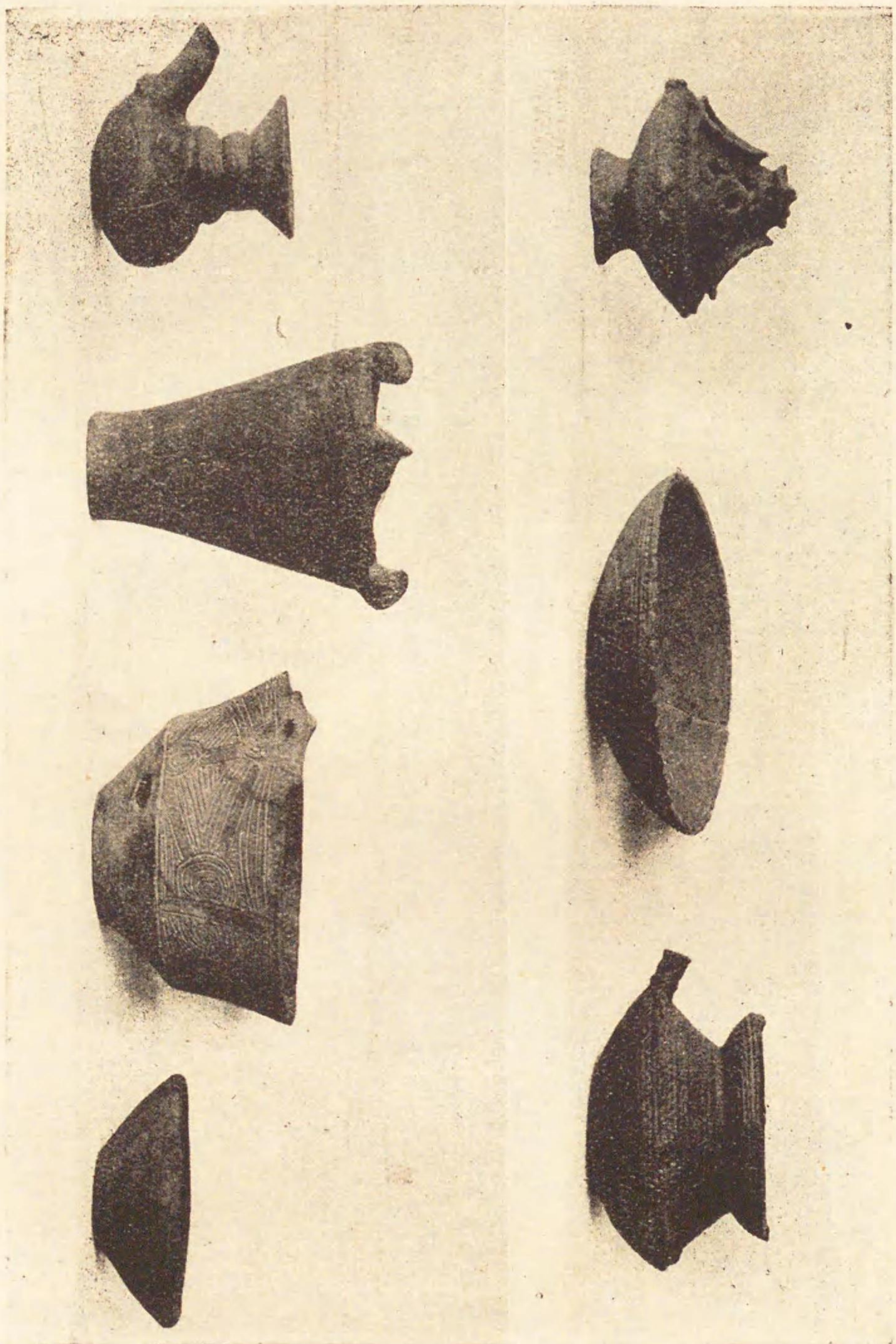
面白いことには薄手式派の遺蹟は殆んど總て當時の海岸に存在し、而かも殆んど總て其れが貝塚であります。假令ば橋樹郡に於ける鶴見河畔一帯、荏原郡、北豊島郡、南北足立郡等の如きが之であります。薄手式派の遺蹟が殆んど全く貝塚であるのは最も奇妙であります。然るに之に反し厚手式派遺蹟は武藏野の海岸線に貝塚として残つて居るものは極めて少ない。果して然らばこの事實は先史考古學上頗る一考すべき價值ありと云はねばなりません。

薄手式派の遺蹟は十中の八九まで必ず貝塚と關係して居りますから、此の地方で貝塚に接せば又必ず薄手式土器を得ます。而かも是等遺蹟の存在する地方は有史以前には多く海岸線でありました、即ち當時の灣内入江等でありました。さうすると薄手式派の彼等は漁人的生活をして居つたものと云はねばなりません。私は斯くの如き例を今日の民族の土俗に求むると、彼の西比利亞のベリング海峽附近に居住する海岸チユクチ、陸地漂泊チユクチ、或は海岸コリヤーク、陸地漂泊コリヤーク

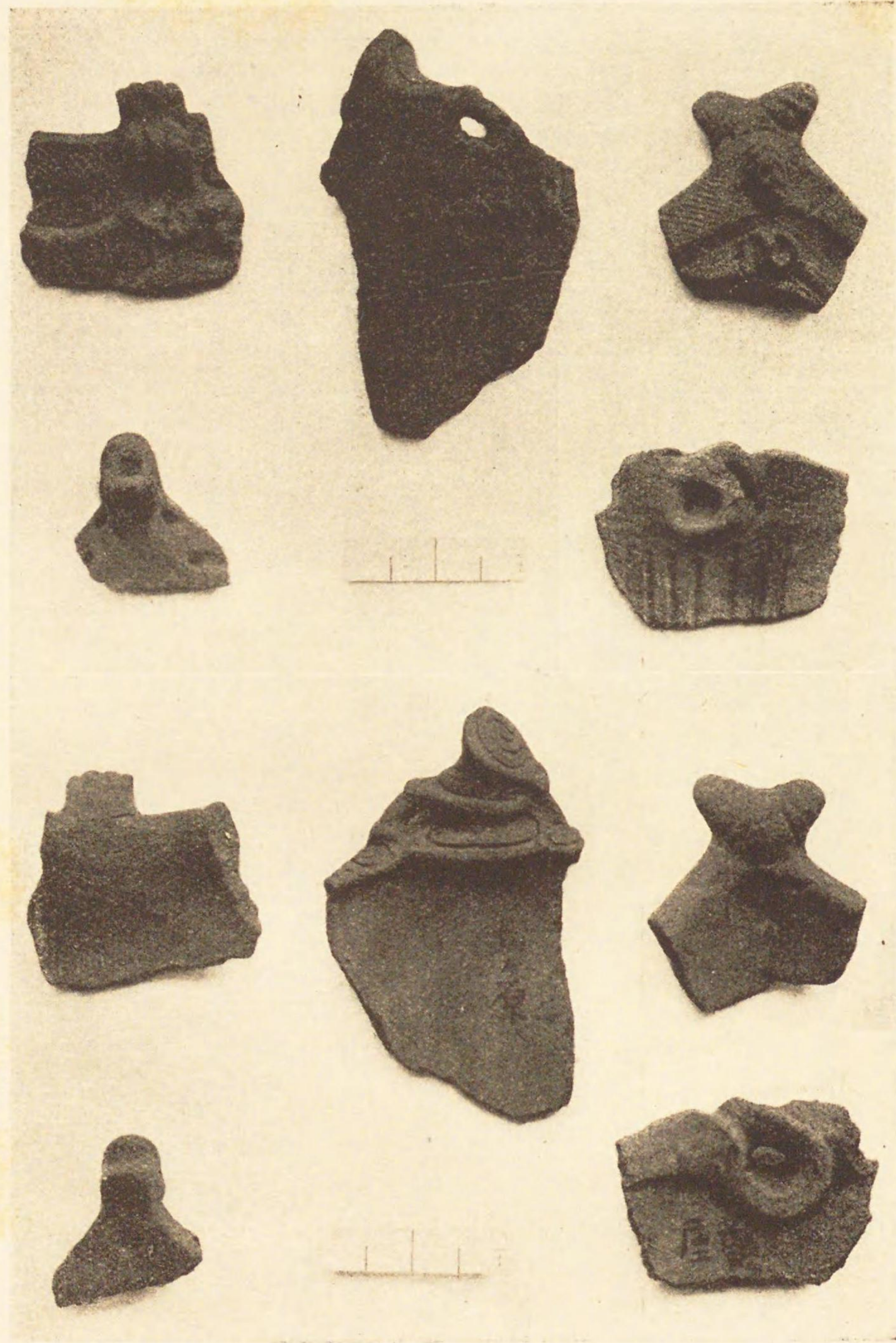
と同じものでありまじやう、即ち海岸チユクチや同コリヤークは専ら海岸で漁業を以て生活するもの、陸地漂泊コリヤークや同チユクチは山や野や川を跋渉移住し狩獵で生活するもので、彼等は各々等しく同一の種族でありますけれども、其間に土俗學上エスノグラフィカルに各々相違があります、即ち海岸に居住するものは漁人的の色彩を有し、陸地に居住するものは狩人的色彩を有つて居ります。されば此の二者を土俗學上から見ると大に異なつて居る所があります。此の事實から薄手式派を見ると、其遺蹟物の状態は恰かも漁人的で漁業を主として生活して居ることが知れます。斯くの如んば武藏野の薄手式派の人々は彼の海岸居住チユクチや海岸居住コリヤークに比すべきものでありまじやう。

彼等の地理學的分布、更に厚手式派との境界は何處の邊であります？ と云ふに、今之を大體から云ふと、薄手式派と厚手式派の境界線は先づ多摩川の前岸子母口村附近から同河畔の上沼部村に來り、其れから千束の池、目黒村に來り、更に芝、麻布、小石川、本郷、池袋、上野、田端、西ヶ原、王子、小豆澤等から志村附近に行き更にこの線が荒川を渡り北足立郡の臺地に至り大宮から少しく北に進み東に走ります。この線は實に二大別派の境界で即ち此の線の南は薄手式派の居住地帯であつて、其の以北は厚手式派の居住地帯であります。さうすると以上の境界線は先史考古學上大切なる頗る興味あるもので、有史以前に於ける武藏野居住民の分布の状態が略ぼ想像が出来るではありません。

器 土 式 奥 出



器 土 式 手 薄



(裏段下・表段上) 手把器土式手薄

か。又之れを語をかへて云ふと、此の境界線の以南は漁人の生活地帯で、其以北は狩人の生活地帯となり。私はこの境界線を殊に便利上「厚薄土器分布境界線」と名稱を附したい。

以上の如く大體から云ふと境界線が存在して居るが、其境界線の地方には互に混雜の状態を呈して居ります。假令ば彼の千束の池の遺物は二者の混雜であり、西ヶ原貝塚にも又薄手式派分布地帯に駒込不動の境内に厚手式派遺蹟があります。尙ほ河流を溯つて少數ながら存在する所もあります、其は貫井辨天池附近の如きが之であります。是等の例は豫め承知して置かねばなりません。

四、薄手式派の分布地帯

薄手式派の存在は以上の如くであるから、其分布は廣大な武藏野臺地に及ぶことは極めて僅かで、彼等は寧ろ下總、常陸の方に廣く分布して居る、彼の今日の霞ヶ浦（昔の海岸）一帯の如きは其中心點であつて、江戸崎町附近椎塚の貝塚等は其代表と認む可きものであります。さうすると此の薄手式派は私を以て考へますと全く常陸邊が彼等の本據地で此方面から當時の東京灣若しくは其入江に移住し來て、斯く分布したものでしやう。彼等の分布は常陸から上野、下野に入り、其利根川の如きは餘程溯つて存在して居ります。又一派は磐城の海岸地方にも移入して居ります。

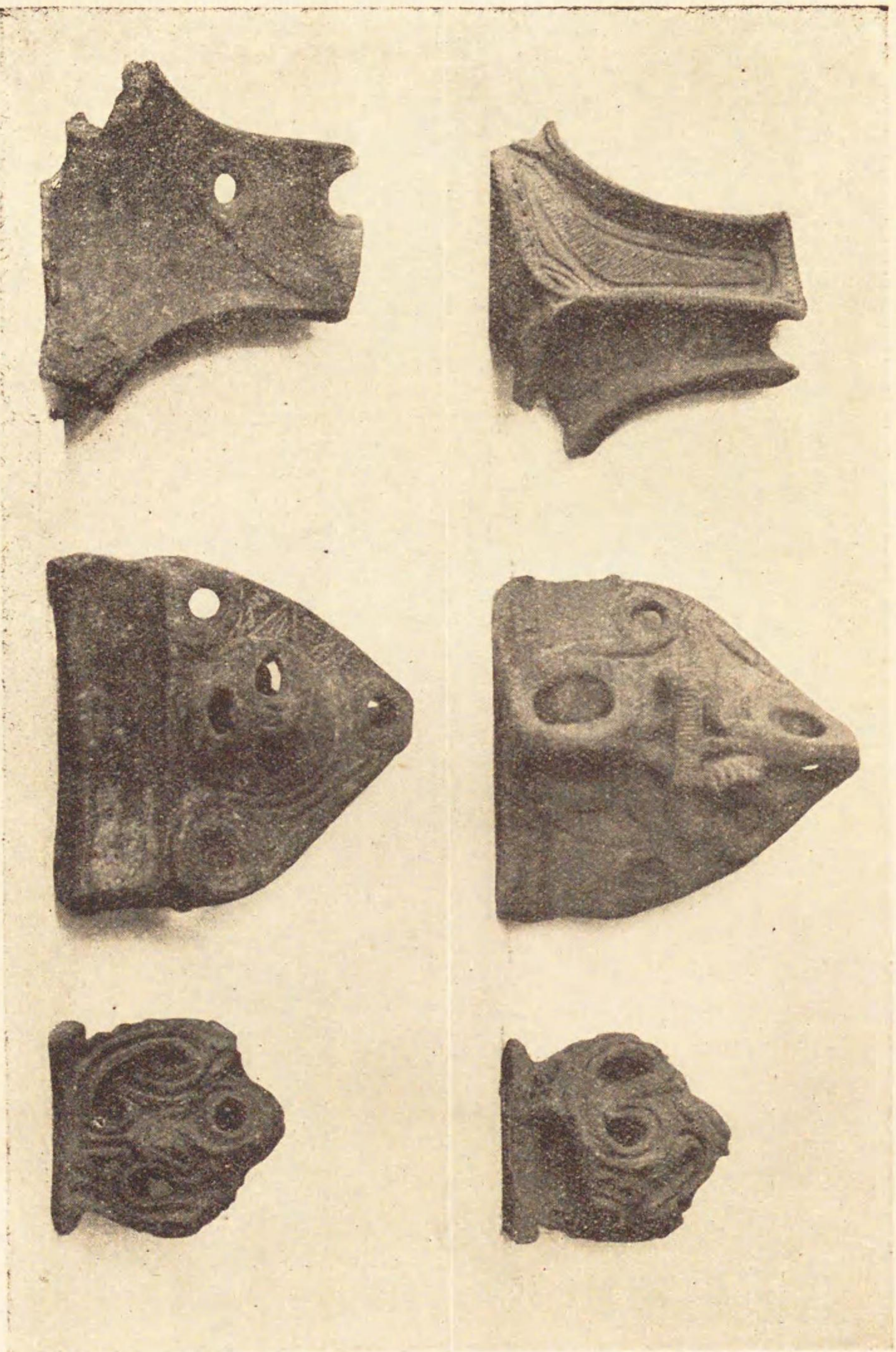
されば武藏野に於ける厚薄土器分布境界線以南は薄手式派部族の移住地であつて、或意味から云ふ

と殖民地であります。彼等は漁人的生活をなすもので、漁業をなしつゝ、武藏野の海岸、入江等に來て、遂に土着したものでありまじやう、何にせよ彼等の分布は以上の如くであります。

彼等は漁人的生活をして居つたから、比較的狩獵者と異なつて永住性を帯びて居つたものらしい、其は貝塚の積成せられた量に據り、又他の民族の例に據て知ることが出來ます。加之、彼等は當時東京灣（常陸の海岸も）の魚貝の豊富なりし爲めで、武陵桃源太平無事に生活したものか、盛に土偶土盤、さては土器に頗る巧なる意匠を施したるのを澤山作つて居ります。這是生活が豊かで無事太平でなければ一寸出來難ひ事であります。

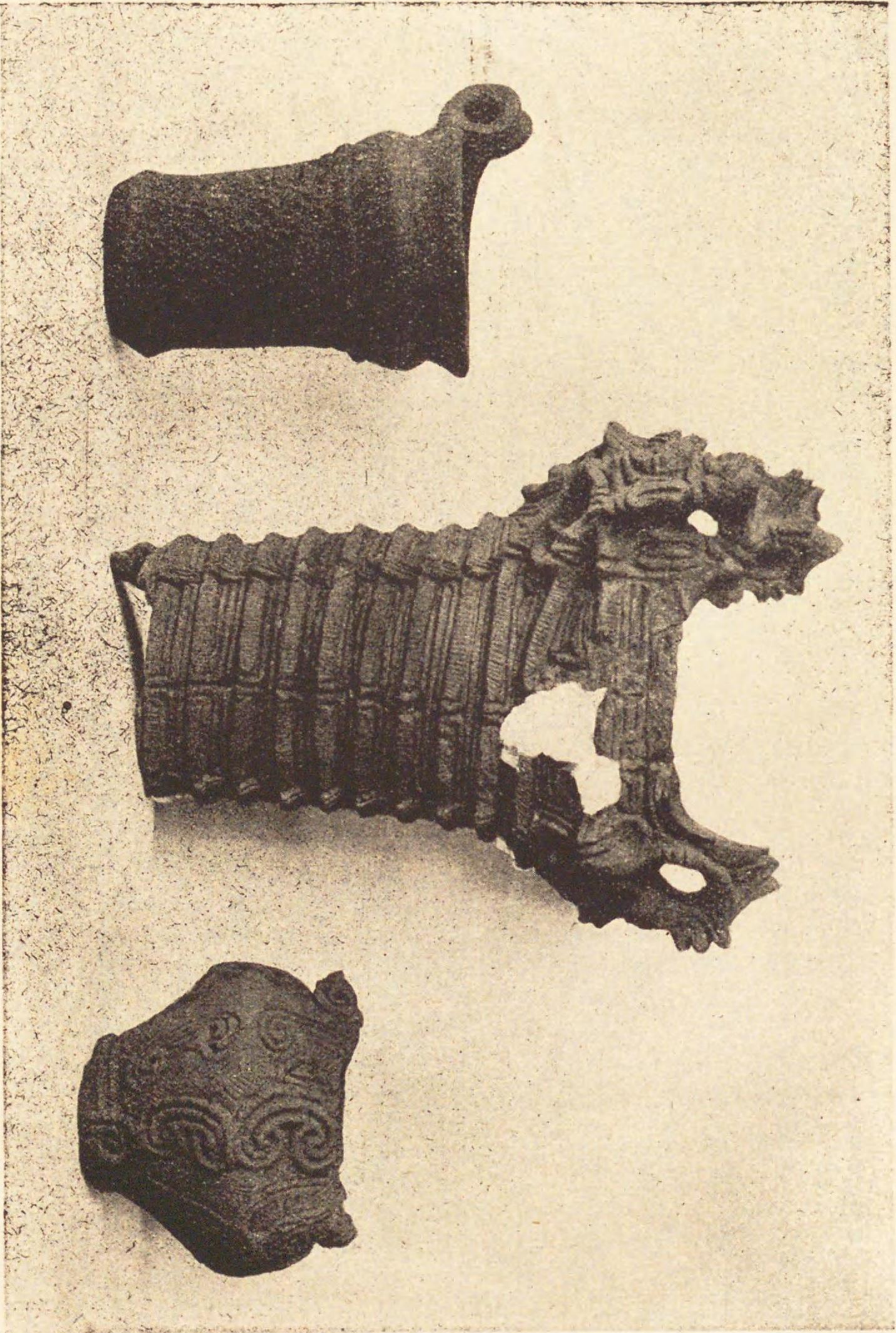
五、厚手式派の分布地帯

次に厚手式派のものは如何と云ふに、其の分布は厚薄土器分布境界線から武藏野の臺地一帯に分布し、彼等は一方伊互相摸に分布し、更に一方は甲州より信州に入り、信州では殊に諏訪、上伊那地方では最も之が發達して居ります。厚手式派は尙ほ飛彈、越後、越中、越前、佐渡等に入り、尙ほ岩代等にも這入て居ります。常陸の如きも山手の方は其れで、下野の如きは互に混雜して存在し（上野も）下總は厚薄別々に存在し、又混雜し、上總は互に混雜して居ります。……何んと此派の分布は廣大ではありません。



(裏段下・表段上) 手把器土式手厚

厚手式土器



厚手式派部族が武藏野から甲信飛等に涉て分布して居るのを見ると、此の派が深山幽谷を嫌はず廣く移住して居つたことが知れます、而して信州の如き山中で餘程發達進歩して居るのは之れ最も注意せねばならぬことではありませんか。彼等は信州（甲州）諏訪八ヶ嶽の山麓の裾野の地帯で盛に、大きな顔面把手の土器を作つて居るのは、之れ即ち彼等の得意絶頂の時代を暗示して居るではありませんか、這是底程武藏野臺地の其れよりも頗る更に一層發達して居ります。…私は是等の分布の状態等より此の厚手式派部族は海岸の者よりも原野、深林、山上を好む性質を有するものと思ひます。即ち彼等は武藏野の深林地帯や甲信等の山上に漂泊移住したもので、這是誠に彼の漂泊チユクチヤコリヤークに似た所があります。日本古語のアマベニワダヅミは彼の薄手式派でヤマヅミは厚手式派に相當しましやう。此の厚手式派は其土器の巨大、把手の且つ變化に富で頗る強建壯大なるは彼等の當時いかに深山森林中を少しも恐れず漂泊した面影を忍べるではありませんか。

彼等は武藏野の臺地（常陸、上總、下總、相模、伊豆等の其れも）では土偶を作つて居りませんが、信、甲等では之を作つて居ります、何故武藏野では彼等は之を作らなかつたか、這是頗る疑問であります。尤も南多摩郡の境村から土偶は一個出て居りますが、之を當時の事實に徴すると、この土偶は或は甲州邊から持つて來たのでは有りますまいか。

兎に角厚手式派の部族は當時甲信地方のものと往來したもので、其證據に石鏃の原料として黒曜石片があります。此の黒曜石の原産地は信州諏訪郡和田峠附近一帯であるから、當時此處から甲州を経て武藏野に送られたものでしやう、這是其時代に於ける交易の一斑が推知せられて最も面白い。

以上に據て見ると有史以前の武藏野にはアイヌとして二派の部族が居つたので、而して海岸線の彼等は常陸の連続で、臺地の彼等は甲信の連続であつて、其接觸交又點は厚薄土器分布境略界線の地方であります。されば當時海岸居住者は盛んに魚貝を漁し、獨木舟で他と往來し、又臺地居住者は森林に入り又は甲信とも往來し漂泊なしつゝ、狩獵をしたものでありましやう。漁人の方は女性的を示し、狩人の方は男性的を示して居ります、是等は有史以前の武藏野を今日より知る上に於て最も注意すべき興味ある事項であります。

六、出奥式派土器の混入

武藏野は有史以前には海岸には薄手式派が居り、臺地の森林中には厚手式派が居つたが、更に茲に注意すべきは出奥式派の土器の混入して居ることでありませう。

出奥式とは私の近頃命名したもので、之れまで陸奥式とか或は龜ヶ岡式とか云つて居つたもので、何れも土器の形式から稱したのです。私は陸奥と出羽の奥地に此の土器が存在する意味から殊更に出

羽の名稱を重んじ出奥式の名を用ゐる始めました。

出奥式土器と云ふのは、之れまでの龜ヶ岡式土器のことで、即ち形状は比較的小で薄く、製作精巧、紋様又美、此の派には土偶もあります。石器としては石斧に綠色の兩面スリ切あり、石鏃には種々美しい色の原料を用い、形状は有柄多く鏃の背は稍や高い、土偶には雪の放射を防ぐ遮光器の眼鏡を掛けて居る……彼等の本據地は太平洋方面では仙臺以北日本海方面では米澤以北であります。

此の出奥式土器は越後の北蒲原附近、岩代等に混雜して居る、即ち或者は單獨に存在し、或者は他と混交して居ります、這是此の附近が厚手式派及び薄手式派（太平洋方面）と出奥式派との接觸して居ることを示して居るのであります。更に是等が互に融和離合して一種のタイプをなして居るものもあります。

此の出奥式派のものが舶來品として、或は中間地方で摸作せられたのが武藏野にも這入て居ります。此の證據は私は東京市内湯島の貝塚でも其破片を得（先日堀の内貝塚でも一個を得ました）、故根岸氏も畠山附近から完全な同式土器を一個得て居られます。斯くの如き例は極めて小數ながら他にもあります。尙ほ遮光器を附け衣服の肩の所を高くせる（外蒙古の蒙古人は今尙ほ此の風があつて之をフンタバと云ふ）出奥式土偶が池袋の貝塚や小石川植物園からも出て居ります……是等の事實から

見ると當時よしんば間接であつたとしても、出奥式派の影響關係があつた事は推知せられます。此の影響として遮光器紋様が土器に施されて居るのは、いかに當時出奥式派の流行の行はれて居つたことが知れるではありませんか。

之れまで出奥式土器、一般に出羽や奥州の遺蹟は北方に進んで行つた最後のものとして考えて居られた様であるが、當時すでに薄手式派や厚手式派と共に存在する上から見ると關東に此の二大部族のあつた時には等しく出奥の奥地にも其部族が既にあつたものと解せねばなりません。私は此の點に於て此の三大部族は同一時代のものと認めます。されば此の事實も又武藏野に於ける有史以前研究上承知して置かねばなりません。

七、我等祖先固有日本人の侵入

薄手派厚手派二大部族は共に有史以前の當時武藏野に住まつて居つたが、其中期か少なくとも其後期には、我々祖先、即ち私の所謂固有日本人(彌生式土器を製作使用した者)は此處に侵入して來て、彼等と接見衝突したでありましたやう。彼等の遺物は各所に残つて居り、又アイヌの二大部族の遺物と混合して居る所もあります。斯くして彼等は有史以前に於て先住アイヌを或程度まで征服し後に來る原史時代の我等祖先に引き續て讓渡した物と思はれます、彼等は歴史時代初期の語部の所謂國津神

であつて、歴史の語る所の彼の日本武尊も武内宿禰も將た四道將軍等も此處を無難に通つたのは既に有史以前より引き續て居住する我等祖先の固有日本人の土着して居つた結果で、其中を自由に往來せられたものと解してよろしい。又以上の方々が此處をよしんば通過しなかつたとしても、其當時は既に固有日本人は居つて、此の武藏野、更に廣い吾妻あづまの國は彼等の移住殖民地となつて居つたのであります。私は斯く解したい。

有史以前に固有日本人が侵入し、更に原史時代に至て出雲派の人々が來り(神社の分布、古事記、六國史の記述に據て)續て天孫派の人々(同)が此處に來た様であります。而して出雲派も天孫派の人々は共に同一民族であつて互に異なつたものでは無い、而して是等の固有日本人は共に北方的色彩があります。

私は固有日本人と武藏野、國津神と天孫出雲兩派等に就ては別に考古學上、歴史上等から更めて記述して見たい。本文は専ら武藏野の有史以前に就て記述したのみであります。(大正九年十月記)

三 武藏野及び其附近の有史以前の人骨に就て

一、緒言

私は前頃『武藏野の有史以前』で、武藏野には有史以前の當時考古學上から見て薄手派及び厚手派の二大部族——二大群のあつた事を記載したが、さて彼等は體質人類學の上から見ると、どんな者であつた？ 若しも之が今日から少しでも知れるならば學問上最も面白い事でありませう。

當時の人骨は斷片ながら幸にも今日に残つて居るから多少は彼等の一斑は解せられます。併し其人骨の斷片は殆んど總てが薄手派貝塚に存在して居るから、此の事實は即ち薄手派部族の方に關係したものと見るべきであらうか？ 彼の山手に居つた厚手派部族の遺蹟からは今日まで骨片の發見せられた事は極めて少ない。されば私の今茲に記するものは即ち薄手派部族の遺蹟から出た材料ばかりと申さねばなりません。

有史以前に於ける武藏野及び其附近常總相等に於ける貝塚は、其の貝層中に鳥類、魚類、哺乳動物其他の骨、角、甲等を保存して居る、人間の骨も又此の一つであります。人骨を除く他の骨片は當時食物其他に用ゐられた不用物を、Kjokkenmoddings たる臺所物捨場に投げ捨てられたものであつて、

其骨片（鹿猪等）の如きも大概土鍋などに這入る位の長さには折られて居ります。

茲に起り来る疑問は、いかにも鹿や猪などの動物の骨が土鍋等に入れらるゝ程度の長さで貝塚の中に混在して居るのは敢て不思議ではないが、さて如何なる譯で人間の骨が他動物の骨と同様に共に混在して居るのであらう？ 之は餘程考へなければ、説明が附きにくい。何が故に人骨が他動物と共に貝塚中に存在する？ 私は先づ此の事實から解釋して見たい。

二、モールスと大森貝塚の人骨

貝塚内に人骨が他動物の骨と共に混在して居ると云ふ事實は、餘程古くから知られて居つたので、這是明治十一年の頃すでに彼のモールス氏に據て大森貝塚に於て發見せられて居ります（モールス氏 Shell mounds of Onori, 1879）併し氏に従ひますと此の人骨は貝塚内に墳墓として正しく埋葬したものでなく、當時の貝塚積成人は人肉を喰ふて居つたから其骨片は即ち肉を取つて不用として貝塚に捨てたものであると云つて居られ、氏は其證據として此處から出た人類の下顎骨、顛頭骨、上膊骨、尺骨、撓骨、手骨、大腿骨、脛骨、腓骨、跗骨、足骨等の骨片十六等に就て云はるゝには、是等の骨片中其九個は骨の兩端を打ち缺がれ、其三個は下端を打缺がれ、其二個は兩端の關節面を失なつて居る。骨片の中八個の先づ大腿骨で見ると少なくとも七人分もあつて其中の四人は成年で三人は女子か又は小

供であらう。貝塚中一つも完備した人骨は無い、是等の事實から考へても此處は埋葬したのでは無く Cannibalism の跡と見る方が適當であらうと結論せられて居ります。

三、武、相、常、總等に於ける人骨存在の場所

貝塚中に人骨の骨片が存在して居つて、其れが埋葬場のものでなく人肉を喰つて捨てられた跡であると云ふ事實は、モールス氏の大森貝塚の發掘以來、引き続き我が先輩及び私も武藏、下總、常陸等の貝塚に於て之を發見證明するに至りました。今日西は河内の國府、備中の津雲、北は宮戸島等に同時代の埋葬場を發見せられましたけれども、まだ關東では之を探がし出すことが出来ません、將來はいざ知らず、現今の所では武藏、常總地方等の人骨の出る場所は埋骨地では無く、モールス氏以來研究せられましたカンニバリズムの跡として見るより外、説明が付きません。

カンニバリズムの跡を残した遺蹟は、外國では彼のフロリダ貝塚も之で、此の事に就て、ワイマン氏は Fresh water shell mounds of the St. Johns river, Florida, 1875. の中に精しく書かれて居ります。モールス氏も之を大森貝塚の其れと比較せられて居りますが、尙ほ他の武藏及び其附近の人骨の例もまた此のフロリダ貝塚の事實と比較して見ねばなりません。即ち其状態は互によく似て居ります。

四、大森貝塚發見脛骨の特徴

今日まで關東で人骨を出した貝塚は殆んど總てが先史人類學上から申すと薄手派部族の場所でありますが、此處に存在して居る人骨は今日の所ではカンニバリズムの關係上多くは斷片となつて居る。されど關西地方に於てはすでに埋葬せられた人骨の全體が發見せられて居るから、關東からも發見せらるゝでありませうから關東に於ける有史以前民族體質の精密なる研究は今後を待たねばなりません。然らば是等の人骨はどんな特徴を有つて居る？ 先づ此の事に就てはモールス氏が既に其の大森貝塚の論文に云つて居られます。這は我が先史人類學史上最も大書特筆すべきものです。氏は大森貝塚から出た人骨中其脛骨 (Tibia) が偏平であつて、此の Platycemic tibia (0.62) は彼等民族の特質であつたであらうと殊に記るされてあります。而して彼等が脛骨の偏平であつた事は、更に關東の貝塚から發見せられた同骨の同様であることが精確に證明せられて來て、今や此の事實は最早動かす可らざる説となりました。

五、諸貝塚より出でたる四肢骨

關東の貝塚の人骨は我が斯學界の權威者たる小金井博士(博士の Beiträge zur Physischen Anthropologie der Aino II, 1894 及び Ueber die Uribewohner von Japan 1903. 東京人類學雜誌等)に據て研究せられ、稍や明かとなつて來ました。博士の測定研究せられました人骨は専ら四肢骨であります

武藏野及び其附近の有史以前の人骨に就て

が、今其著しいものを茲に列記いたしますと先づ脛骨から云へば、其指示数は 59.3 で之れはアイヌと同じであるが、アイヌよりも一層高度であります。上膊骨 (Humerus) は平均 66.8 で這も又扁平で且つ其撓曲甚しくアイヌよりも一層高度であります。大腿骨 (Femur) は平均指示数は 110.4 で、日本人と比較すると強大、殊に 107.4 及び 119.2 の如きは遙かに日本人の平均數 (100.0) を超過して居ります。而して最も異なつた點は、高度の指示數に現はるゝ様に、前後徑の左右徑に勝ること著大であることです、這は全く粗縷線 (Linea aspera) の發生が強いからで、アイヌよりも強であるけれども、貝塚の大腿骨に於てはアイヌよりも尙ほ一層強大であります。斯んな形状の大腿骨を柱狀大腿骨 (Femur à Pilastre) と申します。

以上は小金井博士の研究の結果でありますが、博士は其結果として云はれますには、是等の指示數は頗る高度であるけれども、アイヌに最も近く類似し、日本人の其れとは大に異なつて居ります。此の點に於て貝塚の人骨はアイヌと見て差支なからうと申されて居ります。

六、貝塚より出でたる頭骨

小金井博士の研究發表せられました人骨は主として四肢骨で、頭骨はありません。然るに其の頭骨に就てはマンロー氏、其他の採集貝塚人骨を基礎として足立文太郎博士が、明治四十年四月の『東京人

類學會雜誌』第二百五十三號に『本邦石器時代住民の頭蓋』と題し有益なる論文を登載せられて居ります。而て是等の材料は神奈川縣の南澤と下總余山の二貝塚の發見のもので、今博士の測定せられた頭骨の表を示すと左の通りであります。

75.8	南澤	余山
76.3		
78.4		
80.2(?)		
81.3		
83.7(?)		
83.8	平均	79.9

足立博士は以上の頭骨及び其指示數に就て、アイヌと比較し左の如く云はれて居ります、即ち

此表にも示されある通りアイヌは狭頭又は中廣頭である、示數八〇以上のものは只九、六%である。之に反し貝塚頭蓋は七個の内、四個は八〇以上である、しかも八三から八四の間の者が貝塚頭蓋には七個の内二個あるけれどもアイヌには此如き者は極めて珍らしきもので百五十六個の内只一個しかない夫れ故長廣示數による時は貝塚頭蓋はアイヌ頭蓋と著しく違ふ、甲は乙よりも廣き頭である、加之實際に於ては其違が尙ほ一層大であらねばならぬ。其理由を次に述べる、今日のアイヌには著しく日本人の血が混じて居る、小金井氏もアイヌ頭蓋を調査した成績に『アイヌ頭蓋には二つの形式がある、一つはアイヌ的形式にして、一つは蒙古的形式である、甲の頭は

武藏野及び其附近の有史以前の人骨に就て

乙よりも狭し云々」とあり、若しも石器時代の住民がアイヌならば其時のアイヌは純粹のものであると思ふ（小金井氏も其四肢骨の論文を視ると左様に考へられて居る）少くとも今日のアイヌよりも純粹に近きものである、即ち石器時代のアイヌの頭は上の表で顯はしたもののよりもつと數示が小さくあらねばならぬ、表の内大なる示數は主として後世蒙古種の混じた爲めであると看做さねばならぬ、若し今回掘り出した貝塚頭蓋と純粹のアイヌと比較したならば其違が愈大となる譯だ。以上長廣示數の比較による時は貝塚頭蓋は（今回掘り出したものだけでは）アイヌ頭蓋と違ふものと認むるが至當である。

博士は更に日本石器時代當時の民族が一種族より以上あつたであらうと假定し、最後に「茲には只今回南澤及び余山貝塚から出た頭蓋骨は其長廣示數による時はエスキモーではない、又アイヌとも認められない、貝塚のものは此等よりも、遙かに廣き頭蓋であると云ふ丈にして置く」と云つて結ばれて居ります。

七、マンロー氏の意見

足立博士に續て等しく同年六月『東京人類學會雜誌』第二百五十五號に、マンロー氏 (N. Munro) は『後石器時代の頭蓋骨』と題し記るされました。氏はすでに其明治三十九年十二月の『亞細亞協會報

告』にも此の事を書かれて居りますが、足立博士の以上の報告に對し又茲に重ねて意見を發表せられたものです。マンロー氏に據ると足立博士の測定せられた頭骨の中二個の印？あるものは注意すべきもので、即ち第三號と第六號は共に小兒であるから指示數を求むることは出来まい、又此の二個は貝塚の最下層より出たので無く貝殻層中に存せしものなれば充分信を置くに足らぬ。（尤も之は石器時代の後期に其住民が捨てた廢物中に含まるゝものたるは明かである）更に足立博士の擧げられた指示數の稍や大なるものは女の頭骨なれば之も取除かねばならぬ。さうすると計算平均を求むるものは都合四個となります。今是等四個の信すべき頭骨に就て指示數を求むると、其平均數は 77.9 となる。さうするとアイヌ頭骨に少し超過するのではないか、又余山の頭骨一個を入れて五個の平均數を求むると 79. となつてアイヌの指示數から大なるものとなる……氏は日本石器時代住民を足立博士と同じく多數人種と見らるゝので、石器時代の後期には人種の混交が起つたものと主張せられ、最後に「……足立博士が後期石器時代人民が純粹の單一種族に非らざる事を説きながらアイヌと蒙古種族の混交の幾分が此時代に起りたるを信するに躊躇せらるゝは何故なりや、貝塚の最下層に蒙古人種の特徴が存する事を否定するの理由ありや……」と附言せられて居ります。

マンロー氏は右の意見を書かれてから翌年即ち明治四十一年に *Prehistoric Japan* を出版せられ其

書中にも尙ほ南澤貝塚石器時代の人骨に就て記るされて居ります、今之に據ると、氏は(一) 75.8 (二) 76.3 (三) 78.4? (四) 78.6 (五) 81.3 (六) 78.4? を舉げて居つて其完全なる四個(三と六を除いて)の平均數は 78. と記るして居ります。マンロー氏は更に現今アイヌと比較して云はるゝには、小金井博士のアイヌ頭骨百五十八個に就ての平均數は 77.6 で、其中、男の頭骨の方は 76.5 女の頭骨の方は 77.6 となつて居る、一般から云ふと博士のアイヌ指示數は中頭を示して居るが、其一百五十六個の頭骨中には二五、六%は長頭(指示數 75.0 以上)で、六四、七%は中頭(75より80まで)があります、而して後者一百一個の頭骨中四十四は79から80までの指示數を有つて居る、次の廣頭のものも總數に對して僅かに九、六%であります。以上は博士のアイヌ頭骨測定の事實であるが、若しも今貝塚發見人骨の女子と小供(五號と六號)を除き、第三號の 78.4 を入れると平均指示數 77.6 を得ます。尙ほ若しも南澤の貝塚の下層から發見した四個の頭骨で計算すると 77.0 の平均數を得ます。さうすると現今のアイヌと貝塚人骨の頭骨は Same Stock となります。……氏は赤青色で新古アイヌの上から見た合せ線と側面から見た合せ線や、寫真版で六個頭骨のノルマベルチカリスを示して居られます。

八、私の意見

以上は、關東有史以前人骨に對し先づ今日まで論文報告として現はれた著しいものであります。私は是等の貴重なる研究に就て先史人類學上から聊か自分の意見を記るして見たいと思ひます。

小金井博士は四肢骨から、又マンロー氏は四肢骨及び頭骨の上から、各々是等の人骨がアイヌのものであると主張せられて居ります。然るに足立博士は其頭骨の上から聊か之を否定せられて居ります。(古くは坪井博士も)何れが正しいのである? 這是頗る興味ある問題であると申さねばなりません。先づ貝塚發見の四肢骨は小金井博士の申さるゝ如く、アイヌよりも高度であります、然れども日本人と比較するとアイヌの方に近い。此の點に於てアイヌに假定せられましたのは決して不都合ではありません。這是尙ほ當時の考古學上の事實や、又アイヌの土俗學上の比較的事實はよく以上の體質人類學上の其れと一致します。されば私は是等の諸理由から其四肢骨を有史以前アイヌの骨格と假定するものであります。

けれども貝塚四肢骨の指示數が今日のアイヌよりも高度なるは、之れは其當時のアイヌが今日のアイヌよりも比較的純粹のものであつたからであらうと思はれます。尤も私が前項『武藏野の有史以前』や其他で記るしました如く、有史以前の中期若しくは後期には既に彌生式土器を使用した吾人祖先たる固有日本人が這入つて來て住まつて居りますから、或所では互に接觸雜混したてでありましよう、け

れども其古い時代のものや、彼等との接觸をせない場所に居つたものは、其雜混を免かれたと思ひます。小金井博士の研究せられました四肢骨の高度なるはよく之を證明して居るのではありますまいか。

次に頭骨は如何と云ふに、マンロー氏に従へば南澤貝塚頭骨は現代のアイヌの指示數と稍やよく類似して居りますから、這は、有史以前アイヌの頭骨と認めて不都合は無いと思ひます。此の頭骨の事實と四肢骨の事實と互によくアイヌに符合するは、之れ貝塚の人骨が古代アイヌの其れであると見ても差支なからうと思ひます。

けれどもマンロー氏が云はる、南澤貝塚發見 802(?) 837(?) の二個は今しばらく除くとしても、下總余山貝塚發見 888 の如き頭骨はアイヌとしては聊か説明が困難となつて來ます、若しも當時アイヌが既に雜混して居つたとすれば兎も角であります、左様でないとすると説明が六ヶ數くなりません。

アイヌが中頭であることは足立博士やマンロー氏が引用せられし如く、小金井博士の専ら北海道アイヌの頭骨に於て認めらるゝ所であるが、尙ほ樺太アイヌも中頭であることは等しくタレネツキー氏 (A. Tarenitzky: Beiträge zur Craniologie der Aino auf sachalin. 1890) シトマンク氏 (L. Schrenck:

Die Völker des Amurlandes. 1881) 其他のオーソリチーの認むる所であります。私は又北千島のアイヌに於て之を認め (生體にて) 大正八年發行『理學部紀要』で Les Aïnu des îles Kouriles 中に此の事を記して置きました。現今のアイヌが中頭であるべきに其中に廣頭の混じて居るのは之れ即ち小金井博士の申されました如く蒙古人種との雜種になつた結果でありませう。此の事はタレネツキー氏も其論文の中に之を記して居られます。

四肢骨が現今アイヌよりも高度であるアイヌの中に廣頭の頭骨が何故に混合して居るのである? さうすると四肢骨を除いて、頭骨の上からすると現今のアイヌの事實と類似して來るのであつて、從て其混合は既に已に古い有史以前からの事となつて參ります。是に於て乎彼の長谷部、松本、濱田三博士等の所謂パンアイヌ説が成立して來るのでありますが、之は關東の遺蹟の上ではまだ確然と之を主張するには少しく早や過ぎます。

私は關東居住の最も古い有史以前のアイヌは四肢骨の高度、マンロー氏南澤の頭骨等に據て比較的純粹のタイプを有して居つたと思はれます。けれども其の中期若しくは後期の彼等は少しく他民族と混雜して來たらしく思はれます。其は考古學上から見ても既に薄手派貝塚には固有日本人の土器を混在して居るのでも知れます。即ち當時は少なくとも其附近にはアイヌ以外の民族は住まつて居るので

あります。されば之が互に接觸したことは固よりあり得べき事です。此の固有日本人と云ふのは彼の古い彌生式土器等を製作使用したもので、私は廣頭の具備者たる北方民族たるツングースと假定するものであります。されば私は其中期——後期の際にはパンアイヌとまでは行かずとも相當に廣頭のツングースとの間に接觸雜混があつたと見てよろしからう。尤も其時純粹のアイヌが體質上あつた事は固よりあります。即ち當時のアイヌは或者は純粹で又或者は雜種になつたでありませう。

次に考ふ可きは南澤でも余山でも將た其外でも關東の人骨の出た場所は今日の所では墳墓では無い、何づれも *Küchenabfallhaufen* 或は *Débris de cuisine* の貝塚であつて、而かも他動物の骨片と共に食物の不用として打捨てられた場所であります。されば是等は彼の國府、津雲、宮戸島の例と同一に見ることが出来ない。又之れが爲めに敵人、異民族の人骨もカンニバリズムとして喰て捨てたかも知れない。さうすると此の人骨の中には是等をも混入して居ると疑ふべき餘地も出来て來まじやう。此の結果として彼の余山の廣頭の頭骨も同時に其附近に住まつて居た固有日本人の人骨かも知れない、是等の疑問も又考の中に入れて置かねばなりません。

者古學上から見ると常陸飯出の貝塚は薄手派であるが、其中に餘程の彌生式土器を混入して居ります。(私の調査及び江見水蔭氏地底探検記) 又國府臺附近の底地貝塚にも此の例があり、尙ほ少數彌生

式土器混在の例は近くは我が東京市湯島の貝塚に於ても認められた。斯くの如き彌生式土器少數混在の事實は他に於ても認めらるゝ所があります。是等の考古學上の現象は、又延て體質人類學上アイヌの問題となつて参りまじやう。

殊に厚手派に反し、關東の薄手派の土器を見るに渦卷紋様モーターフルディョネルが稍や退化し、之に加ふるに彌生式土器紋様の特徵たる幾何學的紋様モチーフィジヨットリツクが多數に這入て來て居ります。是等も聊か又兩民族接觸の結果と認めらる事も出来やう。

要するに私は武藏野附近の有史以前アイヌは體質考古學及び先史考古學の上から以上の如く見度い。

(附言) 關東有史以前及び關西同時代の人種論に就ては、體質人類學、考古學、土俗學上の諸事實と比較し他日別に論文として發表する考です。

(大正十年三月記)

四 伊豆大島にある熔岩流下の有史以前の遺跡

昨秋の震災は非常なことであつたが斯くの如き震災は、有史以前苟くも人類が日本の土地に住んでから今日までの間度々あつたと見ることが出来る。然らば斯くの如き天災を蒙れる有史以前の遺跡が實際存在するかどふ？、此は興味ある問題であると思ふ。之れに就いて思ひ當るのは、彼の伊豆の大島に存在する熔岩流下の遺跡である。

此の遺跡は熔岩流^{ラツァンフロー}の層下に存在するもので、悲惨な遺跡である。一般の人類學上或は考古學上から言へば是等の學者が説明してゐる遺跡は、大概常時の遺跡なるが、此の遺跡は全く天災的變則の遺跡である。かかる遺跡の存在は珍らしいことで、日本の如き土地でなくては見られないものである。これから此のことについて述べよう。

此の遺跡は、私が明治三十四年の冬に實地を調査し、更に翌年再び調査したのであるが、その場處は大島の野増村といふ處の海岸で、之れを説くには、先づ大島全體の地形について語らねばならない。昔『日本紀』などには、伊豆の島と書いてあつて、通常、伊豆の島と云へば此の大島を指したのであ



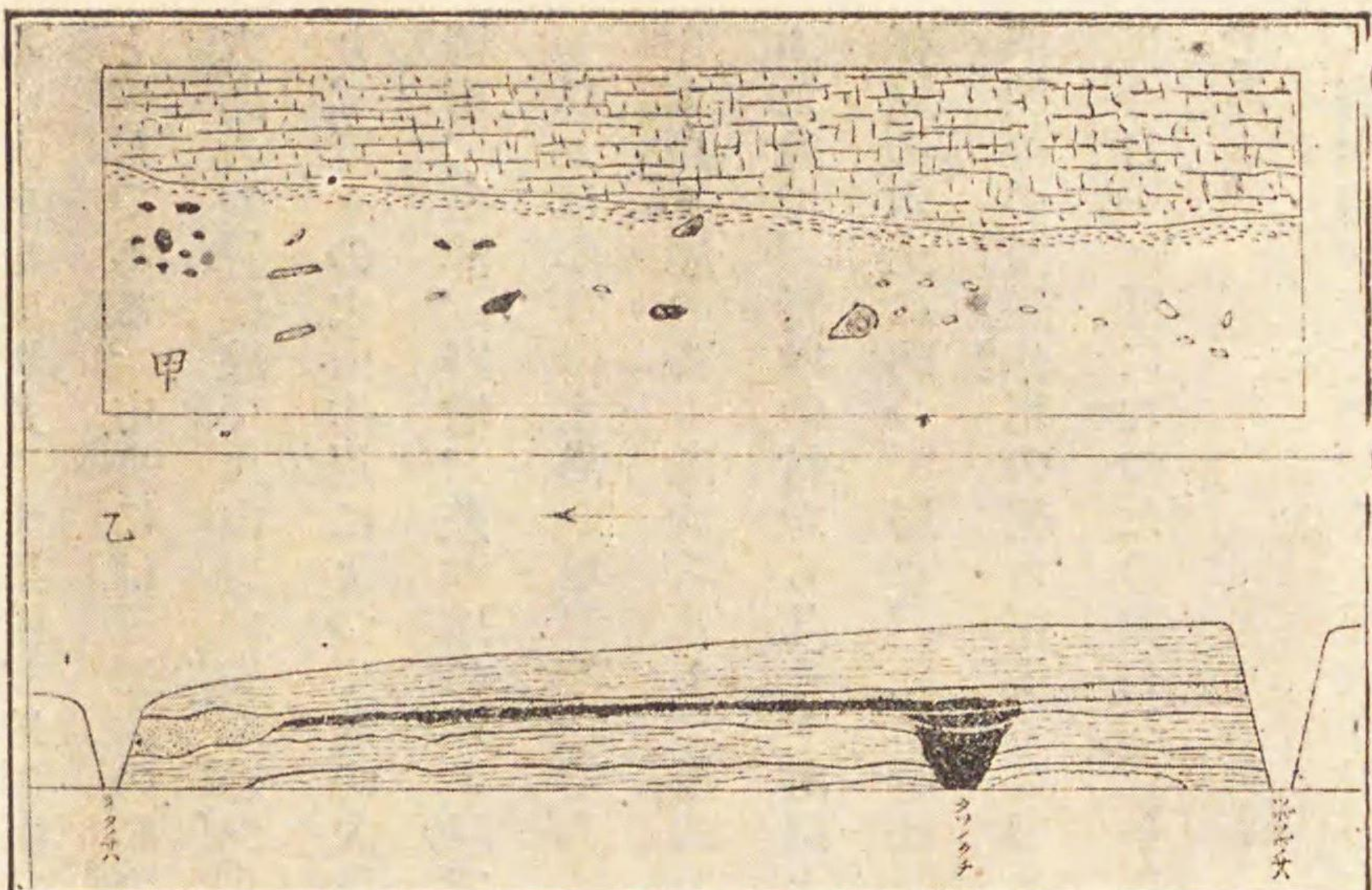
大島熔岩流下遺跡

る。大島は周廻凡そ十里餘、地形南北長く東西は狭い、最も長い處は四里弱、幅の最も廣い處は二里と少しである。中央には三原山の高い活火山が今も存する。三原山は海拔七五〇メートルであつて、大島の地質は總て火山岩の安山岩アンデサイトから成つてゐる。此の大島が火山で成立つてゐるのは明らかであり、度々の火山作用によつて此の大島が出来たのであらうと思ふ。大島の村落は現今、波浮、新島、岡田、泉津、野増、差木地の六ヶ村であつて、諸村は海岸の上に設けられてゐる。

以上は今日の大島の地形地理であるが、有史以前の遺跡は此の野増村の内にある。此の野増村は現今大島々廳のある處から凡そ二里弱で、遺跡の實際存する處は、野増から波浮へ行く途中の海岸に沿ふた處で、野増の村から凡そ十町以上隔たつて居て、海岸一面に松及び椿の林がある。此の海岸線は伊豆の本土に向つて居り、此の邊は斷崖絶壁で凡そ九十度の角度にて直立して居る。此は常に地質上波浪等の浸蝕作用エロシオンの絶えざる結果であつて、昔は海岸線はよほど沖の方に出て居たが、年々崩れ落ちて今日の状態になつたのである。今日の海岸線も今後長い間には、どれだけ失はれるか、心細い次第である。

海岸線は斯くの如く、浸蝕作用のために上の岩は海岸に墜落し、海潮に洗はれてゴロ石の如くになつて、斷崖下に存する。此の有史以前石器時代の遺跡は、伊豆本土に面した海岸線中にあるので、細言

すれば(乙圖を見よ) 字イタノザワからタツノクチと稱する岩角の間に在つて、その距離一九六メートル、而して海岸の標高は二三メートルか二四メートルである。断面が直角になつてゐるために上から下までの地層の順序がよく認められる。さてその順序から云ふと、今日見えるもの、最も下は噴灰層で、その上に熔岩流の層がある。(黒色の層)此の層の厚さは真中で平均二〇センチメートル、や



大島石器時代の遺跡

器の上に泥流層があり、その上に又噴灰層がある。此の最も上の噴灰層は現今の大島人が此處を地盤として住んで居るのである。

これら各層中、有史以前の遺跡はどこにあるかといふに、熔岩流の眞下、噴灰層の最上部に在つて、(甲圖)要するに遺跡が熔岩流で蔽はれてゐるのである。熔岩流下に在る遺物包含層の厚さは一メートル位であるが、熔岩流を受けたのはその時代であるらしく、遺跡の場處の土の色も赤く、遺物も



大島熔岩流下遺跡

非常に焼爛れて赤くなり、熔岩流下の遺跡の土は煉瓦の如くに熱度のために赤色層を呈してゐるが、遺物を包含してゐる部分の終りの方は、赤色がだんく變つて噴灰層の色となつて居る。

此の事實によれば、當時此處に住まつて居た有史以前石器時代の民衆は、噴灰層の上に住んでゐたのが一朝大爆發に逢ひ、熔岩流を蒙つたのであるが、熔岩流は時を経るに従ひ冷却して固形體となりて今日の熔岩流層を呈したことが判る。之れで見ると、有史以前の當時、大島に大爆裂のあつたのは明らかであるが、地震がそれに伴つたかどうかは判らないけれど、伴つたと思はれる。二〇餘センチメートルの熔岩流層から見ると、大爆裂は伊豆本島及び關東地方に關係したかどふか、蓋し少なからぬ餘波を及ぼしたものだと思はれる。

此の遺跡から、人骨獸骨又は石器土器などの出るのに徴すれば、こゝに民衆が住んで居つた際、噴火に逢ひ熔岩が流れて來て一堪りもなく全滅したことが判る。殊に人骨獸骨の存することは人類の住居してゐたことを示してゐる。

此の熔岩流はどれほど前であるか計算出來ないが、熔岩流層の上に泥流層あり又その上に灰噴層あるを以て見れば、有史以前の民衆が住居した後、泥流及び噴灰を噴出したことが判り、此の遺跡の時代がさう新しくないと考えられる。

斯様に此處で人類の骨の發見されることによつて、當時人間が住んでゐたのが判るのであるが、私が



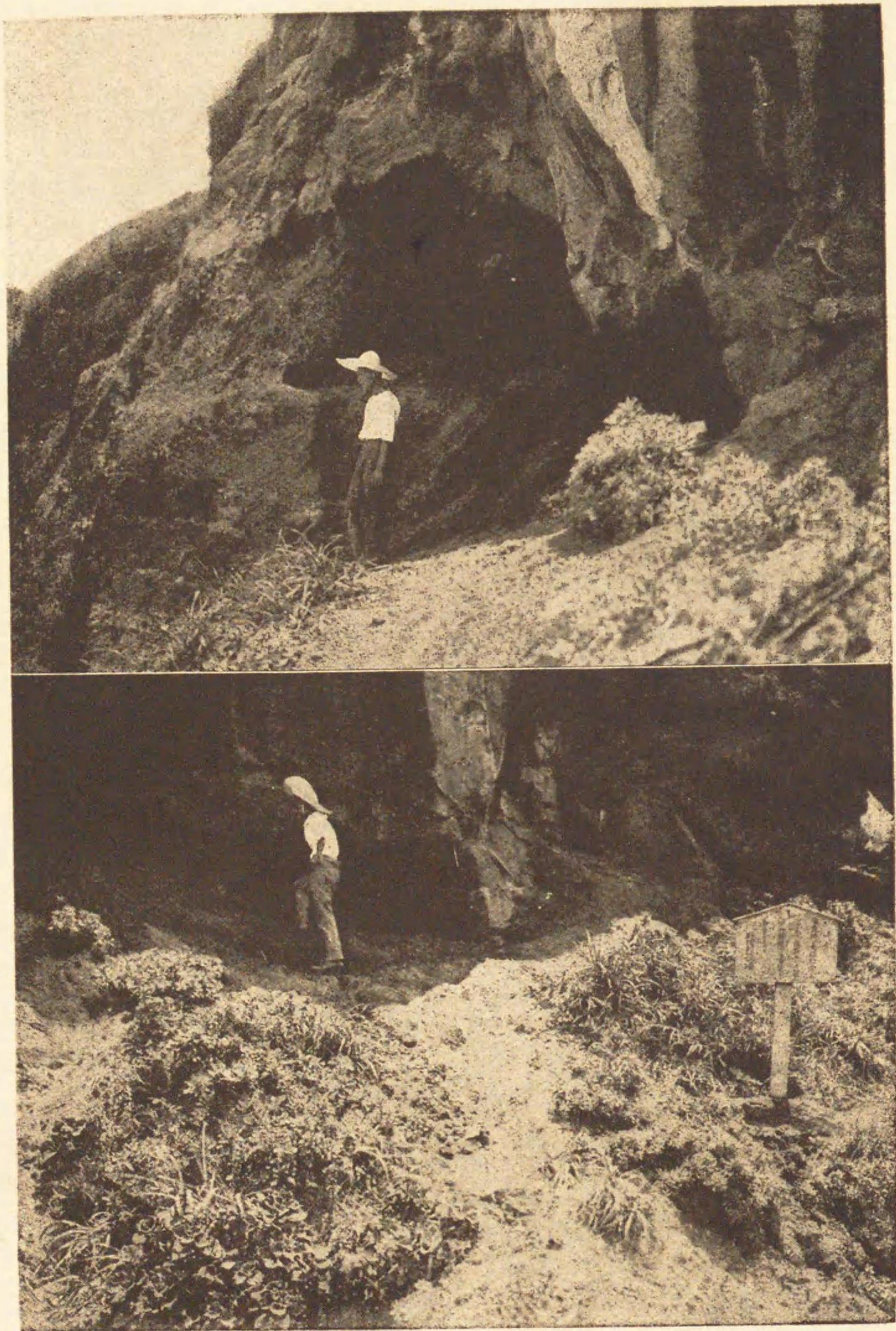
脛骨の斷片
 を發見して
 包手に取らう
 含とした時、
 層忽ちボロ
 破くに崩れ
 見しまつ
 石た。熔岩流
 のために焼
 種爛れたこと
 類は、此の骨
 の赤くなつ
 てゐるので

判る。その地の村長が、私の行く前に、頭蓋骨の破片を見たといふ話だが、これも手を觸れると忽ち碎けてしまつたさうだ。これも熔岩流下の人骨であらう。

さて此處にゐるのが石器時代の人間であることは石器が發見されるので判る。こゝから出る石器の種類（二六二頁の圖を見よ）は、石槍、石鏃、石の杵、石の臼、石槌で、それらの材料はこの地の岩石である安山岩から成つてゐる海岸の砂利石を用ひたものであり、石槌（は）には圓い天然石を用ひ、石臼（ち）は大きな石でいくらか凹んだものを使用し、石杵（ろ）もそのやうな形の砂利石で造り、また爆發して降下の際に成つた胡瓜形の火山彈をも石杵（い）としてゐる。

要するに大島に於ける石器時代の民衆が用ひた石器の原料は、多く天然石であつて粗末なものである、かゝる現象は陸地の石器には珍らしい例である。一昨年私が阿波徳島城山にある遺跡の貝塚から發見したものはやゝ之れに近く、天然石を利用して居つたが、大島もそれと趣を同じふして居る。

こゝに注意すべきは、黒耀石の破片の出ること、人工を加へた石鏃（ほ）、石槍（に）がある。尙ほ用途は判然せないが秩父石クラスタインシュトの石墨絹雲母片岩の破片（へ）が出る。黒耀石は大島には無いもので、伊豆神津島以外では信州諏訪郡の和田峠に産するのみであり、秩父石は武藏の秩父地方及び信州等に産する。故にこれらを原料とした石器は他の地方から持來つたものであることが判る。尙ほこゝ



大島熔岩流下遺蹟

の手地方に連続したものである。而して大島には土器を造るべき粘土が存せない故、こゝで発見される土器は、他に造つて持來つたものとせねば説明がつかない。伊豆、信州、武藏の山の手のものによく似てゐるのを見れば、それらで造つたものを持來つたのであらうかと思はれるが、尙ほ研究の餘地がある。大島発見の土器に多く交つてゐる雲母片岩が、新島に存する點から見れば或は新島から持來つたのかも知れぬ、若し新島からであるとすれば、石器時代の遺跡が未だ発見せられて居なくとも新島も亦間接に石器時代の人間が居つたとも言ひ得る。

骨器類は未だ私が手に入らないが、當時の民衆は自然生活を營んでゐたのであつて、こゝから哺乳動物、鳥類、魚類の遺骨が出る。哺乳動物は鹿、猪、其他海豚、鯨などで、猪は齒の總ての部分、鹿は齒のついた上顎骨と肢部の關節の處が三個出た。此の關節を比較すると、各異なつてゐて正しく三頭の鹿のものと思はれる。處で鹿猪の類は、大島には棲息せぬ故に、こゝの民衆が伊豆半島に狩倉を試みて持來つたことが判る。彼の石器の原料たる秩父石や黒耀石を他から持來つたと同じで、石器土器が甲信地方のものと著しく似てゐる點から、和田峠の黒耀石を幾多の手を経てこゝに持來つたのかも知れないと思はれる。其れとも神津島のものであるか、何とも云へぬ。海豚は房州に産するもの（デルファイヌス・ロンギロスツリス）とよく似てゐる。脊髓が二個あるがこれらは一尾のものらしい。

鯨の脊髓の斷片が一個あるが、寄り鯨であらう。又鳥の骨も存する。たゞ此の島で得らるゝ貝類が未だ此の遺跡で得られないのは不思議である。

當時の人間が、かゝる魚鳥獸類を食物としてゐたことは充分明らかで、伊豆諸島中に注意すべき遺跡であり、然かもそれが熔岩流の下にあるなど殊に興味ある事である。石器時代の人間が武陵桃源の樂しき夢の生活を營んでゐた折、突如大噴火に逢ひて熔岩の下敷となつてしまつたのは、噴火こそないが今回の大震災に華美の生活に酔へる多くの都人士が亡び行いたのと比べて一種の感慨を禁じがたい。

吾人祖先の遺物

以上は、アイヌの遺跡であるが、次に問題とすべきは、吾人の祖先は、いつ頃から大島に居つたかといふことである。今『日本紀』を見ると、最も古いのは天武天皇四年の條で、「卯辛三位麻績王有罪流于因幡、一子流伊豆島」とあり、次には村田史名倉、役小角、三宅麻呂、道原寺の僧專詮等のことが載つてゐるが、是等の人々も流罪人であつて、共に何れも千年以上の人々である。大島は當時流罪の島となつてゐて、若し流罪人が無かつたらば、史上にその名を留めなかつたであらう。而してこれらの時代に於てその島に果して人間が住んでゐたかどふかは問題であるが、更に傳ふる處がない。

『日本紀』天武天皇十三年の條に、「國を擧げて男女叫唱し東西を知らず、山は崩れ、河は湧き、諸

國郡舍及百姓倉屋寺塔破壊の類數ふべからず。人々六畜の死傷多く、伊豫温泉没して出ず、土佐の國五十餘萬頃没して海となる。古老はかゝる地動を未だ曾て知らずと云ふ、是の夕、鳴聲があつて鼓の如く東方に聞ゆ、人有り云ふ、伊豆の島の西北二面自然に三百餘丈増益し、更に一島をなす」と云つて居るが、當時の災害地に線を引くと四國畿内伊豆を結びつけられる。而して島の西北二面と云へば、大島の有史以前石器時代遺跡の存する場處である。

乃で吾人祖先の古い遺跡が存在する？と云ふに、此處に面白いことが發見される。即ち右の有史以前遺跡の附近に彌生式土器の遺跡が存在する。石器時代の人間の遺跡は、熔岩に蔽はれてゐるが、熔岩流層の上にある泥流層の上部とその上にある噴灰層の下部との中間に、彌生式土器（土器圖乙を見よ）が存する。熔岩よりはよほど時代が後に屬する。之と共に石をならべた跡もあり木炭もある、壺（は）、椀（ろ）等の土器もある之によつて吾等祖先たるの遺跡であることが判る。又柏葉カシを押しつけた土器の底（い）もあるが、柏は大島に産せない故之は陸地の土器を運び來たのであらう。是等の彌生式土器はいかに新しく見るも原史時代のもので、即ち奈良朝以前のものである。要するに少なくとも奈良朝以前に人間がこゝに住んでゐたことを認めねばならない。是等は惟ふに今より千五六百年以前の原史時代、即ち吾人の祖先が高塚を築造してゐた時代のもので、アイヌが住んでゐて天變に逢つた

後、幾代か經て（地層より考えて）何地からか此處に移住したのであらう。そして更に以上彌生式土器の存在せる遺跡の上に噴灰層のあるのを見ると、その住民が後まで永續して居たのかどふ？之れは確然未だ云ひ難いが、由來延喜式の神社は伊豆に最も多く存在する、萩原氏の如きはその神社考に、式内社の多くは伊豆諸島にあると云つて居る。三島博士は之れに反して伊豆の文化は北から來たと説く、何れが正しいかはこゝで批判せないが、大島には古くから人間のゐたことは考えられる、尙ほ他島に祝部土器等の出る所もある。是等から考えると萩原氏の説も否定する譯にゆかない。たゞそれが中途で震災のために没落したか否やは判然せぬ。

大島を始め其他の伊豆諸島は伊豆本土のみならず、伊勢紀伊等と船路の深い關係のある所であつて、即ち移住、往來、漂流等の上に面白い事實が存在する。古代にあつては陸路は關東に這入るには足柄山を往來したが、海路は紀伊——伊勢灣から此の伊豆島や伊豆の海岸に沿ふて大膽に往來したものであらう。此の時のステーションは伊豆の大島及び其附近の島々であつたであらう。是等の意味に於て萩原氏の神社説は立派に成立する様に思はれる。島々の口碑、傳説、神社の存在等も輕々に看過する事は出來ぬ、私は出雲派の人々、阿波の忌部等の人々、海部ウミベの人々を之に置たい。是等の事實に就ては他日發表する考である。

五 備中發見の石器時代二土偶

アイヌ派石器時代土偶の存在は、先づ今日の所では、美濃以西には一向其れを圖記したものがない。さうするとは是等の諸地方では、彼等アイヌは土偶を作らなかつたのであらう？ 此の疑問は斯學上頗る面白い問題と云はねばなりません。

一、菅生村發見土偶の脚部

東京帝國大學人類學教室に備中の國都窪郡菅生村、小位庄から出た土偶の破片が一個あります。這は次の頁の圖に示すものです。(長さは一寸九分)

この土偶は御覽の如く、脚部の破片であつて、全部充實し股引の様な物を穿いて居ります。此股引は布紋を押しつけた跡があり、また中央の所に細長い切れを廻はして居るが、此の切れには別に布紋は押し付けてありません。最下部は簡單に出來て居りますが、之は明かに足の所であります。

此の土偶の脚部は、關東の石器時代の土偶の其れとよく似て居りまして、之と全く同一のものは武藏、下總、常陸等からも出て居ります。今茲に參考として之を圖で示しますと左の通りであります。

何と互によく似て居るではありませんか。

備中國都窪郡菅生村大字小位庄字貝塚發見(下肢)



下總國東葛飾郡葛飾村大字古作字貝塚發見(下肢)



備中菅生村發見土偶は單に脚部のみであります。之は關東の土偶の完全なる物から推考しますと、其の形狀、風俗の一般は概ね解せられます。

二、津雲發見土偶の頭部

私は昨年十月大阪濱寺の本山彦一氏を訪問しました際、備中津雲貝塚から發掘せられました採集土器中から左の土偶の

頭部を見付け出しました。(長さ後方で一寸九分、幅凡そ二寸)。

この土偶も頭部の破片で、中は空洞でなく、充實して居ります。顔は扁平で、眉は連続した突蓋で現はし、其位置は傾斜して居りますが、左右の眼も又この眉と平行して傾斜して居ります。眼の形狀

備中發見の石器時代二土偶

は長細い。鼻は、突起する肩から續いて細長く出来て居ります。耳は一見無い様であるが、よく注意すると、右の耳は切り目が附いて居つて存在し、左の耳も前面には無いが、後面には一寸角型の小突



備中淺口大郡島津村雲貝塚發見(部頭)

起で示されて居ります。今此の頭部を側面から見ると傍に圖してある様であります。而して顔の下部の頸の下に當る所には溝が出来て居つて、自然に頸部と肩部とを示して居ります。此の頭部は長さ二寸でありますから、若し之が胴部、脚部等が連續して全體を具備するならば、可なり大きな土偶であらうと思はれます。此の土偶は破片に過ぎませんが、少なくとも之でよく當時彼等民衆の容貌の一般を表現して居りますから、私は之に接して何だかなつかしい様な氣がしてならない、殊に這是關西唯一の石器時代の土偶でありますから、極めて大切なものです。

此の土偶に就て尙ほ深く考えますと、眉の連續するは最も注意すべく、更に眼の細長くて傾斜するも又注意すべき事でしょう。加之、耳に切り目を附して居るのは耳朶に孔を開けて居つた事や、其の

孔に裝飾品を通した面影がよく窺はれます。此の土偶の主人公は實に津雲貝塚の積成者であります。津雲がら發掘した此の土偶は、關東(信州、甲州、越後等にも)から出る同時代の土偶にも之と最もよく似たものが澤山ありまして、從て其胴部、脚部等全備した形狀は確かに推知せられます。

三、關東土偶との比較

私は以上、備中菅生村及び津雲の二土偶から見ると、其土偶の容貌、形狀、風俗等は關東方面のものとも最も類似して居ります。さうすると備中方面に石器時代に住居した民族は關東方面の人々と同一な風俗であつたと思ひます。尙ほ其の土偶の容貌の又同一なるは、一層之を民族的に確かめます。

私は之まで發表した如く東海道の各地及び其以西のアイヌ派土器は關東の薄手式派器に屬すると申しましたが(京都岡崎村發見好古日録所載の土器は除く)、今茲で圖記しました二個の土偶も又明かに薄手式遺蹟から出る土偶であります。さうすると此の説を一層明かに證明する事が出来ます。

兎に角此の二個の土偶で見ると、當時彼等の風俗は明かに關東の其れと同一であります。されば今後は等の比較研究には關東の事實を以て關西のそれを推考しても敢て誤はありますまい。すでに斯く二個の土偶が存在するとせば、之に據て關西の彼等もよし關東程澤山でなくとも、土偶を製作した事は明かであります。吾人は今後關西に於て是等の調べを精密にして見たい。

(大正十一年六月)

六 石器時代に於ける關東と奥羽との關係

殊に土偶に就て

(一)

之れまでの考では、奥羽に住まつた石器時代の民衆（アイヌ派）は時代が最も新しく、關東方面の彼等は之よりも時代がズット古いとして居りました。而して關東方面の彼等が段々北方に移轉退却して、遂に奥羽にも彼等が住居するに至つたものとして居ります。であるから關東に石器時代民衆の居つた時には奥羽地方はまだ彼等の一族はなかつた様に説明するのであります。斯くの如き考を有つて居る人々は尙ほ日本の學者達の中にも相當ある様です。

(二)

奥羽の石器時代遺物が關東の其れと新しいと云ふのは、其の土器の製作がいかにも精巧緻密であるから、這はどうしても、關東の物より進歩發達して居る事を示すものであつて、此の事實は奥羽の遺物として、殊に土器等は後の物であるとの理由になつたのであります。

尙ほ之れに加ふるに、彼の蝦夷征討の傳統的史實が一層之に附加せられ色彩が濃厚となり、以上土器の精巧なる事に對して強く其の論據となつたものであります。

更にコロボツクル論者によつて石器時代民衆は關東——奥羽——北海道——と北進、否な北方に退却して行つたと云ふ説を主張せられましたから、奥羽の土器の精巧は關東から退却北進して、行く途中にあるものとして、尤も都合のよい事實となつたのであります。

(三)

奥羽の石器時代は果たして關東の石器時代より新しい？ 私は此の疑問に對して左の如く答へたい。

私の今日までに研究した結果によると、假令ば其の奥羽の土器が精巧緻密であつても、其の民衆の同地方に居住した時代は關東方面と大差ないものと思ひます。ですから私は關東に石器を製作使用して居つた時代にはまた等しく奥羽にも彼等が同一程度ですでに住つて居つたものと思ひます。此の理由から私は從來の説に反對するものであります。

私は此の意見に就ては、前々から熱心に之を主張して居りますが、私の現今の意見としては本篇に『武藏野の有史以前』として發表して居るが、今茲で其の大意を再び云ふと、先づ關東の石器時代（ア

イヌ派)には、部族として薄手式土器と厚手式土器の二群があります。然るに是等(特に薄手式に)の中に時として關東にない奥羽のみにある所謂出奥式土器(從來の龜ヶ岡式土器)が混在して居ります。是等の事實は關東奥羽にすでに石器時代の民衆が分布して居つて間接または直接に交通接觸して居つたものと説明せねばならぬのであります。此の點から私は同時代に兩所にすでに彼等の住つて居つて決して關東から北進したのではないとするものであります。

之と共に奥羽地方の遺蹟にも、また關東にある様な薄手式や厚手式土器の混在する證據が續々擧つて來ます。殊に單に其土器のみで群を形成して居る所もあります。是等の事實は又一層私の説を裏書きするものであります。

(四)

茲に注意すべきは、出奥式土器群の本據地帯は何處が中心であるかと云ふ問題です。之れは明かに奥羽が中心點の本場であつて、其の極南は太平洋方面は仙臺以北また日本海方面は羽前の地方であります。更に其以南假令は太平洋方面では仙臺附近以南、日本海方面では羽前と越後の中間地方では、出奥式土器群の混合状態にあります。更に北方になると津輕海峡を渡つて北海道の南部の海岸地方に分布して居ります。(北海道全體の土器は出奥式ではない、別の群です)以上がザット出奥式群の

地理學的分布です。

以上の如く出奥式群が當時すでに奥羽に存在して居つたとせば、關東と奥羽との遺物が互に接觸して居るのは敢て不都合ではありません。そして常、總、武等の遺物には少數に之が混在し、野州の如きに至ては之れより一層多く混在して居ります。是等は出奥式が關東に這入つて來る順序を物語るものであります。

私は會て岩代磐城方面を調査しましたが此處では未だ關東と同じく薄手厚手兩式の分布地帯で前者は磐城に多く後者は岩代に多い。けれども此兩者に對し出奥式の侵入して居る事は明かでありませぬ。更に越後に行くとその北蒲原郡の羽前に接近する所には明かに出奥式群を認めました。然るに面白い事は佐度が島に行くとき全く出奥式土器の存在を認める事は出來ないで、此處では厚手式土器群のみであります。

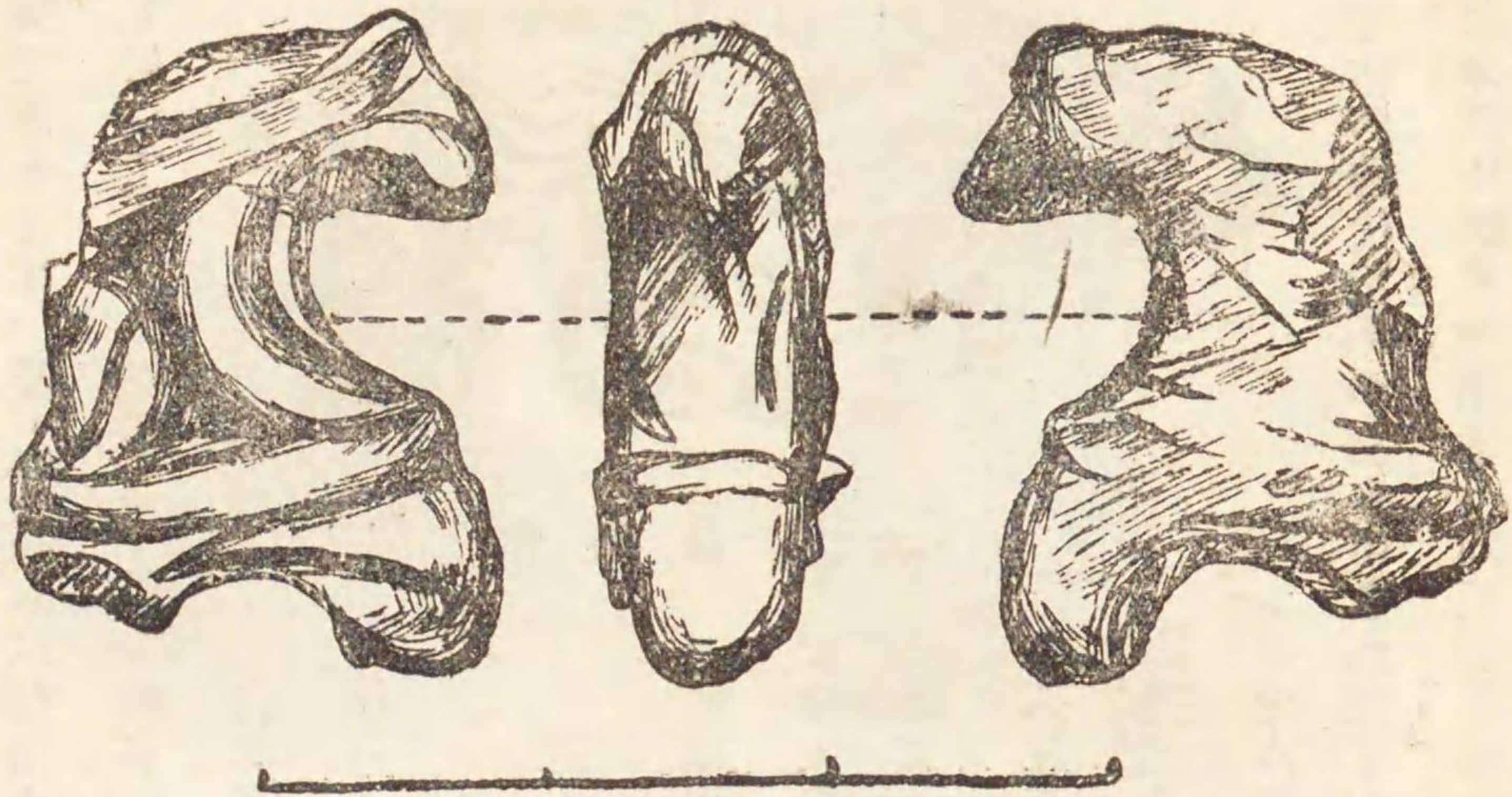
出奥式土器が關東に這入つて來て居る状態を熟視すると、出奥式其儘の所謂舶來品は少なく、概ね中間地帯あたりで之を模作したものが這入つて來て居る様です。或は關東では更に其模作の模作を襲つたかも知れません。然るに之れが白川を越え北へ北へと行くと立派な出奥式土器を見るのであります。是等の事實は確かに出奥式交通の状態を物語るものではありませぬか。

(五)

出奥式タイプの關東に這人つて居るのは、第一土器、第二土偶、第三遮光器、第四擦切磨製の風習、細い華者な石棒狀短劍等が其の主なるものであります。擦切磨製は關東でも野州に認められ其以南の地方では皆無であります。

私は茲に奥羽の石器時代民衆に觸れて居つた一例として茲に土偶及び其の風俗に就て一寸證明して見やう。

武、相、總、常等の石器時代土偶の存在は、主として薄手式群のみで、厚手式群には一二の取除けの外未だ一品だも之の出た事はない。而して是等の土偶の風俗を見ると何づれも筒袖で裾は腰邊に達し、脚部に餘り太くない股引のやうなものを穿いて居ります。此の風俗は今日常陸や下總あたりの農夫の男女が水田や畑地で仕事をして居る様子とよく似て居ります。然るに出奥式土偶の示す風俗になると、以上と稍や相違して居つて、即ち上衣は太くユツタリして、下の脚部は頗る太い股引を穿き或物は彼の大口オウケに似た程太いものであります。そしてその特徴と云ふ可きは上衣の肩の處を高く張つて裝飾して居ります。這是恰かも彼の北方蒙古人の肩に綿を入れて高くする所謂「綿峰フシタケ」と云ふものに似て居ります。顔面に遮光器を多く掛けて居る。之れで見ると當時關東の彼等と奥羽の彼等との間に



池袋發見土偶

多少の風俗の相違があつた事が知れまじやう。

然るに此處に面白い事實があります。其れは左の武藏東京市附近の池袋貝塚より出た土偶であつて、之は白井理學博士の發見にかゝるものです。

この土偶は普通一般の關東の風俗をしたものと相違し其の形狀は明かに奥羽にある出奥式土偶の風俗であります。私は参考として陸奥國中津輕郡裾野村十腰内發見の土偶を左に參考として出します。

即ち池袋發見の土偶は肩は高く張り、其上衣の形、其紋様、脚部に大口様の物を穿てる等、何と出奥式土偶其儘でありませんか。若しも顔部があつたならば、必らず遮光器を掛けて居りまじやう。

以上の池袋發見の土偶は立派に出奥式土偶の状態を示したもので、また這是明かに關東の風でなく、奥羽地方

石器時代土偶(薄手式)



石器時代土偶(出奥式)

の風であります。果して然らば此の土偶一個でも關東と奥羽との間によしんば途中に色々の地を經過して居つても互に接觸して居つた事は之に據つて證明せらるゝでありませんか。

尙ほ遮光器を掛けて居る土偶の顔部の破片は小石川植物園内からも出て居りますし、また私は小豆澤貝塚で出奥式土偶の脚部の大口様の股引になつた破片を發見した事がありました。

(六)



陸奥發見土偶

私は以上の理由によつて、關東には石器時代の當時奥羽の色彩がすでに這入つて居るものと考へます。這是當時すでに北方の彼なた奥羽地方には、すでに同民衆の住つて居る事を物語るものであつて、決して關東から北進して彼等を新しく分布せしめたものでなく、當時すでに北方に出奥式あり、南方に薄手式、若しくは厚手式の存在を示すものではありませんか。更に之に據て考へて見ると彼等が北方に居住分布するの極めて古い時代であつたと申さねばなりません。

彼の精巧緻密や粗造不細工な事は決して新舊を區別する理由にならない、尤も之れは程度問題で彼

の歐洲の古石時代の *Chellian* 時代から *Acheulean—Mousterian* ……と進歩發達して行つた時代の器物なれば精巧——粗造の區別で新舊等も分かりまじやうが、日本の石器時代の如き遺物では、之れが區別は出来ない、殊に土器に於ては寧ろ土俗學上の事實で形狀、紋様などは立派なる意味あるものから意味のない方に退化する方が普通であるとせば、精粗の別は必ずしも時代の新舊を區別する理由にはなりません。況んや以上の事實は同時代にともに南北にすでに居住せる事を物語つて居るものに於てをやです。

ですから當時奥羽には精巧緻密な土器を作つて居つた民衆が居り、關東には之に反して比較的粗造不細工な土器を作つて居つた民衆があつたと解すべき者でしやう。さうして此の事實は恰も太平洋諸島中、最も土器作りの盛んな彼のバプアン族の間に行はる、甲乙丙丁等の島々で土器の製作に精粗のあるのと同じ状態にあつた者でしやう。此のバプアンの例が頗るよく説明して居ります。

(大正十二年五月)

七 一個の禮文島土器に就て

(一)

八幡一郎氏は北海道、北見國、禮文郡船泊村、福井隆則氏の同地で採集した遺物（氏は概ね此採集品を大學へ献納せられた）に就て、『人類學雜誌』に數回に涉つて「北海道北見國禮文島の石器時代の遺物」と題して登載せられて居ります。這是採集者福井氏と、其の採集品記述者の八幡氏に向て、其の勞を謝さねばなりません。

數年前、同島、香深港の渡邊榮造氏より私の手を経て大學に献納せられた土器が一個あります。此の土器は氏が自から發見採集せられたもので、場所は同島香深村であります。私は今茲で此の一個の土器に就て、福井氏發見の土器其他と比較し一寸書いて見たい。

私が今殊更に此の一個の土器に就て、記載するのは、私から見ると這是先史人類學上頗る面白い事實に觸れるからであります。此の一個の土器は同じ禮文島のものであるが、福井氏發見の多くの土器と相異つて居つて、全く別個の種類に屬するものであります。此の點に於て非常に學術上興味がある

のです。

(二)

福井隆則氏採集の禮文島土器は、之れ疑ふ可からざる北海道本土の土器と同一のものであつて、少しも相違した所がありません。此の點に於て禮文島の是等の土器は北海道本土の土器と密接なる關係があるものと申してよろしい。また這是延て禮文島の石器時代の遺跡遺物は北海道本土の延長であると申してよろしい。

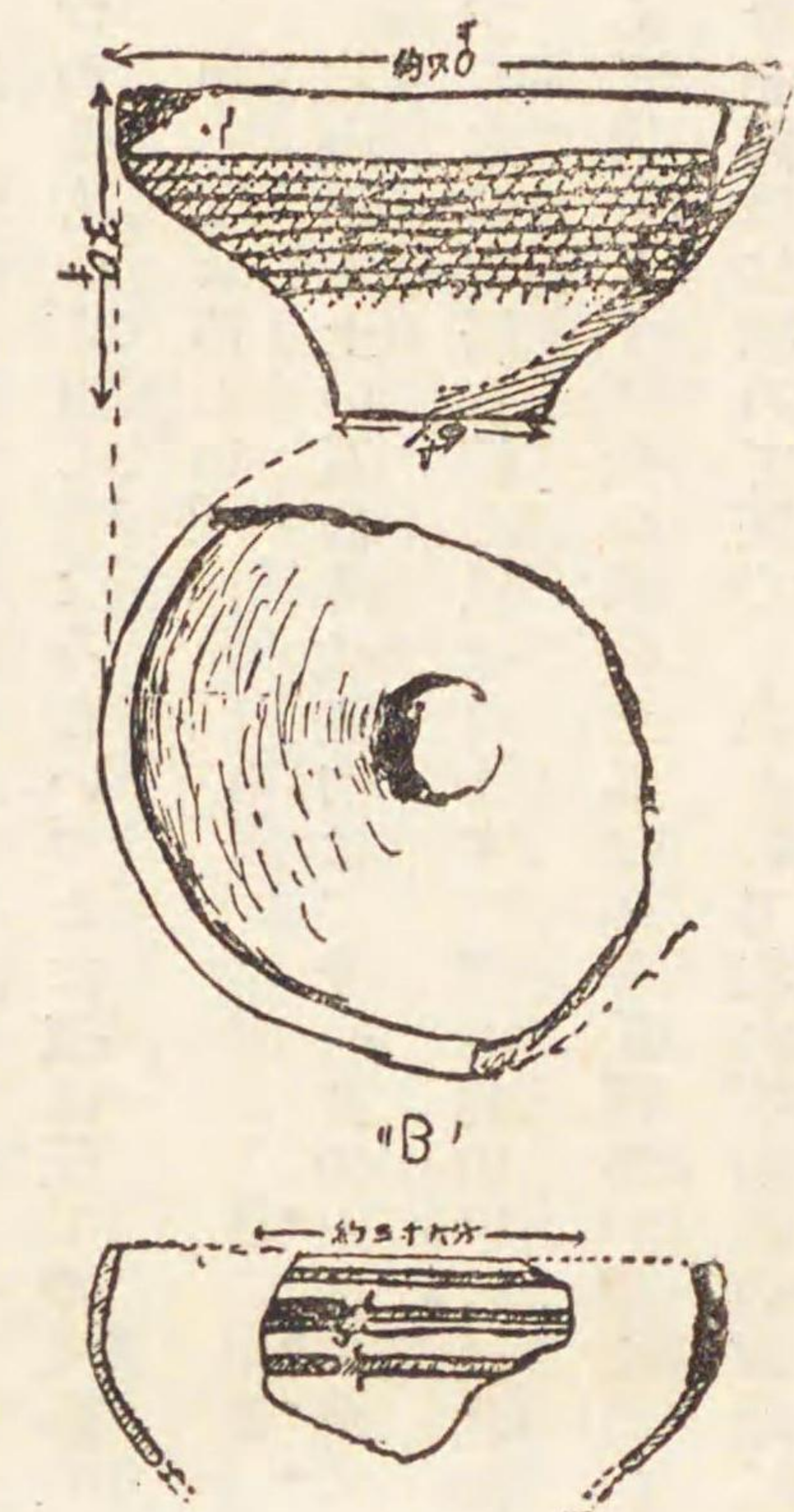
北海道本土の石器時代遺物は、先づ其の土器の形式からよく見ますと、之は概ね甲乙の二つの形式からなつて居る様に思はれます。即ち其の甲式は北海道の殆んど總てに分布し、竪穴、堡寨等に存在して居ります。此の式の土器は福井氏採集の禮文島の土器の如きが之であります。而して乙式は其の分布區域は極めて狭く、主として北海道南部の海岸にあるもので、這是奥羽の土器の形式を見備するものですから、此の乙式は奥羽の延長と申してよろしい。私は北海道本土の石器時代の土器は斯んな風に見て居ります。私は甲の土器を殊に北海道式土器と稱したい。

以上の甲式土器は更に禮文島（東方千島列島にも）に分布して居りますが、さて之が樺太島に至つては如何と云ふに、南樺太島石器時代の土器は一見北海道の甲式土器に似て居る様であります。よ

く之を注意して見ると、這はまた一種特別なもので、更に之れが北樺太島の其れになると全く明かに相違して居ります。樺太島の土器は寧ろ西比利亞沿海州沿岸や黒龍江畔のものと似て居ります。是等の事實は最も精密に研究せねばならぬ所でありませう。私は此の事に就て何づれ更めて精しく書く考で

(A) 北海道禮文島及 (B) 下總堀ノ内貝塚發見土器

あるが、要するに私から考えますと、北海道



の石器時代遺跡遺物の先史人類學的位置は、西比利亞の沿海州と日本本土との接觸點であつて、其の中間の樺太島は大陸たる沿海州の其れの色彩が極めて濃厚になつて居る様です。而して北海道同時代土器(甲式)は之れが爲めに一種の中間型を形成して居る様です。

此の事實は吾人の最も注意を要すべき所であらう。

以上の事實はたゞに土器のみならず、尙ほ石器の製作法——形狀。骨器の形狀等の上にも認められます。

(III)

然るに渡邊榮造氏の採集せられた土器は如何と云ふに、這は一も北海道の甲式に似る所がなく、全く別種のものであつて、前頁の(A)圖にあるのが其れであります。此の土器は即ち碗形を呈し、厚さは二分五厘、胴部に紋様を附け、胴部から下部に至るに従ひ、非常に狭まり細くなり、底は偏平であるけれども、底部の内面は凹みを有つて居る。焼方は最も粗造であつて、灰黒色を帯びて居ります。

此の土器は、北海道甲式土器、即ち禮文島の土器と一種異なつて居りまして、這は明かに關東方面にある所謂薄手式土器であります。此の土器が薄手式土器である事は、一見其の形狀、其の紋様等に據て承知せられます、若しも之れが關東にあるとせば、必ず其外面はミガキをかけられて居ります。

試みに此の土器を、其の發見地名を知らさずして専門家に見せるならば、其の人は必ずや之を以て關東方面のものと申しましやう。現に二三の人は斯く云つたのであります。之れだけ此の土器が薄手式土器に似て居るのであります。

茲に参考として今手許にある(B)を紹介します。此の土器は破片でありますが、薄手式土器で、發見地は下總堀の内貝塚であります。讀者は兩者が互に互に似て居るかに注意せられたい。

(IV)

北海道の甲式土器の分布域内である禮文島に何が故に薄手式土器が混在して居るのである? 這は

極めて面白い問題と云はねばなりません。

私の今日までの智識では、薄手式土器の分布は日本東北方にはいかなる状態になつて居るかと云ふに、太平洋沿岸の方では關東の石器時代當時の海岸線から磐城、陸前等の海岸線及び其附近（石器時代當時）に分布して居ります。此の點に於て同地方は明かに關東の薄手式派の延長です。然るに日本海方面は如何と云ふに、越後等に僅かに點々其混在を見るのみです。岩代の猪苗代湖畔にも少しく其存在を認めます。要するに岩代から越中、越後、佐渡、越前、等は厚手式派の分布域内でありませう。

以上の如き薄手式、厚手式兩派の分布線のあるに、更に日本本州の北方には出奥式土器（所謂之れまでの龜ヶ岡式土器）が存在分布し、之れが北海道南部に延長して居ります。尙ほ更に北海道本土には一種北海道式土器があります。樺太島の南部は北海道式土器の色彩が薄くなり、更に更に其の北部に進むと最早其の色彩は立派に沿海州や黒龍江畔土器の形式となつて居ります。

以上の如き石器時代土器の分布線から見ると、禮文島の薄手式土器は何處から移來したものでしやう？ 今日はまだ北海道や奥羽地方の専門的調査が出来て居りませんから、私は今輕々しく其の結論をさけたいが、此の一個の薄手式土器が北海の孤島の禮文島に存在して居るのは先史人類學上最も注意すべき事でありませう。

八 日本石器時代民衆の女神信仰

我が日本の石器時代（アイヌ族）民衆の信仰して居つた宗教は、抑もどんな種類のものであつたであらう？ 此の疑問に對し津田敬武氏も『神道起原論』に於て、其最初の章の所で之を記し、また出口米吉氏（東京人類學雜誌）等も、彼等の残した石棒に就て之を論じたことがありました。私も今茲で彼等の宗教觀の一つ二つを記して見たい。

私は彼等の宗教思想を、其の遺物上から考察すると、所謂比較宗教學上で分類する Fetichism (Animism), Totemism を、將た Shamanism なども存在して居る様であるが、是等の總括した概論様の物は、何づれ之を他日に述べる事として、茲には最も其細かなものに就て、其の一つを書いて見ようと思ふ。

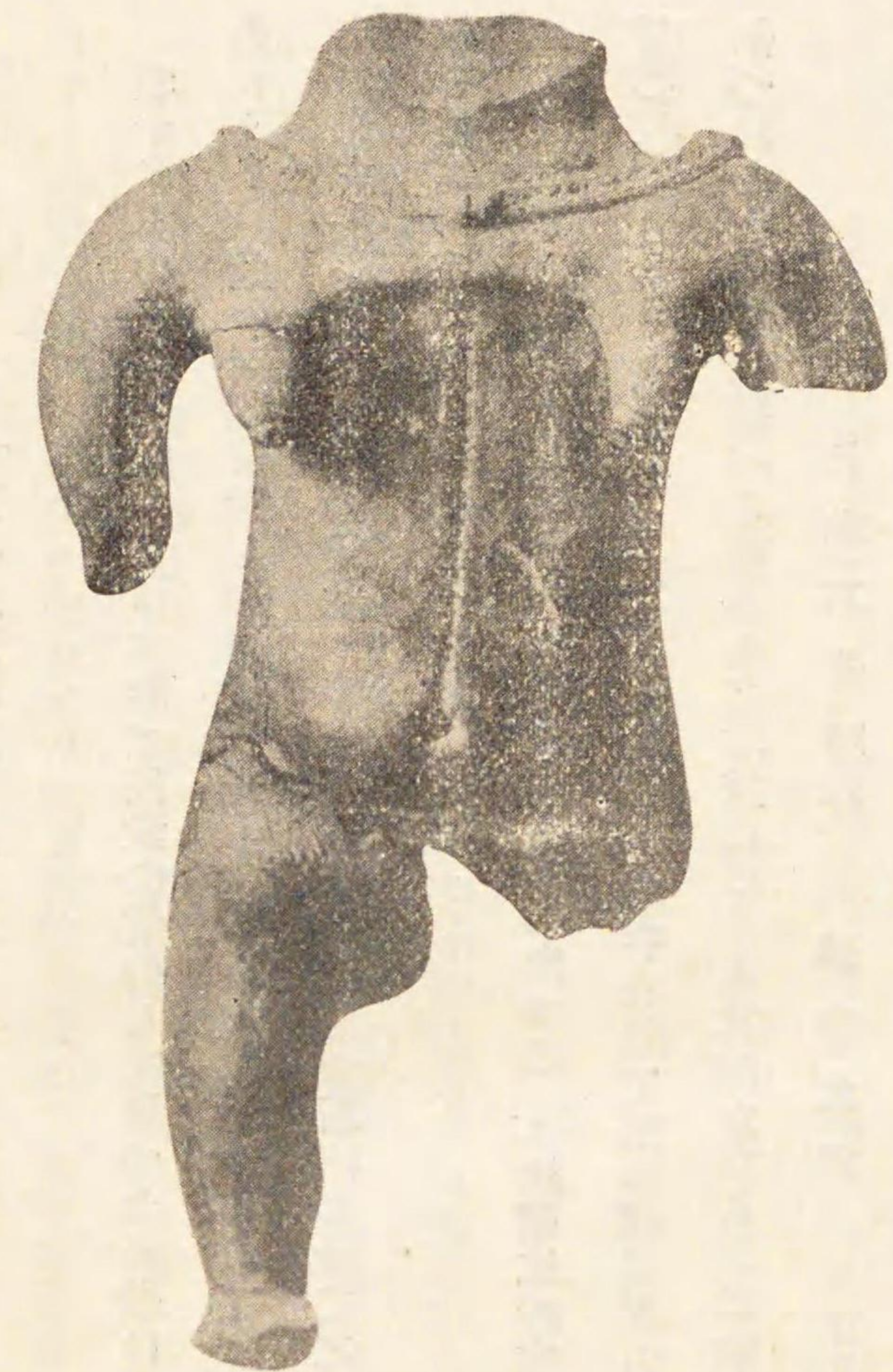
一 日本石器時代女神の土偶

私が彼等の遺物に就て、先づ第一に氣の附くのは、彼等の製作した土偶の多數にある事でありませう。而して是等の土偶によく注意すると、男性 (Male) よりも女性 (Female) の方が比較的が多い。否、殆んど女性のもの許りの所もあります。私は是等の事實から彼等の土偶は男性よりも寧ろ女性の方

を多く作つた事が推知せられます。這是單に土偶のみならず、彼の厚手式派土器の特有である顔面把手の如きも殆んど全く女性であります。加之彼等の残した土器の表面に刻せられたる *ひび* の如き、又殆んど總てが女性であります。さうすると當時の民衆は兩性を平面に刻する場合も、又立體の人像を

作る場合にも女性の方を表現するを、頗る好んで居つた事が知れませう。

常陸發見土偶
彼等が斯くの如く男性の形よりも、女性の形を作つて居るのは、抑もどんな理由に據てとありませう？



時彼等の間に盛に女神 (Female divinity) 信仰の行はれた結果、斯く多數なる女形が、土偶や其他の物に表現せらるゝに云つた事と思はれます。

私は一般未開人や其他の例から推しまして、這是當

私は之れの證據として、茲に實際の女神土偶を一つ二つ試に舉げて見よう。即ち左は陸奥國西津輕郡館岡村から出た土偶で、顔面部は缺損して無いが大きさは約六寸六分あり、這是裸體であつて、腰部にサルマタ様のものをはいて居るのです。乳部の甚しく大きな工合から明かに女性である事を知れませう。次は左の土偶で、出所は常陸國稻敷村大須賀村、之れも顔面部と兩手が缺損して無くなつて居りますが大きさは五寸あります。其の乳部が甚しく突起し、腹部が又頗る出張つて居るのから見れば、之も明かに女性を示したものでせう。

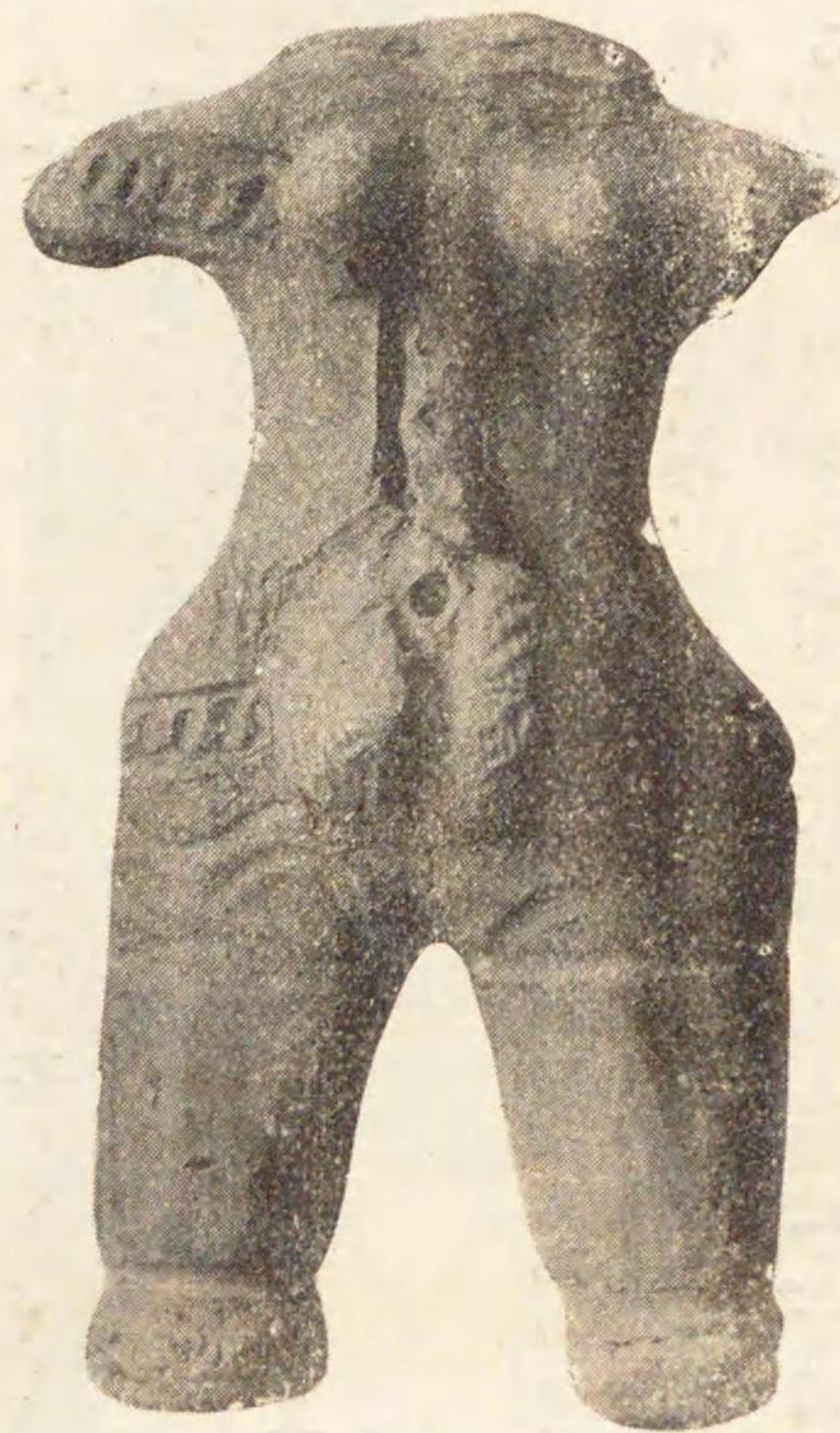
斯くの如き材料を擧げると中々多いが、いづれも大同小異でありますから、茲には單に右二個の女神土偶の例を示しました。

彼等の土偶の中には、固より子供の玩具もありませうが、其の多くは宗教上のもので、殊に以上の種類の如き土偶は、當時の信仰上の神像でありませう、這是殊更に乳部を甚しく突起させ、腹部を頗る肥滿せしめ、また或者には陰部さへも現はして居るので、何物かのシムボルである事が知れます。そして斯んな形状が、未開人や古代の遺物の女神像にあるのでも、一層之を確かめる事が出來ます。文化の發達した人間から見ると土偶の如きは玩具の様に見えるが、未開人や原始人には其れは多く神像になつて居ります。私は是等の諸點から之を神像、殊に女神像とするもので、彼等は當時之を信

仰し、之を尊拜し、従つて彼等は之に據て、何事をか祈願したものであると存じます。

二、日本石器時代女神の護符

土偶に次て彼等の製作品中、注意すべきは土盤(Clay tablet)で這は次の頁の圖の様なもので、物質は専ら土製で其の形状は概ね長方形または小判形で、上に孔の開いて居るものがある、そして表面には顔面や衣服や其紋様などを刻して居ります。

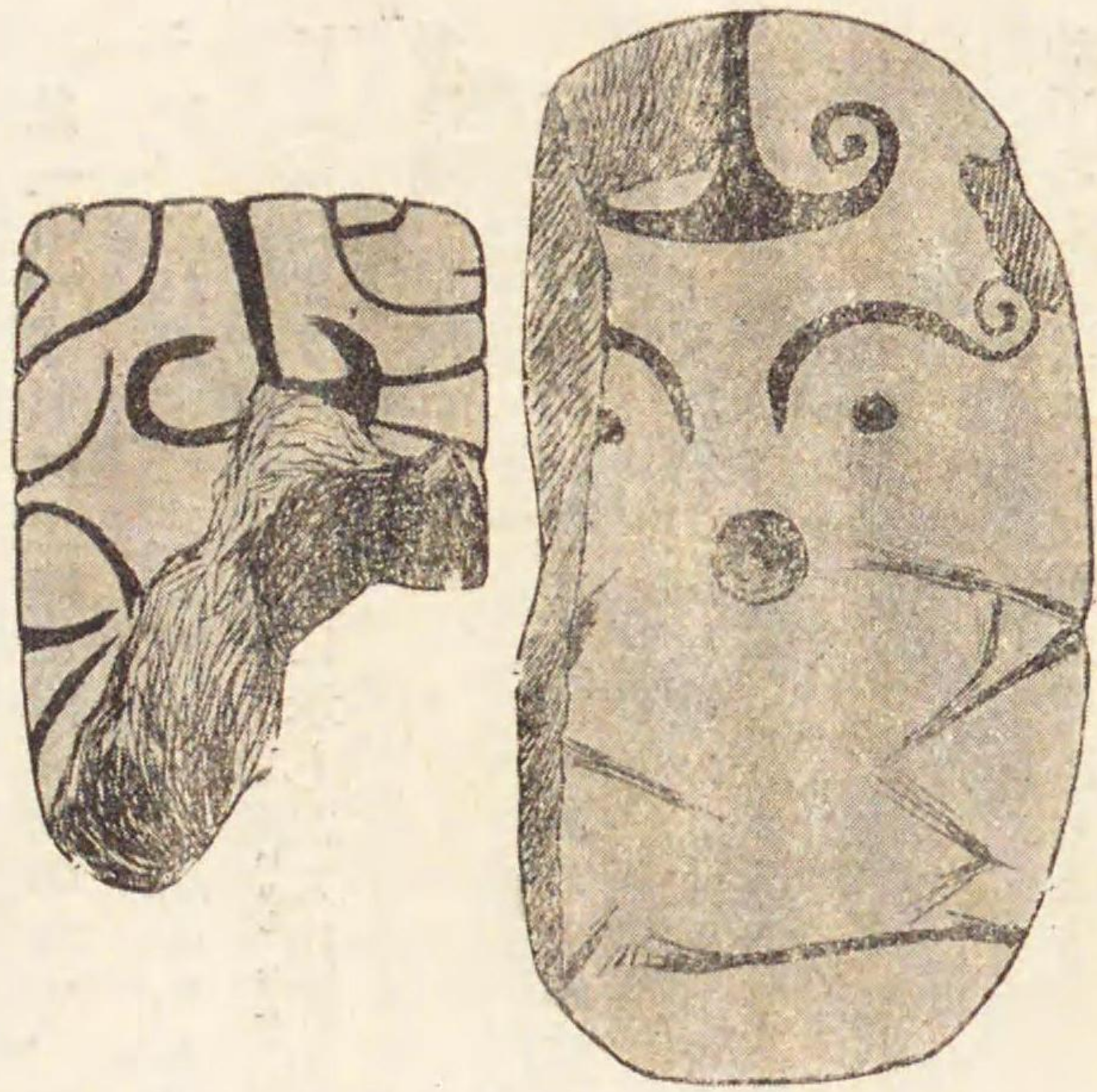


常陸發見の土偶

此の土盤は何に使用したものであるかと云ふに、這は當時彼等の惡魔の害を避ける爲めの一種の護符であつて、其孔の

開いて居る方は之に紐を通して胸に付け、又孔の無い方の物は之を懐中するとか、或は箱籠や袋の中に入れて常に所持するとか、或は家の内に安置したものでせう、即ち土盤は土偶に於ける如く、一種の神秘威力のあると信じられて居つたものでせう。這は土製であります、他に石製の物もあります。又當時に木の其れもあつたであります。

此の土盤に刻せられて居る圖様を見るに、種々相異つたものがある様であります、要するに、其最初のものとは人の顔面、其他を示したものです。之が段々變化して種々に圖化せられ、紋様化せられ、最後の變形したものは最初の原始表像と一見關係の無い様なものになつて仕舞つて居ります。けれど



常陸入四間(1) 武藏大森(2)

土盤

も此の最初の表像と最後に極端に變化した物との間に中間物を置いて見ると、全く連絡して仕舞ひますから、即ち是等が同一のものであると云ふ事が知れます。斯くの如き護符の變化は、今日其れでも知ることが出来まして、假令ば守札等に畫かれた圖畫や文字が、種々に變形して居る事實に據ても知れませう。

以上この護符の表面に刻せられた人像をよく見ると、殆ど女神であります。今(1)に示しました其れで見ると、女性を現はして居る事が分りませう。そして此の土盤上に表現せられたものは、比較的オリヂナルの護符の圖様と思はれます。即ち這は頭に帽子或は王冠の様な物を戴き容貌は柔和なる女

性でありまして、其他は衣服や其紋様を示して居ります。此の帽子、王冠様の『山』の字形のものは他の土盤を見ると種々に變形を呈して來ます。

此『山』字形は土盤に付き物の様で、這は確かに神祕威力のあるシムボルと考へて居つたのであらうか、之れが常に之に附隨して居るのを見ると、私は轉た彼の細胞に於ける染色體 (Oromatin) の様に思はれます。即ち茲に示した入四間いっしけんの土盤が變化して大森土盤(2)の様になつても尙ほ『山』字形は残つて居ります。

當時の護符の神像が女性であるのを見ると、どうしても又た土偶の女性と關係を有する事が知れます。そして又護符の神は明かに女神 (Female divinity) であります。果して然らば此の女神は土偶の女神と同一の神であつて、一方は土偶として立體に作り、一方は携帶其他に便利な爲めに、薄い長方形の板形に作つたものであるが、這は只今の所では何とも申す事が出来ませんが、只土盤の護符神が女神であると云ふ事は確かであります。

大野延太郎氏や其他の學著は土偶と土盤と全く同一のもので、其の中間物があるから全く連續して仕舞ふと申しますが、這は一方から見ると尤と思はれますが、私は之と聊か反對で、土偶と土盤とは、もとから明かに別物で、土偶は神像其のもので主として家の内または岩上、樹上、其他に安置しだも

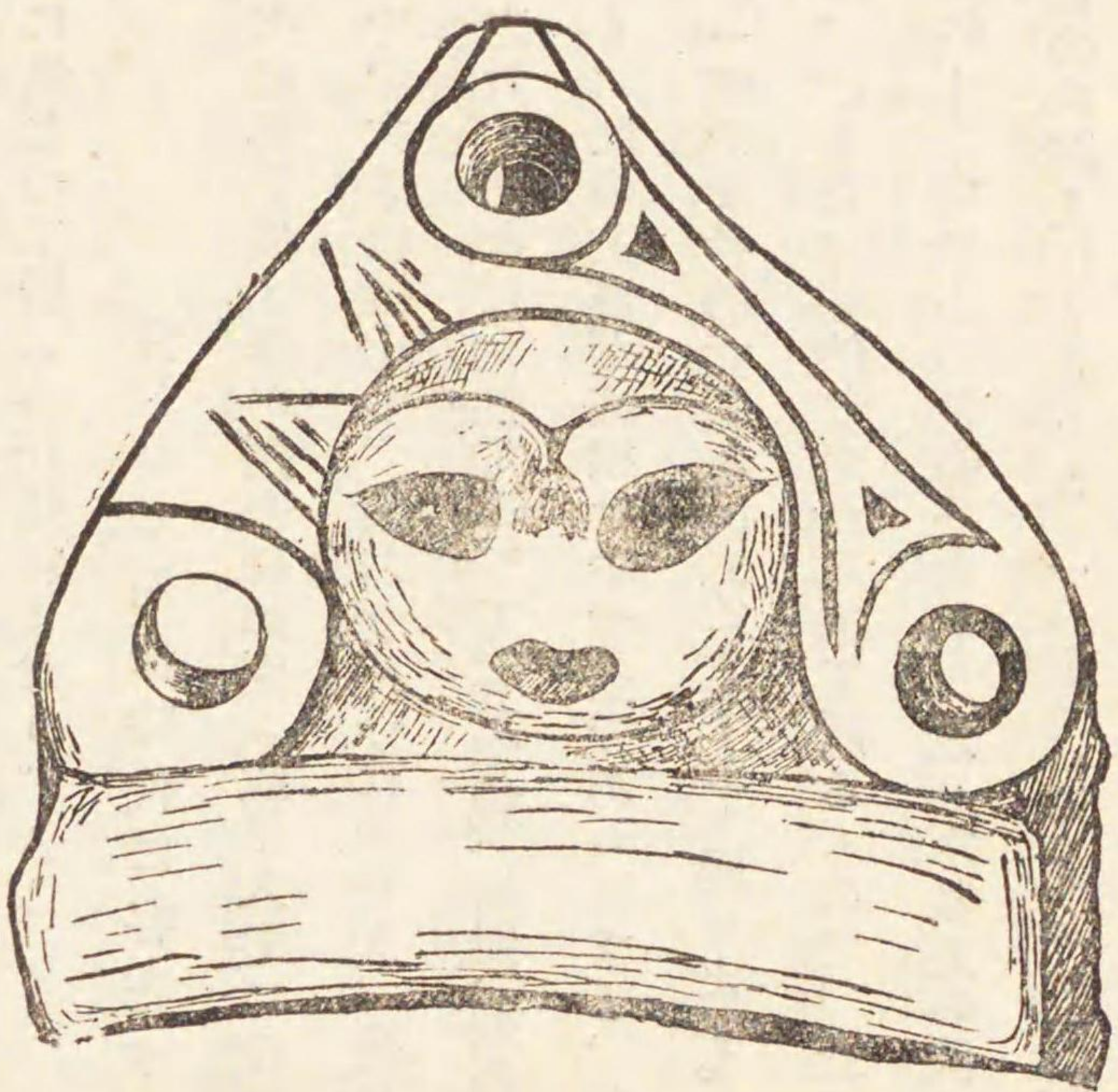
ので、土盤は、専ら自身に携帶したものです。また使用の點が互に異なつて居ります。尤も兩方とも人像意匠であるから、此の點から云へば、一寸同じ物の様であるが、這は單に人像、圖様、人の形であると云ふ上からの事で、其土偶||神像、土盤||携帶護符と區別せられて居るから、其の目的に於て大に異なつて居る事が知れませう。

三、日本石器時代に存在する顔面把手

次に厚手派土器の把手に顔面(或は人形)を現はして居るものがあります。這は即ち左のものが之れで、大さは縦七寸、横六寸八分ばかりが、發見地は信濃國諏訪であります。

之れも明かに女性であつて、其容貌、結髪、裝飾の工合でよく分りませう。這は單に『顔面把手』と申すも、此の土器が破損せず完全でありますと、其の土器の胴部は衣服になつて居つて、即ち土器其物が一種の女性の立體を明かに示して居ります。彼等が土器に斯くの如く女性の人像を示して居るのは、之また神祕的な考から來て居るもので、此の土器は他の實用品としてよりも、實用以上、何か神祕的——宗教上の色彩を有し、之を宗教上の儀式の際などに使用したものであるまいか。斯んな例は他の未開人にもありまして、近くはアイヌの熊祭の際の器具、乃至はギリヤーク、ゴリド、マンゲンなどの宗教的儀式の際の器具は特別な神祕的な彫刻を施して居ります。私は厚手派土器顔面把手のある土

器は斯くの如き宗教上などの儀式の際に専ら使用したものと見たい。



手 把 面 顔

兎に角之にも女性が現はされて居るのは、彼の土偶や土盤の例と同じく、等しく此の女性は女神と關係を有するものらしく思はれます。私には此の點に於て、之を女神式意匠と申したい。

四、女神信仰は種族的？
群族または家族的、氏族的？

以上の如く女神 (Goddess) の表現が、彼等の遺物の上に存在して居るのから考へますと、當時彼等の間に女神信仰 (Cult of Goddess) の行はれた事が推知せられます。けれども茲に注

意せねばならぬ事は、此の女神信仰は單に或限られた家族 (Family) または限られた或氏族 (Clan) の様な、狭い間にのみ行はれたのである？ 將た或家族や或は氏族よりもモット廣い部族、群族 (Group) の様な間に行はれたのである？ 尙ほ一層廣い種族 (Tribe) の間に行はれたものである？ 之は先づ

大に研究して見ねばなりません。

之に就て考へねばならぬ事は、當時彼等に部族や群族があつた？ 否？ の問題であります。此の問題を解釋するには、どうしても彼等の遺蹟遺物の状態から推考せねばなりません。先づ彼等の土器を考古學上から見ると少なくとも之を厚手派土器、薄手派土器、乃至は出奥派土器の三派は存在して居ります。そして這は又各々特色があります。尙ほ是等三派が各々混在し中間の亞派を形成して居るものもあります。私は此の基礎たる殆んど原色の三派は、群族の相違と思ひます。しかし各群は各々同じ民族であります。

先づ土偶の存在分布の状態は如何？ と申すと、土偶の分布は美濃三河以東、關東や甲州信州に及び更に、奥羽北海道の南部に及んで居ります。一方飛んで備中にあります。さうすると女神の信仰尊拜は決して或限られた家族や、或限られた氏族のものでなく、殆んど彼等種族の間に行はれた信仰の尊拜と見ねばなりません。即ち明かに女神信仰、尊拜は彼等の大きな Tribal religion であると申してよろしい。

次に女神護符の信仰區域は、如何？ と申すと、即ち土盤存在分布の區域は土偶の其れほど廣大でなく、其範圍は關東から奥羽でありまして、關東でも武藏、常陸が最も多く、他は出ない所もありま

す。又甲州信州(一二を除く)は殆んど存在せず、三河遠江等又之が一つもありません。さうすると此の土製護符の行はれた區域は狭少であります。而も之が存在する場所は、主として關東では、薄手派土器の存在する所のみで、厚手派土器の存在する所には殆んど無いと申てよろしい。奥羽には所々に之が存在して居ります。さうすると、此の女神護符の行はれた範圍は群族に限られたものであらう？ 這は他日の研究を要する問題であるが、兎に角其分布は土偶の女神よりも區域が狭い事は明かであります。更に顔面把手の女神的色彩の行はれた區域は、之れは全く厚手派土器の群にのみ限られたもので、即ち信濃、甲斐、武藏或は岩代等でありますから、其範圍は頗る狭い、尙ほ此の派で之の存在せぬ所もありません。兎に角這は厚手派土器の神祕的の物體でありませう。

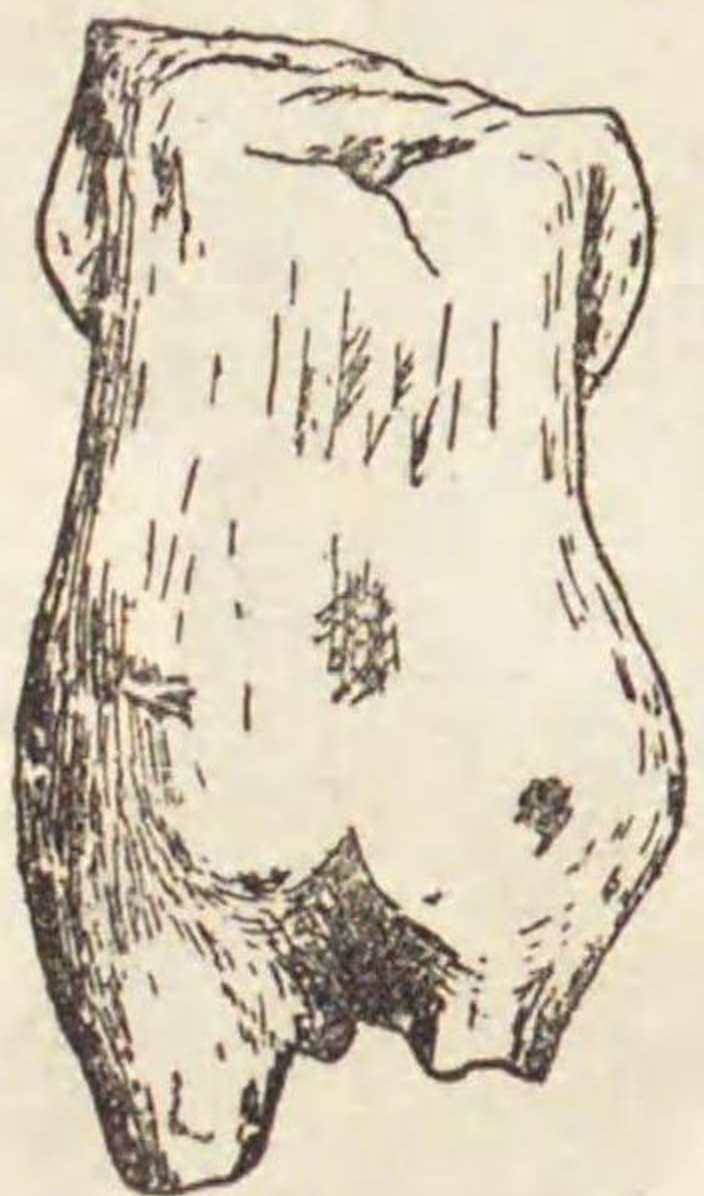
是等の土偶——土盤——顔面把手土器等を總括して考へますと、いづれの點からしても、當時彼等の中に、女神信仰のあつた事は明かでありました、之れと共に彼等の間には女權 (Mather-right) 母系主義 (Maternal kinslip) 婦長制度 (Matriarchy) 等は存在して居らなかつた？ 這は共に研究の歩を進めねばなりません。

タイラー氏 (John. M. Tyler: The New Stone Age in Northern Europe. 1921) は其書中に、『女神の信仰は新石器時代の特徵なり』と云はれましたが、日本の石器時代の民衆も亦此信仰があります。

五、歐洲新石器時代の人形



(四)



(三)



(二)



(一)

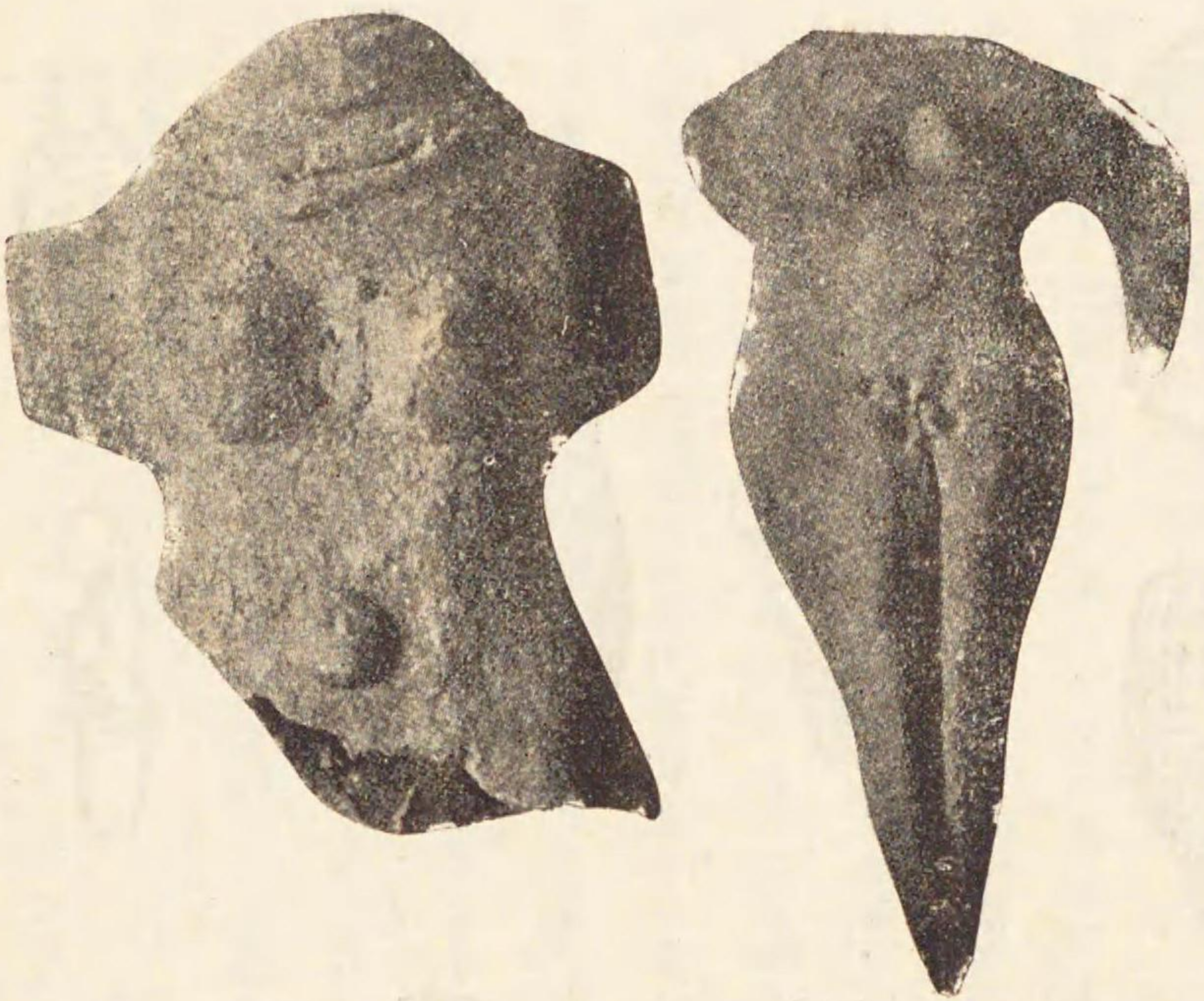
歐洲古石器時代女性人形

歐洲の古石器時代の、主としてオウリナセア期 (Aurignean)、即ち馴鹿時代には、石製または象牙製の人形が存在して居りますが、是等はいづれも女性でありまして、其の容貌乳部の突起や腹部の肥満、さらに臀部の發達等の如きを示し、女性の特徵をよく現はして居ります。是等の人形は、よく新石器時代や其後の時代の土偶の女神と、よく似て居ります。そして互に女性を作る事を好んだものもよく一致して居ります。

(一)は Brassempouy 發見で、象牙製、大さは四仙迷。

(二)は Willendorf 發見で、ovine 質石灰

岩、大き二十五仙迷。(三)はブラツセムブイ發見で象牙製。(四)はMenton 附近 Grimaud 發見で、滑石製。



ア ナ ウ の 女 神 の 土 偶

六、歐洲及びアナウの女神
今試みに古代歐羅巴及び西亞細亞方面に於ける女神信仰の事實を茲に一寸参考として書いて見よう。先づクレト島のミノアン時代遺物の中に女神があります。エジプトでは Isis 女神と其仲間の Hathor があります。女神の信仰は小亞細亞を通過して廣く行はれました。假令ば、デキアナ即ちエフェシヤンスに於ける Artemis も之れ、アナトリアでは Matar ippo ヒアット大女神も之れです。極東アスタルテにも此の信仰が行はれ、更に露西亞トルキスタンのアナウにも女神信仰がありました。此の後者は女神像もあつて、這はバムペリー氏が之を發表せられました。此のアナウ

の女神は地中海方面の其れと深い關係を有するものであります。此のアナウの女神は茲に示す圖が之であつて、這は日本石器時代の女神と、偶然によく似て居るではありませんか。尙ほ極めて古き時代に、ダニユープ、バルカン、ツロアド等からフリギアのエーゼアン殖民地等にかけて女神の信仰が行はれて居りました。

原始的の女神像及び之に伴なつて、ギリシア式の彩色した土器、螺旋紋様の三項が等しく新石器時代に東南歐羅巴の各地方に共に行はれ、また是等が Pre-Mycenaean 及び Mycenaean 兩時代にかけて、地中海の東部沿岸に行はれて居つた様です。バットミル(サラゼボ、ボスニア附近)、ヒラサルリツク(トロキ)の間に、以上の遺物が發見せられました結果、遂に是等地方に其の當時、互に前ヘレニク人とケルト人との間に、交通の道の開けて居つた事が知れ、女神信仰も従つて分布して居つた事が知れて來ました。

東部歐羅巴、小亞細亞の或地方や、さてはエジプトでは新石器時代、文化の頗る強い色彩ある中心地であつたらしい。尙ほ稀れには、北方のボヘミアや、ツリンジアに其痕跡があります。ペラスジツクアテンでは、女神アテナは常に高い位置に立つて居り、ヘラやペラスギでは、大女神となつて居りました。彼は征服者アケアン人の侵入と共に、彼等の酋長共は土地の女王を娶つた結果また其宗教上

の信仰は一變し、即ち彼等の男神ジュースは、土地の女神と混雜しまして、最初の信仰思想は消失しました。

更にギリシアと地中海沿岸との古代の信仰に就て申ますと、佛蘭西の海岸を越え北方に行き、イギリス及びデンマーク一帯、即ち考古學上の所謂巨石遺蹟 (Megalithic Monuments) の存在する地帯は、殆んど當時一民族の住まつて居つた様です。そして此の地帯に於て女神 (Female Divinity) の小像や、其彫刻した物が發見せられます。此の女神存在の事實から、是等の地方はまた地中海方面の文化と連続せらるゝものであります。けれども東南歐羅巴のダニューブ溪谷の周圍の地方 (ククテニ、チャブラニカ等) に女神の小像は極めて少ない。

以上に據て見ると、地中海を中心として、其左右に古い昔に女神信仰があつて、其シムボルとして女神像が作られた事は、殊に注意すべき事でありませう。

七、日本の女神と歐洲及びアナウの女神

我が日本の石器時代の民衆には又女神の土偶 (或は石偶、木偶) 土盤等があります。斯の如き新石器時代の當時に女神像 (よしんば玩具としても) の存在する場所は我と最も接近する亞細亞大陸の朝鮮、滿洲、蒙古、東部西比利亞、支那等に於ける同時代の遺物には之まで發見した事は無い。さうす

ると是等女神像 (男神としても) の存在は實に我が日本の遺蹟のみであります。そして此の女神信仰及び女神像の存在は不可思議にも、中央亞細亞のアナウから其以西の地中海及び歐羅巴の或地方 (巨石遺蹟存在地方) の其れと最も類似して居ります。加之、日本の石器時代の紋様に螺旋 (Spiral) 紋様に類似する渦卷紋様や赤色に彩色した土器 (Painted pottery) があります。是等の事實及び状態は何と互によく似て居るではありませんか。歐洲の學者は、以上の地方で女神信仰の行はるゝ所には、必ず之に伴なつて螺旋紋様と、彩色せる土器とが存在し、此の三者は互に離る可からざる關係を有すると申して居りますが、日本にも此の三者が伴なつて居ります。殊に日本石器時代民衆の渦卷紋様は、日本附近の同時代民衆の紋様に無い。是等はいづれも幾何學的紋様であります。さうすると此の三點の事實は、日本附近の諸地方よりも反つて、アナウ及び其以西の歐羅巴地方に類似點を有つて居ります。這は吾人の大に注目せねばならぬ所であります。

八、結 論

女神信仰の起るのは地母 (Earth mother) に關係を有します。即ち這は earth, vegetation 乃至は fertility の神靈の活動を尊信するもので、假令ば彼等は收穫を統轄するとか、秋や冬が終つて春陽が再び現はれ生るゝとか云ふ極めて幼稚な思想を形成するもので、之れやがて原始的宗教となるのであり

ます。そして原始人の社會では専ら女子が地上の植物性收穫から日常の事までなし、男子は専ら狩獵と戦争にのみに従事する、ですから女子には土地から生ずるものに最も深い關係が出来るのみならず、之と共に子供を産み、又之を育つと云ふ滋しみ等もある諸點から原始社會では、どうしても男子よりも女子に總ての事が親しみがありません。殊に彼女の神祕的と土器作りや當時の手仕事、手細工をする上から、遂に知らず識らずの上に、女性に男性より偉いものとなり、之が地上の天然物、出産、育兒等と結び付き、さてこそ女神の信仰が出来たものであります。そして這は幼稚な農業なるものが始めらるゝと、一層其色彩が濃厚になつて來ます。

熟々原始社會を見ると、女子は今日よりも比較的高い位置に立つて居ります。即ち最初の大抵の發見者で又創作者は彼女であります。彼女は家内の技術や職業の發見者であつて、また創作者であります。彼女は最初の紡績者で、また織物師であります。彼女は最初の本草學者で、家内の醫者であります。巫人でもあります。彼女は精巧な土器作りであります。彼女は子供を産み、また之を養育します。彼女は男子の狩獵で動物性食物を捕ふるが如く、深林に這へつて植物性食物を取ります。また此の植物の果實を植ゑたり、木の棒の先で農業をします。之れが耕作もしますから又農夫であります。又收穫物や器物などを交換するもまた彼女の務であります。斯くの如く原始人の女性は殆んどすべての

職業をいたします。されば従つて比較的機敏な頭腦の所有者であります。

女子がはじめて農業をしたらしい極の最初は近頃の研究では古石器時代の Magdalenian 期で、此の時期の遺物として偏平な環石の中に孔を開けた Perforated Stone があります。之は其の孔の中に木の棒を通し、棒の先で木の根や草の根を掘つたものです、之は Digging Stick と申します。此の仕方はプツシユマンでは今尙ほ土俗として見る事も出來ます。日本の石器時代の遺物にも此の石器があります。這はまた Digging Stick でありませう。

初步農業の成立は、一層 Earth mother の信仰となつて來ます。そして這は土地の總ての果實や、恐らくは總ての生活 (All life) 總ての出産 (Birth) を與ふるものと考ふる事になります。這は女神を生み、之れの信仰となり、此のシムボルとして土偶などが出來、尙之れが護符であり、女神意匠ともなつたのでありませう。

此の事實から考へて來ると、我か日本石器時代の民衆は、従つて Earth-mother の信仰があつたものと思ふ、そして女子は今日に残して居る土器作りの主人公として實に絶大の技巧を今日に残して居ります。そして彼の女神の土偶を作り、女神の土製護符を作つたものも彼女であります。否な恐らく多くの製作品は彼女の手になつたでありませう。彼等信仰の女神を奉侍し、且つシャマン巫として従

事したのも彼女でありませう。

日本石器時代に於ける女神信仰は、尙ほ他の之と附屬したもの（女子の所有權、社會の階級、經濟上の位置等）と共に、研究せねばなりません、けれども這はいづれ他日、自分の考を發表して見ようと思ひます。

（大正十一年十一月記）

九 『武藏野話』の著者と有史以前の石棒に就て

一、序 言

武藏野はアイヌ派石器時代の遺蹟遺物に頗る富める所で、全國中恐らくは此處より他に彼等の遺蹟遺物が斯くの如く無數に存在する所はあるまい。武藏野の地は實にアイヌの有史以前資料の貯藏地、または陳列場と申してよろしからふ。

武藏野は以上の如き土地であるとせば、モールス氏が大森に貝塚を發見し、其の論文として *Shell mounds of Omori 1879.* を發表しない前、ズット徳川時代に溯つて本邦人として是等の遺物に注目した人があつたであらう？ 這は面白い問題でありませう。であるから私は之れから此の事に就て記して見やうと思ふ。

二、徳川時代有史以前遺物の感想

武藏野に石器時代の遺物が多い結果、此の野の人々は多少之に注意して居つた様です。假令ば包含地から土器が掘り出さるゝ場所があるとカワラケヅカと云つたり、貝塚のある所をまたカヒヅカ——カ

武藏野話の著者と有史以前の石棒に就て

ヒバタケなど云つて居りました。殊に大きな石棒に就ては其形状の異様な所から之を發掘して神體とし、または其れから地名なども出て來て居ります。此の石棒を祭つて居る神社小祠の多かつたのは即ち石器時代遺物の豊富なる關係から遂に斯くの如き尊拜の風習が起つて來たものと思はれます。けれども是等は當時の人々が遺物に接觸してから起つた感想で、別に學問上の意見として見る可きものではありません。

徳川幕府の人々にも多少之に注意して居ります。即ち幕府は林大學頭の建議に依て、文化七年から役人を武藏野の各地方に派遣して、村の書類や口碑などは勿論、また實地に調査して彼の『新編武藏風土記稿』が公にせられました。這是武藏野に於ける大切な記録で、此の中に各所に石器時代の石棒を所藏する事を記し或は之を圖で示して居ります。是等は此の野にいかにもアイヌの遺物に富むで居るかと思ふことを明かに示して居ります。私は幕府の人々が其稿中是等の石器時代遺物を附記せられた事に就て頗る感謝するものであります。

三、鶴磯先生の石棒觀察

茲に武藏野の石器時代遺物に就て、學問上から注意し之に對して聊か意見を述べた人があります。這是即ち彼の武藏野學者として尊敬すべき鶴磯先生であつて、其の文化十二年出版『武藏野話』附録

中に之を記して居られます。此の附録と云ふのは同書三篇であつて、秩父郡の部であります。そして氏の石器として記るされました物は主として石棒のみであつて、他は一も記るしてありません。假令石棒ばかりとしても、氏が之を圖記したのは自から武藏野に居を定め、親しく之を實地に各所で見たからでありましたやう。氏が兎に角之に就て眼に觸れ、之を奇なりとして、自からの説を附せられたのは、當時から云ふと實に卓見なりと申さねばなりません。當時石棒に就て廣く一般に迷信的感想の行はれて居た中に、獨り是等の迷信を眼中に置かれず自説を立派に立てられたのは、學術上から實に敬服の至りであります。

氏の引用せられた石棒は、大宮の南一里日野村の棒の神（五尺二寸九分）熱川村内猪狩山麓の熊野祠の石劍五本、同村神龍寺内石神丸石（一尺程）大瀧村内東林寺の雷の撥、大野原の石棒（一尺七寸五分）、荏原郡鷓木村光明寺雷斧（二尺三寸七分）、豊島郡下石神井村内石神井神祠の石神（二尺餘）葛飾郡立石村熊野祠の石神（二尺五分）等であります。氏は是等の石棒を見て實に奇怪に感じたであらう。即ち這は何に使用した物であるか？ また之がいつの時代の物であらう？ などの疑問は起つたでありましたやう。そして氏は之に對してどんな説明をしたかと云ふに、同書で立派に左の如き意見を記るされて居ります。

上に圖するは是皆往古の石劍にして海内に稀なる器なり、上世の墳よりいづる物にて往古うるく、しき比は本邦刀劍の具更になし、天の村雲十握などいへる劍、以前は鬪諍の具に木石をもつて製したるなり、即石劍にして天下の名器と云ふべし、今に蝦夷にてウカリといへる事あり、本邦擊劍を學ぶとひとしくツ、ウチ（槌打）として長さ三尺許の木にて製したる槌を面々の家に掛置鬪諍の具に貯置事なり、その槌のつかひかたまた打る、時の浮身を學事をウカリといふ、本邦の往古もかゝる事ならんかし。

氏は石棒を以て其使用法を鬪争の具の石劍とし、且つ其製作使用の年代を極めて古代に屬するものとし、しかも天の村雲十握の劍などよりもズツ尙ほ古代の物として居ります。氏に従ふと我國でも往古うるく、しき時代には刀劍の具は無く、其鬪争には木や石を以て製したもので、武藏野から堀り出す石棒は其時代の石劍であると申されて居ります。之に據て考えますと、氏は確かに刀劍の様な金屬器具の以前には木や石を製作使用した時代があつたものとして居られたのであります。之を今日の言葉で言ふと或意味に於て本邦にも石器時代（木石器使用時代）がある事となります。氏が石棒を斯くの如く思惟せられたのは徳川時代の學者として最も進んで居られたものと云はねばなりません。殊に往古うるく、しき頃と云ふのは今日の言葉で申すとプリミチーブなどと云ふのに當つて面白い。

四、アイヌのウカラとシユツ

氏は更に之が證據として、蝦夷（アイヌ）のツ、ウチを比較し、其の使用をウカリと對照して居らるゝのは頗る注意すべき事で、這是考古學（archeology）の事實を、また土俗學（Ethnography）の事實とを比較して居らるゝのは極めて進歩した説明の仕方でありませう。而かも此の比較が北海道のアイヌであるのは尙更感心せざるを得ません。

徳川時代の當時に當て、氏は石棒を以て天の村雲十握の劍よりもズツ前のうるく、しい太古のものとしたのさえ破天荒の新説なるに、尙ほ珍らしくもアイヌのウカリの様な場合に使用した器具と説明したのは極めて時代を超越した云ひ方と云はねばなりません。しかし茲に注意せねばならぬ事は、當時の氏にして何故にアイヌのウカリ及び其の使用棍棒を知つて居つたのである？ 私は先づ枝葉にわたるが、此の興味ある問題から決して見やう。『武藏野話』の出版せられた文化十二年（1815）の當時は恰かも徳川幕府で直接蝦夷地を開發せんとして、江戸から盛んに吏員を派遣して居つた時で、江戸では多少同地の事情を知つて居りました關係からして、氏はアイヌの状態などにも注意し、其風俗や旅行等の圖書を讀んで居つたのであらう、就中其の時に廣く讀まれ、また見られた林子平の『三國通覽』の其れや、秦億丸（村上島之丞）の『蝦夷島奇觀』の其等からヒントを與へられたものであ

る様に思はれます。前書は天明六年(1786.)に出版せられ、後書は圖版と記事とからなつて寛政十二年(1800.)に公にせられたのであります。そして前書は禁書となつて板木までも焼かれたが、後に寫本となつて廣く世に行はれました、是等の二書にウカレ及び其棍棒の事が圖記せられて居ります。假令ば前書には板本の四七枚の所に「スヅウチ棒、メカ打ニモ用ユ」と附記し、棍棒の圖が出て居つて、其の長さを二尺四五寸、太さを一寸七八分とし、「處々絲ニテ卷ナリ」として居る、即ち先端は石か金で作り、之れを木の棒にしばりつけてあります。次に後書では棍棒で互に争闘する様を圖し、之に左の如き説明が附けられてあります。

(ウカリ稽古の圖) 是は夷人いとまある時稽古す、大さ三尺餘の槌を人毎に所持し、家の内に掛く、扱皆々集り背に皮薦の類いを負打合て習練する也、此の地いまだ文字なく、しかれば喧嘩口論の後、負たる方にて詭證文の代りに所持する寶物を遣はして中直りをする、是をツクノイと云、又扱賊女犯の罪も又同じ、其事の輕重によりて、寶數種をとりて許容す、扱寶を出さずしてウカレせんといふ時は双方親族あつまり先罪を犯したるものを三度打、次に相手のものも打出なり、打れて安全なるとツクノイに及ばず、其夷人生質の強弱によりて唯一打にて轉死するもあり、又半死及病人と成もあり、浮身練達の者は幾度打るゝとも安全なり、此ゆへに平生の稽古怠りなく勤

るなり。

(ウカリ眞行の圖)ウカリする時は双方の親類集りて式のごとく三度打事なり、女は笹の葉に水をつけ打かくものに振りかけくへウタゲ(時の聲なり)あけて補助とす

氏は是等の圖記からヒントを與へられて、石棒を以て之れであるとせられたのであらう。さて此の棍棒は『武藏野話』にはツ、ウチとせられて居るが、實際はアイヌは何と正しく發音して云ふかと、金田一文學部講師に聞きますと、這是シュツ(shutsu)或はスツ(sutsu)と申すさうであります。ツ、ウチは其誤つた音でありましたやう。さうして此の棍棒は私を以て見ると其種類が三種ほどあります、即ち其一は全體木から出來て居る物、其二は先を石とする物、其三は先を鐵とする物であります。

バツチエロル氏の The Ainu and Their Folk-Lore. 19. 1. に據るとウカレは ukara で、其第二章二七六頁の所に「男子は時としてウカラと稱する頗る奇妙な遊戯をする、這是寧ろ遊戯と云ふよりも苦痛なる練磨とも云ふべきものであつて互に war-club で打ち合ふ……」と記して居られます。今日はアイヌの間では之は、單に一種の遊戯の様になつて仕舞つたが昔はモット意義ある事でありました。其れは寛政の當時出來ました『蝦夷島奇觀』の文で推知することが出來ましたやう。バツチエロル氏は尙ほ其の An Ainu-English-Japanese Dictionary and Grammar (1905) に Ukara, n. Name of a game

in which the Ainu beat one another with war-clubs. jap. 遊戯ノ名」とせられて居ります。

バツチエロル氏は前の『The Ainu and Their Folk-Lore 第二章でアイヌが昔に穴居し土器や石器を製作使用して居つた事を證明する所に、其一七頁に先づアイヌの石器時代の石棒（石劔）と現今彼等の棍棒とを比較し、更に其次の頁では先に石を附けた棍棒シユツをも示して居ります。這は不思議にも文化十二年に『武藏野話』の著者に據て試みられた比較と同一であつて、互に其の意見の偶然一致して居るのは何と面白いではありませんか、而かも『武藏野話』の著者はバツチエロル氏より殆んど百年前に既にこの事を證明して居ります。兎に角這は頗る注意すべき事と云はねばなりません。

五、有史以前の武藏野と鶴磯先生

『武藏野話』の著者たる氏は、武藏野發見の石棒を以つてアイヌのシユツと比較したが、さて然らば是等の石棒を製作使用した者は抑も何者なるか？ と云ふ問題になつては、氏は之をアイヌ即ち蝦夷人であるとは云はず、之を吾人祖先の物とし、其年代を彼の天の村雲の劔や十握の劔の金鐵時代よりも以前の物として居らるのであります。されば氏は之を以て明かに吾人祖先の木石時代の遺物とせられて居るのであります。けれども氏にして今日にあらしめば、或は一步進んで石棒を以てアイヌの手になつた物としたかも知れません。そして氏は是等の石棒は古墳より發掘せらるゝものと考へて居られた様です。

文化から前、明和安永の頃に活動した『雲根志』の著者石亭氏は其石器時代の採集品は殆んど全く武藏野の遺物はありません、其の多くは美飛越より畿内九州奥羽等であります、何が故に氏の足が武藏野に及ばれなかつたかは不思議に思はるゝ所であります。この點に於て『武藏野話』の著者は、自分の居られた此の野で之を見、且つ之に向て其年代と使用とを説明せられたのは最も喜ばしい。果して然らば氏はモールス氏以前に於て武藏野に於ける有史以前研究史上、之を大書特筆せねばなりません。

（大正十一年二月記）

武藏野及其周圍 終

武藏野及其周圍



大正十三年九月二日印刷
大正十三年九月五日發行

▲武藏野及其周圍▼

〔定價金貳圓〕

著者 鳥居龍藏

東京市日本橋區鐵砲町六番地

發行者 磯部辰次郎

東京市牛込區早稻田鶴卷町三六二番地

印刷者 關根慶寬

東京市牛込區早稻田鶴卷町三六二番地

印刷所 早稻田印刷株式會社



發行所

東京市日本橋區
鐵砲町六番地

磯部甲陽堂

振替東京壹五〇五六番

宮崎安右衛門著	聖貧への思慕	洋六判	送料	金壹圓五拾錢
同	聖貧禮讚	洋六判	送料	金壹圓五拾錢
同	行乞十年	洋六判	送料	金貳圓五拾錢
關 弘道著	永遠に樂しく生きよ	布六判	送料	金拾貳圓
大野法道編	さへられぬ光 <small>(法然上人聖語類纂)</small>	布六判	送料	金拾五圓
岡本一平著	泣虫寺の夜話	上六判	送料	金壹圓八拾錢
同	世界一周の繪手紙	布六判	送料	金貳圓五拾錢
湯川大三郎著	知つて居らぬばならぬ實用常識	並六判	送料	金六拾錢



